惜陰老録

五

昭和八年七月上浣起筆

特別
イ4
1919
453

176718

惜陰叢録

昭和八年七月上浣起筆

○遠の日露戦争に於ける日本海海戦の勇士三四村武雄氏の自著江戸の白波」を買ひ求め盗賊体を戦慄せしめたること、大分数へることがある。支那の言葉に為れば鉤を盗むこと誅せられ国を盗むこと諸侯となるが如く支那を盗むこと諸侯となる我国の事実を以て支那に於ては一度国を盗むこと諸侯となるものがある。我国時代の為政者を見ること多くは国流捧である。強い泥棒が弱い盗棒を略することを繰返しれる過きない。支那は今日のようなまじくこんをやつてゐる。弊害和分の無つた時代殊に奪略を事とした我国時

38 9239

代に於て、事ふる長もろく、社会生活を営む唯一の法としては掠奪のみを生命の外に無つたともいふべく、所謂る野武士と呼ぐべき武力があつたから、従つてギヤンゴの団体とも心つた。こんなものの統制もあつたのだ。さうして鎧甍をすることが容易でもうつた。石川五右ヱ門などゝいふ巨賊も、後世まで名が残つてゐるが、あんなものは堂々たる第宅を持ち多数の従属をみやし、白昼一区を立派な行列をして歩いたと云はれてゐる。こんなどは流棒団体の頭領と見做かるべき筈である。向坂右門とゝふものも大体り団体をみて五右ヱ門を譲らぬ巨賊であつたと云はれてゐる。京都の古着市の祖なる

榛原製

べき、高津基四郎も大数の泥棒を掠奪する団体の頭領であつたのが、家康の毒を以て毒を制する略策で、こんな特権を与へて古着の売買を許生活の道を与へて、毎日市中を歩かせ他の泥棒や悪漢の偵察をやらせたのだ。北基内は刑死を免かれたが、石川五右ヱ門とても斯く利用したら、役に立つたかも知れないのである。戦国時代には光賀がありて、以上の如きギヤンゴを義収容してゐた。武将もある。それは何人の者のことを云ふ時の別働隊として仮装に用ひ、敵陣を焼いたり、敵の財物を掠奪せしめたりこんが浦法の機関であつて、北の機関を亂波と云ふ赤土

波ともまた比、風磨と云ふものが其の巨頭であつたと云ひ
ん、北の系統のものが戦時は珠重されて方々に利用
されたこれは戦時よりも限つて利用したのかもしれん
が、戦闘が済んだら彼等は生活の為めに手を収める
譯に行かなくなつたから相達ないに敵国の掠奪いつ
だつて構いやうなこと後に変婚のずやつたあ
と思ひんの毒とあつてえを利用するのもあるから、
ギヤンゾの跳梁するのも無理のない譯だ。
苦しの戦場の精神が盛んに行はれたと云ふが却を
かけてえを考へと、いさ争ふ時とすると、武器も既
に無く裸体で戦つたこともあると云ふのである。北の
裸体の奴が、笑の兵器や甲冑を得ん為めに一

横原製

生命の働きをやるのが強くつて、強奪が
はた奴に手柄が多かつたのは、必竟敵を殺して武器を我
ものとなん悲しがあつたからの事だ。戦場に無秩掠奪が
行はれ屍体は大概裸にされて一物も残さない。尚ほ精
神のない屍体は、皆の身体を何もかなく
まで剥ぎ取つた。他人のものをかな
賞物をのけるもの、個数をかけるものを減ず者
めまへ、それを強奪せねばならぬ。戦時附
近のものが種々の宝を受けたれば、戦時の事ひ
あるが、多くの精神かそれ家をもつてゐた。
蜂後賀かたが泥棒であつたと称して、今の蜂後賀家
七代の不名誉な者を負はされてゐるが、実は亂波の親

方ぶりの比。武蔵坊弁慶と云ふ大入道い宝物の人ひな
いそぎこんとあるが、なんぞ人間も南時随分なつとれる者ひ
ものの為めの義経に物服したから善悪のようもあるが、矢
張魯珍珠形の悪僧もあつたのを知れぬ。南時大き
な寺々の中に武士が恐れるほどの悪僧がゐる
ものの弟慶なども随分あばれをやつたと云はれてゐる。義経
時代まはどこの寺の制札なし、乱妨禁止が書かれてゐ
る。あの乱妨の二字は掠奪と解せねばならぬ。それを
防衛する為めに山つの僧徒の武装せねばならぬように
なつた。さて北の僧徒も随分物騒の族であつた。
昔しの掠奪のようなく大笑ひ寺々の鐘なども
ずゝと重量のあるものは時々盗まれた。それが為め

榛原製

る盗難を恐れて鐘を霞ヶ浦に沈めたものもある。昔奈良の三
井寺の鐘を引き摺つたなどと云ふ話も残つてゐるが、他
々の大寺の中に三流の鐘があつたと云ふ。
他の寺を焼き拂つて其鐘を自分の菩提寺の物
にしたことも大切徳とした得たものもある。事実いろ
くの寺の鐘が京を捨へてゐる京都の清水寺の
鐘が他の道成寺のものあり、唐隆寺の鐘が本願
寺にあり、西寺の鐘が東福寺にあるなどは実
例の深いものあるが、ソンな物語は皆掠奪を語る
ものであらうか。
馬を盗むことも行はれた。それの練り馬の走ひ、其他名
がその名残りだと云ふが、馬を盗む目的の中に、それを

強んで金を強くつばかりでなく、いろいろの物品を運ぶ用
をも供し、或は侵略或は逃走の用をも供した。これの機
械で種々の悪事を働いたことは勿論である。
野武士と云へば、仕事に困つた上に、失業者また
浪人が多く、浪人は扶持を失つた士であ
つて、それが活路を得るために人の財産を奪つたり、
人を殺したりした。武士道とは似て非なるものが
勿論ある。武人と云ふものは云はば合法的であるが、今
日のやうな優しいものであつた。浪人も一歩踏すると
武人となるのだ。これも国体をなして人を傷めるの
時代を強奪したりしたり、道中に働く大泥棒
などもあつた。惟れ坊みな武人とうそぶく。文盲つた

榛原製

こゝろのかがやく前ぶれこれを長所を進ぶ赤毒業を
も無くしたもの。伊藤者の義者を見れとこれも
みる。
寛文九年十二月一日に京都の長谷三位と云ふ公家の
伝欽が泥坊の頭となつて前月の二十一日の夜の暗に
数人しもとの騒動の紛れに泥棒を働かうとしたが
これの決行前まで覚しした。公家でもかのコンナ事も
試みとしたのいつも抱えりの手あとして火付が行れ
た、江戸を焼く火事があつたのは、多くは盗人の仕業
であつた。火災に乗じて火を他に遣き大きなる
とすることを「継火」と云ふあれが、武人共が多くこん
をやつた。

○此頃人の噂に聞いるくの話が出たが主原の
芸妓おしゅんとゝあの出代び有名な妓で後ろ引手
茶屋山口巴の主婦となつたが自分は山口巴もいつて
居るし、おしゅんもよく知つてゐる。北妓は此年頃
なるとうばが奥のまどろしい年長で殆ん容色の優れ
た女でないからうばが蔵者らしいせであつた。山口巴のまゆ
とるつれ任侠ゝゝゝ就て何もむらくつれかい
言ふ事ゝゝのレーボルンと再度日本へきつて来れ
時其の妻となつたことである。どんなことゝゝ
レーボルトは思ふことをつれりかゆることもあるとも
レーボルトと手切のゝゝゝ帝国ホテルの
横山孤一郎が斡旋して三万円を出させ、

樣原製

て山口巴の暖簾を買つたのだと云ふ。
芸者十数の新の宴会を容色度の高く入りでいつ
心容色がおもしろ消ゆ一の第一の
ことがちうとをきらあと、あ時の藤枝「政」が之く
隠れて敬養衛したとゝあこと云ふ事くもあるが政
の娘が容色の妻であつたとゝ云ふ初めて少女へた。
此女はるくくの美人で才子でいどく容色の高く
入つた、賛沢の女で衣服や装飾品などゝ美美
と素し、容色強と後集ゝ二家の妻ともうと終つ
たとゝあが宴会の話と残つたものゝ容色が
主流ゝ美男子であるのゝ側と此妻の居るの
を見ると全く偽でも見ることくであつたと

大隈侯子爵夫人は五十日を経て（）して自身の遺物を近親
に分ち与へもされたが所謂の早稲田大学の未だ
何等の仕向けもない、然るに子爵の自い常の早大を念とした没
する時も武市町田らが任常長との間を仲介した
五番目の高附を子爵にしたが、然子も為に死人
としのあるのに、その遺志を動かすや、こんな高附
は世くつて見ばん分つれたるに、然子の遺産
六十五番と第七が四三十番目は結婚夫人の資産
を然子が陸軍大臣の他の三十番目は然子の
為に使ひとの他の人は信常長に渡すこと
然子に渡すとのあるが然子まだ俗物を分とする
人であるのが弱き金の出ひやうもなく年々の利子が

複原製

かかつて六十五番目に寄附したのである。
○天竺方面の十二雲根図の大きな軸を得た自
分は石を好む癖があつて往々石の図を描いて
の画家の石を書きすぎるが、方々の書き方は
るが、方々の書き方は墨を潤ひがあつても霸
気を脱してゐる。姿態の皆異つてゐるが、そんな
趣がある。往々や谷でもあしらつてゐる
変化の妙は、石の堅いことを知る者は必ずしも
堅い京に力点を入れて描くを及ばない。方寸の樹
し方の業数が高くして、繁張の業を揮
つて居るが、チヤンと出来て居る。巻尾の跋十
年白雲山房と宮崎寅蔵とあつて、十二幅皆別々

の印が捺してあること恐らく長崎奉行所の印
があるの

○貴方が此の実業と日本の俳優記載してある俳優作家
の内に朝吹英二を書かんとしてゐる所く石の図を
獲たのだ、思ふ朝吹の事を思ひやつて、石は醜石と
云ふ悪名を擔つてゐるべき、えい形貌のことを云ふ
のだ、云ふ事すべんを連想の型が花さんであるもだん
さん、切様まだ醜石自身もどんな美子のあ
るもだんさん、一概れて石は唯に堅いこと味のな
いことと看過しまるべきもらい朝吹は其の面貌の
醜で看過(つた男であつたが其の為人や人格に欠つてい
る面とは全く反し、あんな愉快な氣の利いた、深切の、

複原製

氣前のよい、誰れでも愛けのよい人物であつたことは
思ふに、あれは石を比すること霊石である。此は誰れやら
の話で、朝吹を狂歌の名がある。それは萩の本アニマ
ルと云ふこと、これは花カルタのやつで萩の下に猪が書か
れてある、朝吹の顔は其の猪を似てゐると云ふのだ
此諧名があるとは実に(醜)顔は本人の自認する
ところだ、石が醜と云はれることを分としてゐると一般である
ところを思ひ合つもて、ここに朝吹を言ひ及ぶのだ
あるの

○正米利加が禁國禁酒にして兎も角も十数年を経
過したことは世界に比類のない面白い出来事である、
然るに実、陸禁酒の結果が強盗を及ぼして殺

言が續出したのである。これを就て思ひもしないと感じた一事がある。
例の大富豪ロックフェラーの一家は祖父の時代から
一滴の酒も飲まない家であつて、當時は禁酒法通過
を熱望の餘り百萬圓以上の金を寄付したことも
あるが、今實行されて失敗を悟ると、全米國の
新聞紙上に公開狀を發して禁酒法廢止を提
唱した。他人の言ふことを聞かず、此の禁酒の
熱心家から斯る說が多くなつたのだ、ここに此人生天
堂センセーションを起し、ち天靈靈の感が
あつたとかあるが、たしかあらう。
○今閑天彭を出て帰ると云

榛原製

琴書才得常殘年萬里海來翠海烟忍見窮氏流陸賦厭聞說
客競論邊午簾閒續懷君夢夜燭重賡贈我篇風月江南依舊
好亂離相對復留連
休話劉郎前度年紅桃紫陌夢如煙市塵半隔苔牆裏鵑語忽
飛雲木邊高閣啣盃尋勝事曲軒移榻讀佳篇神交不管滄波
杳猶覺吟情日夕連

重晤天彭先生賦呈　　廖寒松

相別相逢隔四年相逢如夢別如煙蟲沙轉眼劫灰裏鷗
鷺重盟桑海邊歸國君猶扶大雅銷愁我尙托詩篇交因
文字情偏重從吏禁分氣亦連

楚燕游藁二十首

今關天彭

寒松博士有贈次韻却寄

琴書未得寄殘年萬里淩來碧海煙忍見窮民流陷賊厭聞說客競論邊午簾閒續懷君夢夜燭重賡贈我篇風月江南依舊好亂離相對復留連

休話劉郎前度年紅桃紫陌夢如煙市塵半隔苔牆裏鵑語忽飛雲木邊高閣啣盃尋勝事曲軒移榻讀佳篇神交不管滄波杳猶覺吟情日夕連

重晤天彭先生賦呈　　廖寒松

相別相逢隔四年相逢如夢別如煙蟲沙轉眼劫灰裏鷗鷺重盟桑海邊歸國君猶扶大雅銷愁我尚托詩篇交因文字情徧重縱使襟分氣亦連

瞻韓有幸幾經年別後相思隔海煙入夢魂飛三島外離羣雁叫九天邊攀鱗不解趨時態求友長吟伐木篇投轄多君留十日江南風景好流連

同文書院問山田岳陽病

藥氣沈沈午寂生綠陰鳥語雜蛙聲枕頭又是江南景無奈詩人病後情

南京雜題

玉液如凝暖靄籠浴來神骨兩相融振衣試過將軍墅應有姦豪繫此中湯山溫泉

少年三甲才名盛老作斗南騎鳳人白石金文何烜赫黃書一卷有精神譚組庵墓

鎭龍護國二千年王氣金陵鬱尙纏塔下殘陽如有意照吾默誦馬臺篇靈谷寺誌公塔

津浦路途上

何處當年戲馬臺英雄草澤浩歌催回看薊北風雲色橫斷中原得得來

過徐州飛雹甚寒

暑熱忽消寒色開單衣重襲面如灰梅天六月徐州路驚見狂飆卷雹來

過濟南知昨夜徐州有匪警

閒檢奚囊刪舊詩旅途艱險亦平夷濟南驛上聞人語昨有徐州赤賊窺

入北平

滿野牛羊曉靄晴燕山積翠復相迎行人不管兵甲事車上橫肱入北平

北海公園五龍亭

白鷺驚飛隱綠楊田田荷葉水風涼三年不到龍亭上獨立亭陰賞夕陽

中央公園春明軒

古栢參天生碧霧柘榴映日吐丹榮幽軒啜茗敲詩坐訝聽游人喚我名

人病後情

南京雜題

玉液如凝暖靄籠浴來神骨兩相融振衣試過將軍墅應有姦
豪繫此中湯山溫泉

少年三甲才名盛老作斗南騎鳳人白石金文何烜赫黃書一
卷有精神譚組庵墓

鎭龍護國二千年王氣金陵鬱尙纏塔下殘陽如有意照吾默
誦馬臺篇靈谷寺誌公塔

津浦路途上

何處當年戲馬臺英雄草澤浩歌催回看薊北風雲色橫斷中
原得得來

過徐州飛雹甚寒

暑熱忽消寒色開單衣重襲面如灰梅天六月徐州路驚見狂
飆卷雹來

過濟南知昨夜徐州有匪警

閒檢奚囊刪舊詩旅途艱險亦平夷濟南驛上聞人語昨有徐
州赤賊窺

入北平

滿野牛羊曉靄晴燕山積翠復相迎行人不管兵甲事車上橫
肱入北平

北海公園五龍亭

白鷺驚飛隱綠楊田田荷葉水風涼三年不到龍亭上獨立亭
陰賞夕陽

中央公園春明軒

古栢參天生碧霧柘榴映日吐丹榮幽軒啜茗敲詩坐訝聽游
人喚我名

豐澤園訪膺白總理

一笑何辭入火阬謝安竟不負蒼生半壁乾坤親整頓要使黃
河徹底淸

汪袞甫公使招飲席上有贈

海鶴雲龍絕代姿衣冠玉帛想當時著書兀兀嘔心血不怪近
來無一詩汪袞甫公使

醫人不易濟時難滿地烽煙帶淚看風月燕山今尙好縱談忘
護綠陰寒湯爾和總長

大鵬飛去日如年此日我飛機來平兩回近席涼花澹欲煙歷指扶桑名士
歲問君掌故及神仙陶念新君

過舊居

訂得燕山風月緣有時把酒問靑天庭前桃李成陰否一夢春
濃十六年

聞布施不辱歸國悵然有作

浮世茫茫寧有期一朝分手隔天涯金臺今夜月如玉却憶靜
陵相對時

夢中得一絕

雨雨風風春欲晚山山水水跡猶輕蟠桃實熟三千歲回頭白
雲空復情

京滬路途上

柳風麥氣午來涼到處牛眠日自長萬頃平田新水滿插秧時
節在他鄉

○血脈守護のため奥村新五郎氏は英世
侯を宮内省に奉職し国内の折柄なんべん立て開いて
後ち、世の人の傾いろ〳〵出来さんとあるが此侯が為
曲を是しとせず、大体血脈とか水(呆)る無くて書簡
が材料まるでなる、自分が先づ試しに、世にが
めるる業きめど其の結果であることは、よく〳〵新
々の心をとゝくおしてあることは、どの手紙にも(後
の傾がある。彼の仕事の結局まで手紙をよく
ちんと、彼も初めて素成んべ祖国へ帰り、医者を
開業する志であつたが、亜米利加で修業した丈で
医界の信用が為いとゝなるのは、矢張り一ぱいを
猶更に行く積りであつたのが、あと彼の地位が高ま

り、彼の研究の結果が医界を驚めるまでに、彼は
容易に実験を擇ぶことゝなつて、終に猶更に
行く志を抛げて、デンマークに出かけて、こゝを立派
な四主血清研究所があつて、真の研究が出来る
からであつた。亦彼は終に帰国の念を絶つまつ
たく。彼の学問の拘束の多い自由国にいるけれども、本
当の研究は出来ないとあつて米国を終始した。
ロックフエラー研究所のごとき立派な研究機関は
作ることは本邦日本にとゝまらず、彼が物質
を断念した原因の一である。彼の志の向上は今く
又上げられまいとする。
世にらしい一挿話を読んで喝采したのは、或る時自

榛原製

分の手料理で友人を自分の家へ招いたことがある。
鶏を一匹買って来て、羽毛を取っていろいろあつらえが
腹をあけずに、其儘鍋へ入れて火に掛けた。野口
の主人は、心の料理をよく書物を読み出して居る
を開いて無中になって居る。友人は這入って来た。
そこで初めて鍋を見ると鶏はよく煮へてゐるのだ。そん
を友人に差出すと、友人達は蓋を明けると、ろくい臭
氣がする。そんな食物を排斥すると、四
口へ入れる筈はないと、自分で匂ひをかぐと成る程
異氣があって此まゝ、実は腹を開けずの腹
腑も糞もメチャクチャに成る。
と分つたとは滑稽なる。

野口の研究熱心と勉強の意味は如何程迄
しかと、彼は一ウボラトリーを勉強であつたのだ。
自宅に帰つても研究を続け全然一睡もしないこと
とが度々あつたと、一時は長い間病
みつゝ、北の荒林の間へ入こと、いつも自分の一つの時
血流の入用がせして流れまでの時く取
んのと時々金の光線が生じて金魚を七匹
ろ〳〵ろ〳〵したことであつたと、吸ひ金の用
る時のように紙切れを五円十円と書いて、それを
年上の四五くの小例に、黙して其の赤の金を
をこゝへ四五が作べるこゝろのつたとこゝろ、その立場が
終に青田の人に成り、後は青年の研究をこゝろ

生涯を終ったのである。

野口は小林栄吉氏の父上母上としていつも手紙を書いてゐる、自分の実母を城母と呼んでゐるのも一つである。彼の国日本の偉士弾とゆるされた論文を提供した。そして現在の偉士となつた。赤富士陵堂を建てるに当つて時務を抱いることを忘れず人比、彼の書状に伝ること、祖国の学徒の為を軽んずる譏りを免れぬ。唯比母を表バ

でゐるとかいふ賞は故ハるものである

野口が研究と没頭して行く為四見し此時の表心ハどんなものと云ふと丸で狂乱の如く苦内を躍り回つて解氣満々たるものとおかし

榛原製

い住ひと云はれてゐる。

日本文の歴史を決して大和の遺物の稿本二冊を得、一は歌学年表三冊神宮教院の罪紙を記録、文武帝より起り次に動つてゐる。

（七月九日記）

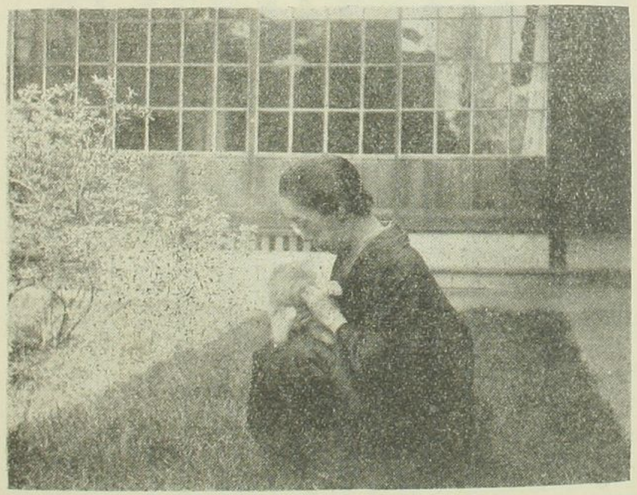
完備の次三十七年五月遺物稿となつた、和田」の白字の印が捺してある。之は上巻用の年表の終を刊行したものである。他の神祇年表一冊えんぎ神武帝より宇多天皇迄のもの、無罰本の洋書さんもみるがこれの手本は無きものである。えんぎの編者の署名を藏けたる巻末に大和田」の白字印が捺してある。

會長大隈侯母堂熊子刀自御逝去

會長大隈侯の養母堂熊子刀自は永らく早稲田の別邸に隱居せられ、日夜故會長大隈老侯御夫妻の御靈に奉仕の御生活を送られました。刀自は昨年暮から胃腸を害せられ健康勝れなかつたのでありましたが、遂に癌腫を患はせられ御病臥數ケ月去五月十七日午後十一時三十五分大往生を遂げられました。御葬儀は神式により思出深き舊大隈邸即ち大隈會館の大書院に於て擧行せられたのでありますが、生前刀自は佛教の厚き信者であらせられましたので、謙光院殿圓廣妙融大姉の法號を曹洞宗の原田岳陽老師より受けられました。刀自七十一年の御生涯は實に此の十字の法名に遺憾なく現はれてをります。御葬儀竝告別式の盛儀であつたことは申す迄もありませんが、會葬者を見まするに大臣宰相より絆天着の人や子供を負つた上さんといふ樣なわけで各階級に亘つたのであつて、十數年前老侯の日比谷に於ける國民葬の縮圖を見る如き感を懷かせられましたことは、刀自御生前の德を語るものであります。

本會は玆に刀自告別祭に於ける千家尊弘齋主の祭詞竝に理事長市嶋謙吉氏の追憶談を揭げ、刀自御生別の德を頌し、敬弔の意を表します。

庭前に於ける熊子刀自



告別祭詞

是乃最毛御由緒深伎大隈會館乎齋場刀定米弖暫時安米令座奉留云卷毛忌々伎高侯爵母堂大隈熊子命乃柩乃前爾齋主大社教副管長千家尊
弘愼美敬比白久今治米奉留御祭典波之汝命我御一代乃永伎御別乃大伎御式乃都々良々爾思比反之忍比奉禮要汝命伊女波内乎守留伎倍者弖事乃
强久堅伎信念以弖始終唯一筋爾貫伎通保之給比之爾依里世爾廣久立類波衣太留御功績刀之言擧介須倍伎倍條々波無介禮抒毛其無加里之波中々乃有里之毛爾之左利弖内爾之
人爾知良衣奴御心盡刀其事蹟等曾甚多奈里介留夫我中乃唯一非二津乎仰伎稱閉忍奉良乎相集波世留諸人等諸共爾閉食世安波禮汝命波之毛明治大正乃
二御代掛弖最毛大伎動臣刀御名天乃下爾蒸伎渡禮留侯爵大隈重信卿乃長女刀志文久三年十一月乃十四日爾佐賀乃大城乃下爾生出給比御
性質直久正之久又甚溫順爾座之御齡九歲乃時是乃東京爾參上里來座弖之夫世里御父母君乃御膝下弖之生立座之津〻禮〻太其御才智波彌々敏久
賢久進美足波之十七歲爾弖之契有里弖伯爵南部利剛君乃次男英麿君乎迎閉弖妹背乃契乎結比給比夫婦乃御仲毛睦自加里之毛思布事思布任世雜奈世乃慣
爾波得洩禮波給波受終爾相別禮給比夫與里以後波專御母君刀共爾御家乃內外乃事等波云布更奈毛里御父君乃御側去良受傳伎仕閉弖能久援介能久翼比奉良之
其御心盡波素與里並々奈良受弖今更爾拙伎言乃葉乃云比盡須倍有良受加之久毛然禮年麻爾久所有留階級乃人々等我晝夜別加受多數寄里來集比弖御父侯爵君
乎尊美慕比奉刀留共爾又汝命乎褒米稱閉奉良人無加里之毛洵爾宜奈事奈里如此弖御父母乃薨去給比次弖御母君乃御夫給比後乃此十年乃年月乃間
毛尙居座我須如久御親二柱乃御靈前爾及御墓前爾明暮拜美仕閉奉里慰米安米奉來座之御行爲誰之人加重之尊美奉良邪如此思比奉禮要御身
波手弱女之女爾留古座之津禮我皇大御國乃國乃礎毛刀仰伎奉禮留御父君爾仕弖輔介奉里翼比奉良之々其御心盡波即弖世乃爲人乃爲爾盡之給比之爾毛尙將異
奈良禮要世爾治久廣久君留立類波衣樣其大伎御功績波唯大方乃益良丈夫乃伊加傳企弖及布伎倍事加實波爾女乃中乃女乃龜鑑刀仰伎稱閉奉留倍伎御身之奈里安
波禮如此有留雄々久美之伎御身乃上毛爾尙病乃憂瀨波得堪給弖波受今十年餘里強弖毛永良之米閉座麻欲伎御齡奈留七十一歲乎一代乃限刀敢無久果無久
御失給比波之寔爾詮術毛無伎人乃世乃慣介奈里故今波詮術無之毛刀思比爲之思比定米弖眞名子侯爵夫妻君乎始米親族家族將年月久爾深伎御惠乎
蒙里奉禮留多數乃人等皆相共爾惜美悲美戀比忍比々津永伎御別乎告介奉良事乃狀乎哀毛刀見曾那波之御心足爾比相諾比受介座世幣帛捧介奉弖慎美
拜美白須

大隈熊子刀自の御生涯

本會理事長　市嶋謙吉

吾等の會長大隈信常侯の義母に度らせらるゝ熊子の君は七十一歲を一期として御他界になつた。吾等は悲み且つ惜むの情に堪へない。熊子の君が早稻田大學の門前、大隈會館の地域內に於ける別邸に故侯爵の祠堂を守りつゝ御住居になつたことは、早稻田村の住人が、此君を知ると知らざるとに拘らず同村である故を以て誇りとしたものである。此別邸は四隣の崇拜の的であつた。こゝに英傑大隈老侯の雄魂が祠られてあるからでもあるが、侯の血統を繼承された此君の德操が非凡であつたからでもある。率直に申すと此君は滅多に世に出ない模範的女性であられた。私はいつも近世の模範女性に靜寬院樣即ち幕末將軍家に嫁された和宮樣に先づ指を屈してゐるが、其御境遇にこそ異る所があれ、その人格と德操に至つては、正さに伯仲の間に在つて近世女性の雙美を求めるとあらば、靜寬院の宮樣と此君を擧げることが、誰にも異論がないだらうと思ふ。熊子の君は女性としてあらゆる淑德を備へられ、一點の瑕疵を搜がし出すことが出來ない。兩親に孝養を盡されたことは勿論御家族に慈愛が深かつたことは勿論、慈恩の故舊婢僕にまで普く及んだ。何事に就ても物やはらかに、しとやかに其の言動にお愼みが深く、自分の如き疎野のものは拜唔の都度御丁寧と御深切には每に恐縮した。しかし君は明敏の頭腦の持主で、事の裁斷に誤りがなく、辯說は流暢明快で故侯を偲ばしむるものがあつた。所謂內剛外柔と申すべきか優しいお言葉の裏には凜然犯す可らざるものがあつた。時勢に就ても男優りの着眼があり、終始親まれた讀書は各般のものに涉り、普通讀むことを難んずる古るい記錄などにさへ眼をさらされた。斯く蘊蓄があつたから、名聲を求める樣な氣が一切なく、偉いなど云はるゝことが大のお嫌ひで、飽まで自分を韜晦し、親近の人には色々意見を陳べらるゝが、新聞記者などに對しては口を箝して一語も發せられないので、記者は皆失望して歸へることが常であつた。寄附金などをせらるゝ場合も必らず匿名を條件とされたと聞いてゐる。書も見事であり、詠歌もよく、また長い間日誌も書かれたのを晩年には此等のものを惜氣もなく、一括

水にひたして廢棄されたなども、名聞を忌まるゝ思慮の發露であらうと思はれる。此の名聞を好まれない處が如何にも奥床しく、敬服に堪へない所である。

しかし熊子の君の御生涯を考へて見ると、御不幸な方である。この方面の事は御遠慮致したいのだが、表向き現はれてゐる事實で申と、御幼少の時故あつて早く母君にお別れになり、祖母の君の撫育を受け、九歳の時初めて佐賀から祖母の君に伴はれて上京され、十七歳の時盛岡の南部家から英麿君を養子として迎へ、御夫婦の間柄は琴瑟相和し二十年餘同棲されたが、不幸にも御夫婦の情愛などに毫も關係の無いことで離緣となつて、それ以來寡居して居られたのである。乃ち最初には實母と別れ後には良人とも別れられた哀れな御境遇であることを思ふ毎に、吾等は常にお氣の毒に感じて涙を催さずには居られなかつた。君は如何にも折り目正しい御氣性で、曾つては御實母にお遇ひに成り得る機會があり、人はお勸めをしたけれど、斷然お斷りになつたと聞いてゐるが、堪へ難い情をよくも抑へられたものと、これも吾等が秘かに敬服する所である。その御不幸の御境遇は靜寛院の宮樣が將軍家に嫁されて幾許もなく良人を失はれ、維新大亂の渦中にあつて、飽まで德川家を護り、京都へ復歸さるゝことを否まれたのと、どことなく御境遇が似寄つてゐるやうに思ふ。

君は斯る御不幸の間に生長され、容易ならざる苦勞を重ねられたが、此の御不幸と苦勞が犧牲的の御精神を益々鍛錬し、元來の聰明さにこれが加はつて益々君を出成したと云ふべきである。君は何事も諦らめて一意父母に孝養を盡された其間は長いことである。御兩親が朝起きられると晩寢に就かるゝまで、必らず次の間に端坐され客の接待から萬端何くれとなく用を辨ぜられ、俗に云ふ痒やい所に手が屆いたもので、吾れ〳〵は奥へ通る毎に君の奉養の厚いさまを蔭ながら見て敬服に堪へなかつた。老侯の薨後御養母は常に御病體で耳も遠くあられたが、人から何かを申上げるのを君が取次がるゝ其才辯と、誰方から來る手紙をサツ〳〵と苦もなく讀まるゝ敏捷さとには何人も舌を捲かざるを得なかつた。恐らくどこを搜しても、御養母の奉養にあれほど拔け目のない看護人は無つたに相違ないと思はれる。

曾つて君が難病に罹られた時自分は高田博士と奥へ通つて老侯にお見舞を申上げた。其時のことを時々思ひ出すがあの位快活で明るい侯がひどく憂愁に閉されて、いつもなら吾等が坐に着くか着かぬに快談が始まるのであるが、此時ばかりは、數分間幾人と一語も發せられなかつたので、吾等も坐に堪へず、引下つたが、御親子の至情は左こそと思はれた。君の御病氣は主治醫の青山博士も手を上げた位絕望的であつたが、幸ひに其後追々回春に向ひ遂に平癒さ

れたのは、君のお仕合は勿論父君の老後に取つて非常の仕合であつたと思ふ。君は病が癒へると共に、黑髪をフツつり切つて仕舞はれた。詳しい理由は知らんが矢張り夫君への貞節の一表示であつたと思はれる。

今度の御病氣に就ては昨年あたりから御自覺があつたらしく思はれる。あの辛棒强よい方であるから、病苦に惱んでも、どこまでも平靜で居られ、常と變りなく訪客にも愉快に應待せられ、病床に就かれても訪客があれば病を力めて面會された、併し女性のたしなみとして、身體の亂れてゐるのを氣にされたことは勿論で、重患であらるゝのに、毎朝湯殿で洗面の外相當に化粧をされたのは、訪客に接する心構であられたことは言ふまでもない。主治醫が看護婦をとお勸めしても、自身の事で人を煩はすのはお嫌ひで、女中にすら餘り用をさせぬ程の人だから、始めは聞き入れが無かつたらしいが、終には看護婦が附き添ふことになつても夜中は必ず起つて厠に行かるゝので、これには皆々困つたが、到頭女流の尤も忌がる便器を病室へ入れることになつた、其動機はと云ふと、深更に目を覺まされると、看護婦が不眠で侍してゐるのを見て氣の毒で堪らず、看護婦を寢せるために便器をやつと病室に置くことゝなつたと聞き、君の心遣ひのどこまでも屆いてゐるのに感服した。

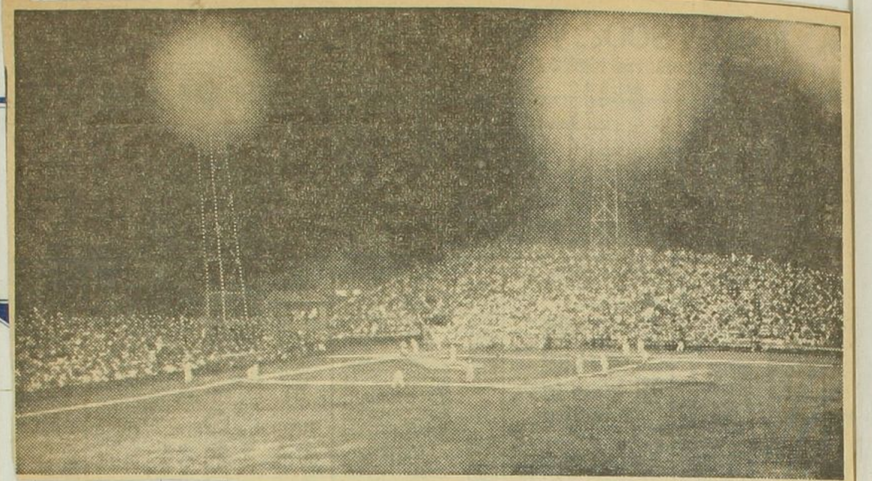
御病症は癌で、腹膜炎が併發し、腹部がはるので絕對に食物が攝れぬやうになり一時は水さへ通らなかつたが、御臨終近かく小康を得られて、いくらかお樂になつたことは何よりであつた。五月の十日は漸やく御危篤であり、此日が老侯の永眠の日に當るので、此日にお供をしたいとのお思召もあつたらしいが、尙ほ其後、一週間持續して十七日午後十一時卅五分終に御他界になつた。御最期の時は格別御苦痛もなく御安泰に大往生を遂げられ、お顏を拜しても衰弱はあつても平素と格別相違ひがなかつた。享年七十一と云へば高壽に相違ないが、ここに掲げたお寫眞で見るごとくお年は十歳位若くお見えになつた。晩年は耳が聊か遠くなり視力も衰へられたが、事を辨ずるに不自由と云ふ程でもなく、吾等は尙ほ御在世の長からんことを期待したのに誠に惜しいことであつた。君は禮節に厚く、自分の如き者でも古稀に達した時は態々茅屋を訪はれたのに恐縮した。萬端の事に思ひ遣りが深く、人に物を贈らるゝ場合などは必らず其人の趣味に投ずるものを選擇さるゝことが常で、自分の頂戴したものなどはいろ〳〵とあるが、皆記念として永く珍重すべきものゝみである。自分は往暮二回は必らずお訪ねするのが例で、其の都度早稻田大學の事が話頭に上り、深く學校に思を致して居らるゝことに感激したが、此の稀有の模範的女性を失つたことはひとり大隈家の損失のみではない。

のウオルテールの名を二つ三つ書きつけ置く、一生を通じてあの人の特徴の毒舌であった。こんが考へる志ばく然食に投ぜんとした。彼の宮廷生活と専制政治の弊害を満喫した、彼の愛人世俗の為めに苦いと悲劇ユーディーパで大入を打つたが、まことにもって無益のもろん貴族の憤りと男子人前で辱をうけるとバスティーユの牢に投ぜられ、不正義を悲憤念を含めた。彼の危険思想のもろん英国に追放されたが其の次ニュートンの盛業が行はれたのを見て、英国を尊敬と感じたのだが、ニュートンの盛業に彼の学術的発見のいろいろ、時の大蔵大臣が二ュートンの姪を妻にしたが故であると知つた時彼の心

横原製

愛慕をつのらした。ウオルテールを業績を感するのの高才のあつたことで英国まで逃る時父の遺産を利殖して六十万磅の財産となつたことがある。彼の到頭ゼネーヴのデリースの山荘を購ふことゝなる豪華の生活を営むようつれ、彼の天才を認めた二三の貴族があつて侯爵夫人エミリーとの仲を意義深くも著書西の宮廷に入へたこともある。彼の皇太子を愛せられた宮廷に入へたこともある。彼のゼネーヴの兵を撃ち破り、宗教に関する毒舌、殊に迷信を撃ち、舌鋒が地上地獄を敵とし、終局一変を以て山上の人の自らを示した。彼の仏蘭西と瑞西の国境にくゝ二軒の家を購ひ、仏国

故郷の想いを胸に秘めて、瑞西へ、瑞西市民の歓待を一身に受けて、二股の法を案出し家を西国に四軒設け、輪を生活し、そして、人間も亦四足である事を説き、彼の四年間四里が乗しくうつて、入国禁止の政に解けて、みんなのとこへ、私人の光花ぶき、あのもあつた。入国の時禁制品を手いかと、役人が調べた時、車中から、積んでいるまぼ、ヴォルテールを」と言ひ、有名な話である。志ひし此の後悔の大歓迎をうけて、彼の心の無事を上つた時は世界史上文豪が受けられたのの高い熱狂的民衆の歓迎を受けた。彼が死んで十一年目に仏国に革命が起つたのである。



夜の太陽のもとに
早大球場の初野球
選手……『フライは苦手』

太陽への一の挑戦——夜間の野球が十日午後六時から照明設備完成した戸塚の早大グラウンドで行はれた、我國最初といふ好奇心が主となつて試合「早大第二軍對新人戦」なんかは従、又定刻有楽無納

凉ファンが球場を埋めつくす程の人氣、浴衣の着流しに團扇持参などでいでたちが書間とはちと違ふ山本體育會長の經過報告、田中總長、鳩山文相の祝辭等々で開場式が済んでフリー・バッテング最中——午後七時「設計者上田博士の最初のスキッチで…」のアナウンスの終つた途端にパアッー と六基百五十六個の投光器、千七百十六萬燭光が一斉に眼を開けて球場をゆるがす拍手

濃紺の空に誇らし氣に輝く六つの

「夜の太陽」

×……○

同四十分山文相の例によつて例の如き始球式

戸塚の空に珍らしくサイレンがほえて試合開始。偉大な「夜のページェント」は始つた、カンカン帽がさき乱れて観客席は月光浴びたよひ待草のをかのやう

選手はだい〳〵色の地面に白く浮いて何となく夢の中の人物を思はせる、第一球がストライク！中堅後方のスコア・ボールドに緑の燈がほたるのやうにポツ！と光つたボールが赤でアウトがだい〳〵、

標識を凝望するやうなもの

×……○

試合は七回で十一對六で第二軍の勝ち案の定興味はなかつたが選手にいはせると矢張りいひ分はあるフライの時投光器が目に入ると六つの太陽を見たやうでもう駄目、スピード・ボールは打者にも捕者にも見づらく第一、後半は殊に眼が疲れます

見物人側を安部磯雄先生が代弁大體において成功、唯打者の視力が問題になると思ふ、見てゐて成程疲ぎよいが疲れますな、選手の顔もちうろうとしてどうも物足らん——とあつた【寫眞は昨夜の戸塚球場の試合光景】

ライトマスクが陽炎さんとよろめいてゐる。マスクは壁の中で塗り籠められたのを後で発見したとかいふ。ジエーン、グレーが一五五五年三月の昔から数月前の英国の王位継承の時

○英國首相マクドナルドの今住んでゐる官邸は歴代総理大臣の起臥の家で、そこを訪ねた時、祝輔の紀行に就て見ると、耶う奥を感ずることがある。此官邸の或る室にリロンの肖像が掛

雪つもれる為めに工事がはかどらず世間から危険視さんとする四人の夏日を元のひまあつて、北京ゴルフ倶楽部の手紙が新聞とちうて仮寝をみるから、えハエリザベスの時代の木造の椅子が六脚あつて、これが寝台の敷蒲団をさんもある、ウイリアム、アン時代のものが、あらゆる北椅子を本一番を出してくれと傑作を附した。まとこれもある。ピットが三本の葡萄酒を飲んで酔倒した侍者を扶けられて寝台と通じ、これと玄室もある。すべて一歴史的のものであるが、室内の世飾は、これを住する首相が其の私有物を

に本づくものとは云へ、又其の家庭の感化も與つて大なるものあつたと思はれる。先生の嚴父は漢學者で、志操高潔の士であつたが、先生の名を諭吉と命じたのは、嚴父が多年所望してゐた「明律上諭」全部六七十冊の唐本を購ひ得て非常に喜んだ其夜に先生が出生した爲であるといふ。嚴父は先生三歳の時に歿せられ、其後は母堂の手一つに育てられた。母堂は頗る慈悲心に富んだ婦人にて、女の乞食を自宅に呼び込み、草の上に座らせ、自ら襷がけをなして虱狩をしてやる。其の虱を石の上に置けば先生は小石を以て之を叩き潰す、而して母堂は虱を取らせた褒美として乞食に飯を與ふるを常とした。今日も存してゐる舊宅椽先の踏石は此の虱を潰した石であるといふことである。此の賢明にして慈愛深き母堂に依つて育てられた先生が、後年學界、教育界に絶大なる貢献をなし、新日本の泰山北斗として一世の瞻仰する處となつたのも偶然では無い。

先生の少年時代には家庭の生計が甚だ困難であつたので、先生は子供ながらも勉强の傍ら色々の仕事をして家計を助けられた。元來先生は幼少の頃から手先が器用で、且つ物の工夫をすることが得意であつた。それで家事の手傳として米麥を搗いたり、薪を割つたりするのは勿論、屋根の壞れより戸障子の破れ、疊の表替、桶の輪替、傘、下駄、雪駄の修繕に到る迄一切爲さゞるもの無く、進んでは內職として或は履物を作り、或は刀劍の細工をして鞘を塗り柄を卷きなどした。其他金物細工なども頗る上手であつたといふ。先生の勉强室に充てられてゐた土藏の二階なども、其の周圍の壁の土は先生の手に依り塗られたものだといふことである。自分は此等の話を聞き、且つ親しく土藏の壁などを見て、富貴の家に生るゝは決して人生の至福にあらず、寧ろ貧困の裡に人となつて、あらゆる苦難を嘗むることが、結局其身を玉成する所以であることを、深く感じた。

○早稲田のグラウンドの眺め
設計とけて左の記事
を参考のため○原文

戸塚運動場の照明に付て

上田輝雄

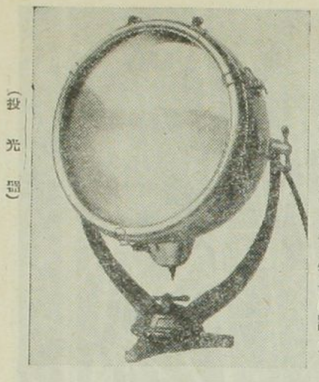
今回完成を見るに至りました戸塚運動場の夜間照明設備は、夜間に各種のスポーツを行ひ得る經濟的の照明設備でありまして我國に於ては未だ見ざる最初の施設であります。斯樣な大規模な運動場の夜間照明實現の問題は、同顧致しますと數年前に山本忠興博士が始めて提唱され、先づ明治神宮外苑に實施をしやうといふ計畫が或程度迄進められたこともありますし、又横濱に於きまして野球場に實現させようとして設計もし大に努力したこともあつたのでありますが、何分にも設備に要する費用の問題とか或はその他種々の事情から、今日迄一般から非常に其實現が期待されたながら之れを見なかつたのでありました。昨年十月始めにこの計畫が再燃しまして、何處の運動場でその成功が見られるかと興味を持たれて來たのでありましたが、今回、總長始め本大學當局の非常な御盡達に依つて我が戸塚運動場に於てこの實が結ぶに至つたことは、吾々倆來此問題に卵か努力をして來ました者、一同の欣快に堪へぬ次第であります。

照明の施設を用ひて各種のスポーツを行ふ場合に、吾々技術者として滿足なる照明をする點から考へると、野球が一番困難なのであります。其理由は球速が大であり球が天空高く舞ひ上るともあるし又或時には地上を走るといふ狀態であるから、結局强力な電力を使用して大きな空間容積を可及的に明暗の差なく平等に完全な照明をしなければならぬといふことになりますから、これを經濟的に經費も成る可く少く使用電力も比較的に少くして照明を施すと云ふことには幾多の研究的の問題があるわけであるのであります。今回の施設は、勿論このことは設計に當つて充分考慮したのでありますが、從つてその他のスポーツ例へばラグビーとか、サッカーとか、バスケットボール拳闘或は撃劍柔道といふ種類のものには充分であると云ふことになります。今回戸塚運動場に實施致しました設備の概要を述べて見ますれば次の如くであります。

○

先づ第一に照明の理想は太陽光線に近付けるといふことであるからして、光源は出來るだけ高い所へ置くことが理想であることは常識的に判斷が出來ます。然しながら光源を高い所へ持つて行けば行く程、强い光源が必要となり。從つて經費が大になるといふことになります、スポーツにも差支なく又經費の點からも經濟的であるべしといふ問題を種々研究して見ました結果實現したのが、今回の施設でありまして、右のやうな考から先づグランドの周圍に高さ約百尺の鐵塔を六基（圖面參照）建て、その上に光源を載せたのであります。その光源は卽ち投光器でありまして、圖面にもありますが樣に第一の鐵塔（ライト寄り）には二十七臺、第二の鐵塔（道路側）には三十六臺、第三の鐵塔（道路側）には十五臺、第四の鐵塔（三塁側）には十五臺、第五の鐵塔（三塁側）には三十六臺、第六の鐵塔（レフト寄り）には二十七臺、合せて百五十六臺の投光器を六基の鐵塔に分布して、看客にもプレーヤーにも差支ないやうにしました。

投光器一個の使用電力は千五百ワットで全體の電力は約三百キロ（一割五電壓を上げて使用）、電力は電氣工學科の實驗室から高壓で運動場へ送電して、運動場内に新設せる變電所で之を受けて、地下ケーブルによつて各鐵塔に送ることにして居ります。又新聞記者席及選手席にも各々照明の設備をして原稿或はスコーアをとるに差支なきやうにし、スコーアボールドは極めて完全なものにするには相當の費用がかゝりますので、之は第二次的の仕事として、只今は小型の投光器を使用してこれに投光して遠方からでも見えるやうに工夫して居ります。



（投光器）

○

以上設備に關して述べたことを今少しく詳細に記錄して見ますと。

一、鐵塔の概要

（工事設計擔當者桐山均一君の報告に讓る）

二、電氣工事の概要

電氣工學科の變電室より三千三百ボルトを架空線にてグラウンドに送り、之をグラウンド内に新設せる變電所内のオイルスイッチにて受け、誘導電壓調整器を經て更に各塔に三千三百ボルトにて配電す。各塔には變壓器を使用す。ホーム側鐵塔三十KVA、一塁、三塁側七十五KVA、外野五十KVA、前記誘導電壓調整器にて電壓を上下一〇パーセント調整する如く致しました。

三、投光器の概要

重量約八貫八百匁、直徑五三、七センチメートル。密閉式投光器。（挿入寫眞に參照）

投光器數百五十六臺。百ボルト千五百ワット。

光柱光束數　一萬千三百ルーメン

全光束數　一萬六千四百五十ルーメン

光柱開キ　三十六度

光柱光燭　一萬六千燭光

豫定照度　内野　四百二十ルックス

外野　三百ルックス

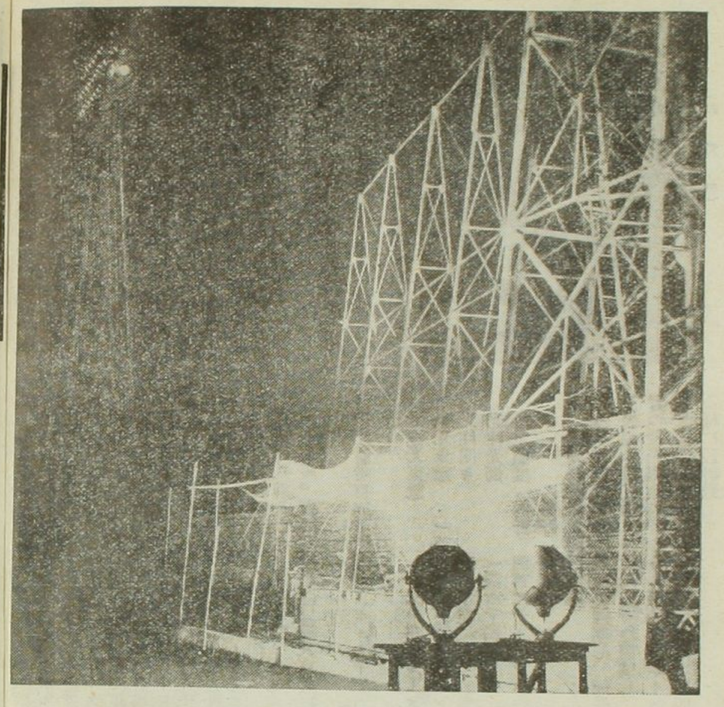
四、投光器配置及照明方法

ホーム側投光器は外野を照明し、一塁及三塁側の投光器は外野及内野を照明し、外野の投光器は外野のみを照明し、ホーム側投光器四臺は特に投手と捕手の間を照明する樣に設計致しました。

○

右の設備は夜間各種の競技を些程の困難なく行ひ得る經濟的の施設でありまして、その明るさも内野に於て約四百二十ルックス、外野に於て約三百ルックス（新しい反射のよい六疊の室に於て六十ワットの電球に點燈した場合の明るさは約百五十ルックス位の程度である）でありますから相當に明いものであります。又空間に於ける明るさの程度が違ふと、球の速度が變つて見えますので、明るさの平等といふこともよく氣をつけて設計をする等、各點に頗る留意はしてをるけれ共、太陽光線に及ばないことは勿論であります。從つて夜間照明設備を施してスポーツをする場合、そして夜間スポーツが將來盛んになつて來る場合には、夜間スポーツの技術的研究が必要になつて來ることは當然であると考へます。例へば水泳がプールを使はないで大海にて競技をした場合とプールとではその趣が大變異ふのと、その意味を同じくするであらうと考へます。この夜間スポーツの技術的研究といふことは、夜間スポーツの流行發達といふことに對して根本的な重大性を持つものでありますから、體育界に於ける諸兄の御指導と、吾々への御鞭撻を希望して敢まぬものであります。今回のこの施設の實現したことは、體育に於て夜間を利用す

榛原製



（試驗中の投光器）

るといふことを實現せしめ、從つて體育の普及といふことにも非常に效果があるのではないかと考へられますので我國體育界に相當の意義があるものと信じます。之と同時に又我國の照明工學界の躍進といふことにも非常な貢獻をするものであります。現下の照明界の實狀は、屋内の照明に於ては大體進むべき處迄進み得ましたので、今後大いに進んで解決しなければならないのは屋外の照明、殊に大廣場の照明であります。例へばエーアポートの照明とか或は運動場の照明とかいふ問題でありますが、今回の戸塚運動場の照明は、我國最初の施設であるのでありまして、この實現によつて我國照明界が學問的に又實際的に啓發されるもの蓋し大なるものあるべしと確信します。且又面積九千平方メーターあるこの大運動場に、この完全に近い電氣設備を有する處は、云はば一大照明研究所と見ることも出來るのであつて、吾々電氣工學に關與する者が、之から種々努力を集中することによつて幾多の貴重なる研究が生れ出るのではなからうかと思ひますし、又我國照明界の爲にこのことを希望して歇まない次第であります。照明智識普及委員會で、今回のこの實現に對し多大なる援助が拂はれましたことは、校友と云ふ立場からしまして實に感謝に堪えないところでありまして、深く感謝の意を表する次第であります。

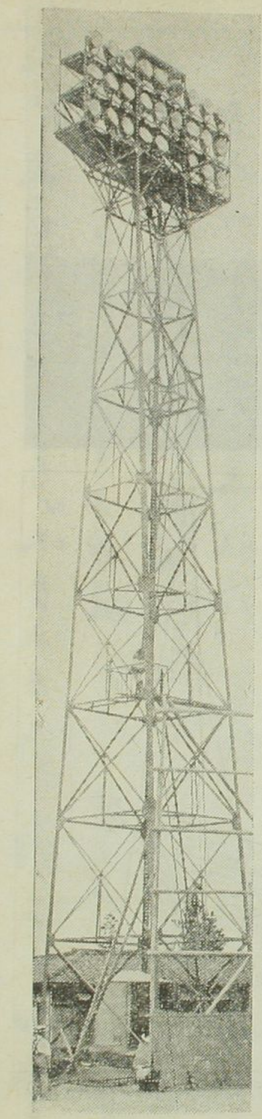
照明の鐵塔工事に付て

桐山　均一

戸塚グランドに夜間照明をして見たいとのことを、山本先生初め照明普及委員會の人々から話しのあつたのが、昨年十二月でした。そして私の受持は百五十六個の投光器を、約地上百尺の位置に如何に裝置するかといふ問題となるわけですが、それは結極鐵塔を立てなければならないのです。そこで、其當時は鐵の値段も未だ餘り高くなかつたので、六基で一萬二千圓位がければ出來るだらうと云つて置いたのでした。ところが今年三月愈々工事を初めるといふことになつた時は、鐵の値段が昨冬より三割程騰貴してしまつたので、設計を變へること數回、漸く今日出來上つた樣なものにして警視廳の許可を得たわけです。

何しても、最も大きな鐵塔に其上部に八貫八百匁の投光器が三十六個のるのですから、なかなか壯觀なものになりますが、今日迄日本では何處にもこんな多くの數の投光器をのせたものがないのに、又一方から費用の制限がありますので、從つて設計上の苦心がいることになるのです。

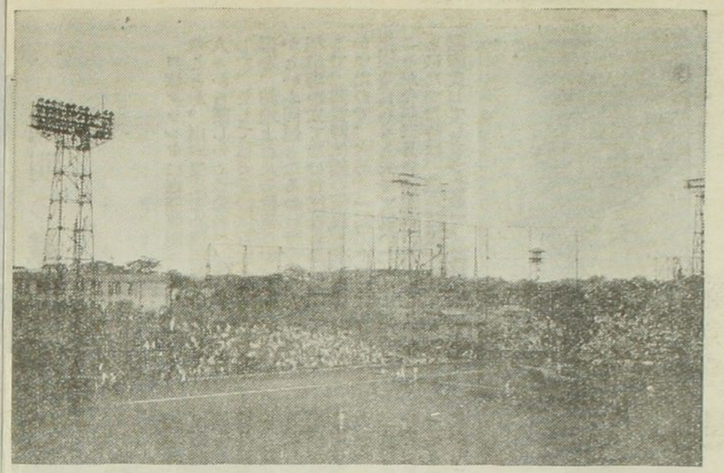
大體鐵塔の設計としては投光器ののる部分で、風壓を一平方米に二百瓩、脚部では一平方米に百五十瓩として、鐵骨部材の計算がしてあります。次に配置のことですが

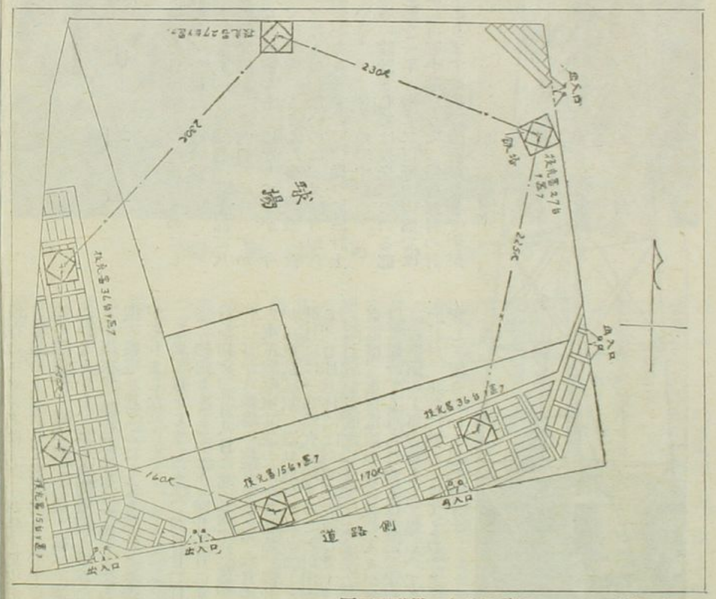


現在のスタンドは大正十四年の夏安部先生と協議の上設計して造つたものですが、光線の關係や、球の飛ぶ距離が成べく遠くしたいことから、表の六間道路と平方にすることが出來ず、變な型になつて居りますが、今度の鐵塔を建てるにしても隨分と無理な點がありました。

現場工事としましては、四月廿二日各鐵塔の繩張りをしまして、同廿四日に基礎根材を初め、五月八日に其混凝土打を初め、同廿三日から鐵塔の建方を始め、六月四日から東電變壓室其他の工事を初め、同廿五日から東京電氣で器具取付を初めました。同卅日には一基點火試驗することが出來まして、七月十日には全部完成致します。

此工事を完成致しますには、淺野物產、東京電燈、東京電氣の各會社の人々が誠意を以て働いてくれられたことは勿論ですが、現に武道館の工事監督として働らいてる奏義治君が、非常に熱心に見てくれたことを感謝して置きたいと思ひます。





圖配塔鐵（下）場動運たつ建の塔鐵（上）

○二三の風説を罷つて夢中の無駄を慰ちんと狂言記を後人に見せ、北方を後ろに今如何ぞ、やゝ落着いて二冊でこう後人どもの今が始めである。素朴稚拙のうでいはあるが工夫はきっと下えなけれ、一定の形式があっても変化のうまいけんも、事はさまくで、流石に上添祝今こ行のんれ・ものだから卑猥のことがるく。往て故実のことを学び和歌を引き合つて、太神楽冠者が主公と投価を義いすやうなことも多い。永幾のおとしの奥がある。此が、ウツカリすると其のおとしの妙味のてこうかなるやうな事もある。小さんの落語などいふまハくく狂言の故向を以てあるとのおもしがあ

つさりとして殺敵のあるものもまく似てゐる。かさんの
義経のぬいくどくおとしをを説明せさるものも
あるが、殺生を殺めて今の人にとう事務なる事が
あるのも動もすれば注解の説明をかへるが本来
なれば義経家の禁物とするたびもあるけれども今は
んこう山鹿みんとしてもみる、恐らく江戸式の殺生の義
語いの追と理解さるべきものとも。その点似て
狂言の面白さ多くの説明を要するこというう
うの大花流の狂言記も大体文言は同じも、鄙な
潤色があるので殺生程の面白さもうとてみる。北の
大花流の狂言本は夢を安田が見しれが大笑を
焚け失せた幸に幸田露伴が狂言本を校正

しに時北の失義本を発見に深く此の流家本が
今も存してもみる。自分が此の手を入れ北の素の
版本で大花流の舞台添えるべき。　七月十三日
のち芙蓉会記とのこと宮本一郎手入の芙蓉会の
田中光顕伯爵の代表の名家の毎月会もの
史料ある毎会の記録をうく大正四年十一月九日の
錦あと松を会し会を会記の如きを紹し　大正
六年九月三日のもの、北会の会長は誰なる記し
長さんとする田中伯爵なくしと桑せるも、会員は
為守　時化雅　義京　義作　義雄　正臣　長
輔　内藤　家　高　高蔭　久敬　英一　郡村
羽衣

等を訓ずる義なるべし、此の冊子何人の著述歟未だ詳
めさんなれども、南魚流の書を解する美なるべし、今毎の冷
歌を好しあるべき勿論酒次無いと任して添し戯れ
る歌も皆を好しあるべしとて、他の北堂
を田中伯と商らして其の著者を問うんことを乞す
（七月十六日）

○中古戯作といふ古写本を得たり、此
書中古の利埼のことを記したる為なれば、創史
に大切の資料なれば、無名ながら早く刊めあんとも
著者いまだ詳らかならず、無名なる北写本の著者
の自著なるを疑はざるべし、

文化二年乙丑七月雨の日

模写製

許無の星歌主人我也
と称亭程彦は著者の何人なり
やらうかすらく

北書写本著作年元禄自書稿本）
元和の享保十一年（丙午ノ生）文化二
年を以て八十四年の昔こ初陽子所
後白山称居と住す

文政生年

柳亭程彦記

えんを伝ふ著者を知ることを乞す
心著者八十四年の元禄年ハ
秋の頃人著年から見ることを書き記し
なるべしバ中古の戯作文献なるべ

貴重なることなるべし著者の跋に云く

日用の談話をもらしたる唐もなれい男らしき

本もあり、こやをとこ見せしことを、

うそうしくもなる出でゝ本らしい

いう楚かなる古ゝ後ゝ笑ゝ位せる記臆のこと

い耳の底からいろいろ出しゝ年記しぬゝとゝ

うそでも日用に実なる、本ゝとゝ人生

の有用なる事、言い尽もがしぬ小冊にて

いとつゝまる、餘を筆義云ゝ

ちゝき名優の筆又関する批評多し別通又

りしと見る、

明和八年七月十七日

No.

手録平生の御無言申聞奉敬服の

陳者貴稿田学穀ゝて物故諸家録八十餘の

略歴如記ナレ共貴稿半数の少生も知者て非

常ゝ懐かしく手読仕ル御業防ゝ役徒神ゝ

扨最後ゝ聚り来る所代の事ゝ

面倉ゝて梅田雲濱其他の事ゝ

ゝ及ぶ其人は現ゝ大学ゝ

の御ゝて面倉ゝ貴下と生

ゝ大ゝ怪り其田切は

一法の一冊世義ゝ

歩田切語りゝ

聚り逢腐とは生て入迎

りゝ其後聚家の事ゝ

手録平生の御無言申聞奉敬服の

陳者貴稿田学穀ゝて物故諸家録八十餘の

略歴如記ナレ共貴稿半数の少生も知者て非

常ゝ懐かしく手読仕ル御業防ゝ役徒神ゝ

扨最後ゝ聚り来る所代の事ゝ

面倉ゝて梅田雲濱其他の事ゝ

ゝ及ぶ其人は現ゝ大学ゝ

の御ゝて面倉ゝ貴下と生

ゝ大ゝ怪り其田切は

一法の一冊世義ゝ

歩田切語りゝ

聚り逢腐とは生て入迎

りゝ其後聚家の事ゝ

KOKUYO

赤穂山田氏の娘ヨシと夫婦、
殴は姑にいぢめられてゞあり、夫
の虐待を殘してゐる（原文のまゝ）
色々お世話になりました、自分
は不幸者です、両親には誠に相
すみませんが先立つ不孝をお許
し下さい

有馬郡金五郎方より一反
一筋、手提鞄一ヶ等を窃取した賊
があつたところが前記の壮漢が宿
料を支拂はず夜半に逃走したので
たしかに彼に違ひなしと目星をつ
けた柏崎署の吉野刑事が敏名の巡
査の助勢を得て彼が逃走したその

候々里の様な所で敷かれて御着するのが
い、本年は柏崎で様な会を開くので
百人計りの様な会して柏崎は景迹
地である上に本年の実景の殊に
ことに毫も他不と御承（?）が有ります。
雛さんもから、信濃は第一
様が七月は高めくて、てとうして上級
表面にもう少し信濃へ葉を様
一行の者様は杉森春次郎と小林
杉森の方を訪問致し来てゐるが、
出身であります、鈴木へ来るが
すでに終る頃にまだ連んで立つと尤

No. ……………

拙家の記録に寄れは、弊家の遠祖は河内国楠正家にて
正成の裔にて、祖父は巽太郎と称し、号は遜
斎、其子に蔵書あり、来往せしは其子、遜斎風に
文名あり、画を嗜み及び三樹と交りあり、遺稿十数冊
其文は斎藤拙堂中村栗園（米斎）、志士城多董の三氏
に批す、元治甲子の変鳥居に帰せしが、其後没す、
稿は若干冊存して明治十三年「遜斎文鈔」と題し
出版せり、書並及武術の書は得北道画さして
巽家代々の遺法によるも、早無用の事なから來る
所有致して御参考に供す
時下大暑折角御自愛専一祈上り　早々謹具
七月十一日　　巽太郎
中嶋先生侍史

KOKUYO

拙家の記録等の中に、拙家の遠祖は内閣梅正[illegible]
正成の[illegible]なる、[illegible]は異太郎と称し[illegible]
[illegible]、其子、[illegible]
文[illegible]あり、[illegible]
其[illegible]
[illegible]
[illegible]

拙家の記録寄めは、[illegible]家の遠祖は[illegible]国柳正[illegible]
正成の[illegible]なる、[illegible]は異太郎と称し[illegible]安大、[illegible]は[illegible]
[illegible]、其子[illegible]蔵あり未だ[illegible]
文[illegible]あり[illegible]及三樹と[illegible]あり、遺稿十枚[illegible]
其次水戸藩[illegible]中村[illegible]郎、[illegible]、[illegible]城多董の[illegible]
[illegible]す、[illegible]中の[illegible]烏[illegible]、[illegible]、其後[illegible]
[illegible]、[illegible]文鈔と[illegible]
[illegible]、書道及武術の[illegible]は[illegible]
[illegible]家代々の遺[illegible]、[illegible]用の事ばかりなる
[illegible]して[illegible]考へ[illegible]供す
時下大暑折角御自愛奉祈上げ[illegible]
[illegible]

市嶋先生侍史

[illegible]川[illegible]

KOKUYO

○毎年の日記[illegible]
年中行事[illegible]、本年は柏崎で[illegible]
[illegible]く[illegible]、[illegible]人計りの[illegible]
の[illegible]、[illegible]柏崎は[illegible]
[illegible]く柏崎[illegible]本年の[illegible]
上[illegible]
不便[illegible]
[illegible]寝[illegible]
柏崎[illegible]入へ[illegible]一行の[illegible]
行[illegible]杉森[illegible]
[illegible]
初めて[illegible]

も彼の校友達は年賀の為めに臨時校友会を開いたからでもあろう。今年の行き特に記すべきは柏崎に生田萬、日柳燕石の墓を相ついで建てられたことである。燕石の墓は碑面に「海鳴神社境内に在り、日柳燕石の秘書」とあり、柏崎にテプスを罷つて歿したのである。生田萬は海鳴の神官樋口氏が平田篤胤の門人で、生田を日門の始めとなすべきものである。生田の墓は柏崎に在住することゝなつたのである。生田の墓の傍らに樋口氏の墓のあるのを認めた。なほ行脚して歩へて八月のなかごろ)今年も核人を得ようとて九月末の家に招かれ、その書畫を展觀した其風を忘れぬ。此人は萬と柏崎の所在をつとめた人である。前代

ら文人の家であつて、今の主人も詩を能くした人の才がある。之は柏崎の蓑川と称して、蓑川浸後丸田の其女を蓑川の子に娶いしたが、自分も旧縁ありへもらいが、丸田は西洋流の屋敷をもつて遂に(ことし)今年歿した。其家の梅樹を拭とても心つかとかで梅次の人興を見ぬ。ちゝ年程の古木がある。離れの家が書斎ともなつてゐる。庭園も風趣がある。示された書畫帳は山陽井田家の手に渡者が、流れは真贋を弁ずる能はずとの無味を含むものもあつた。自著のパンフレット武程の野ゝ柏崎通一の文藻家であることを北海道で知つた。巻末に詩は左のごとくである

當期依基幕考名、掃石焚香倒歳迎
望梅の日、渇欲醫、新雨清秋舊知情

○ブッソドム社の庄司氏、予の図書に関する隠
業を出版らんことを求む、予諾して試みる其の
材料の目録を作り、約五十件を得たり、思へら
く一冊にまとまるを得べしと、後日赤思へらく、図書
は隠見なるもの図書に趣味を有つ者に亦
てことあるの無味なるものが一般の読者まで
何うあらん、寧ろ北海報社と二月間連載
し、刪つべきは刪り、加ふべ
きは更らに加へて、刊行らんまへと、庄司氏と高岳

標原製

す、庄司氏これを可とす、依つて時日人を取
捨すること、北の漫談中に図書に就ての隠者
十数篇あり、更らに十数篇を追加せば、北
の一数相市の分量あらん、予は春城人の需め
応じ隠者の伝記を心うけ居るも未だ如何か
どうかの。こゝに春城漫談なる材料を取り入んず
る図書に就ての隠者を書き入れ、ブッソ
ドム社にて出版するものを撰定を生ずる憂なく、
但し春城今回出版のものの多きに差し先
かんさるべし、甚迂を忘れ一助として来月全部
努力らんことを期す

○自分も四十数年図書を漁りて可なり蒐集せし

七月廿七日記

此の家を建築するに当り愛して愛玩百萬四五千
円を投じて年来の情力で今日蒐集したものが此処
に書き写本を渉つてみる。写本の面白味名家の
自筆本を重ず蒐集したものである。まづ第一に三百部
位しかないが写本を集めるのまくあるものの主張である
る、写本のまく絶対に刊行されないものがある。
刊行されないものも絶対写本のまいのも、其の写本
いまも云へるものが、全部特別写本のまいのも、其の写本
が自筆の稿本であつて無くても絶対大切な意
味がある、それこそ無さうなものが天地間に永久に求め
得られないからである。別して著者の稿本なる
ものは、著者の精神が乗つてゐる。著者の著跡が

榛原制

更に其上に反映する一層の大切味がある。従来
塗抹改竄の跡を存してゐるものもあるが、それは
偶と著者の熟考の思想の動向を知る手がかりとなる
ばかりでなく、著者の苦心した経過もこれから
よく推察されるから稿本ほど貴さ
は無い。稿本の如何様の写本でも稿本
本の内容絶対に他人の手を離れたことのないの
もある。これ等は全くウアルシンのようなものとそこに大
なる価値がある。著者の稿本はあらずとも
名家が名家の著書を自写した本でも相当の
価値がある。其の著跡が存するのみならず、
往々校勘や批評を加へてある所に価

位がある。写本の中ひも舊鈔本と書き）云ふ所のあ
ハ若家の稿本でうつくしい赤進んが写したかつてうつ
くしいものもあるが時代がやゝ古く書風の時代と立かいふ
自ひもあるとそれが第一正確で立つてもあり、文字の書き
さ方が同時に折合つて一種の古雅を感ずる時代の
折合といふことは大切なことで、古歌と今の人が写し
たのでハ、流字本と書ひうるく月歌の故味の武ハん
セント失ふの憾がある。第一から有名な本ハ概して
誤写が多く、輪写毎に武許か誤写や脱漏などが
あるので、校勘のうえ可成原書と同一時代の舊
鈔本を要する。舊鈔本の貴さいこゝに在つて珍ら
しい舊鈔本が現れん出れ為めの目久しく回覧しん

横原製

誤が正さるれ鈔本と共同とある。走て写本ハ此等
の點を考くること重セ後ぐこゝ、刻本ハいくら孫ひも
稿のもの、どこかに価値するが、写本ハ元のまゝと傳
かれこ事有難ふ。外絵巻ふいことがあるから、
自分の主ら此の苑集と力と入れて振るとゝ云條実
ハ絵り振ることが手ふ入らぬ。　七月廿八日記
○八月弾の書物展　明し強紙れ小島烏水の山岳
文献の小展望とゝ云ふが収めてある。其内に池田六郎
のアラスカ氷山旅行と云ふ書名が見へてゐる。池田
天游の友人肥田晋三郎の女婿ひ無米利加
なかみれ頃、アラスカに沈金が深山を千うバッテ
あるとゝ云ふ評判を動かさんも冒険旅行を

以上は日本の山を書いた本であるが、日本人が日本文で外國の山を書いた本として、寧ろ珍本の一つとして私は新潟の人、池田天游(有親)著『アラスカ氷山旅行』(『假綴、四六判、一八六頁)を擧げたい。一八九六年(明治二十九年)二月十日米國桑港を出發し、途中で船は岩礁に乗り上げ人跡未到のバルデに上陸、船を暫く氷塊に繫いだところが、著者は過まつて氷底に落ち、漸く救助せられ氷山に登攀(著者の用語「氷山」は「氷河」のことである)それからの氷河行に於て或は天幕を風雪に捲かれ或は地震に遭ひ、殆ど凍死せんとして三十八日目で始めて綠りの森林を見、八月十三日遠征を斷念し、アラスカの首都に引き返すまでの、氷河及び氷河の山岳登攀記である。本書の成立に就いては著者の汗くさい古手帖に洋筆(ペンのことか)を以て亂雜に書き放したものを、友人が判讀淨書して版行したものの由である。挿畫の如きも「其癡笑ふべきが如し」と、友人が言つてゐるほど稚拙を極めたものであるが、氷河のクレツヴアスや氷河を蒙つた山岳の背景なども描寫されてゐる。日本人の氷河登攀記の單行本としては、最初のものであらう。(多田春樹氏が白瀨中尉一行の南極探險を書いた本は、大正元年の出版だから、もつと後だ)本書は明治三十六年五月の出版で、發行所は東京芝區雲梯舍となつてゐるが、恐らく本書一冊限りの俄か作りの發行所でがなあらう。

やつて、此書の辛酸を嘗めた旅行記だ、當たり前だ、四年から寫さうと不思議してゐたのが、今は失つて烏有の記と據つて思ひ出しみるも懷かしい思がある。今でも記憶の中にあるが池田がある地點に達するまでの氷山を傳へ傳へちらずに、えんを跨くまで、先つ氷山を段を刻み、食料を化を運搬する氣

橋原製

用とそこに北の自から作つた段を上下し北困難を談るまでは後も書くことを興味はあるが、本人はいかばかり難儀を感じたであらうか、烏有の文所を據んで、北者の日本人の書かれた氷河登山記の最初のものとあらう。

七月廿十日記

○ことしの早天續く閉口するのは池水の全くかれて底を露はし、池底龜裂を生じ、稚草枯死し、完全田を見ることなき亂のあることなり。北の暑さは池魚皆死し、睡蓮、河骨も枯れ、時に水面うつるも池中全体に立すのみを湛へることなく、全体自分の宅地は三尺ほどを掘んだを見る所は池中にもあるものの水が湧くのであるのは、さることの

きへのは何故かと、近所の家の池の消息を尋ねて見ると皆其池とは殆んどもないと云ふ、実は原因は降雨を欠くのみならず、江戸川改修工事が真の原因であることを氣がついた。江戸川の工事は水を排出する機械仕掛で毒水同然なる水を排出するためである。此の排出の為め附近一帯の地底の水まで搾り出されて、池底より水も涸かず、井戸も底を減ずとする傾きがある。今涸いつも睡蓮池面を蔽ひて紅白競つて咲く涸びあるのみ、ことに一は何ゆえか殺風景の事よ、但此憾みもきい五分の腹でもある。九十歳の高温は麦酒の味を十倍も美化し、麦飲又麦飲、吾

横濱

口腹のみ幸福を覚へさるは幸也哉と（七月三十日記）

○昨日の書物の序上余く帯と素風石清二部を出して内曲麦飲亭と示す、一部は大村西崖氏本業刊本で他の一は加藤傍蒙心氏校訂の刻本也、蒙心氏は乾坤寺善教の門で上海の有名人と共の二書を携帯せさりしが印して麦飲亭にも一書を送くも浮き、麦飲亭は業刊本を見て版刻として云く此本は原の花本を模倣して成るものなる西崖が此書を見せんとする時議本の座にて

入札消息

▲雙軒庵藏品の賣立

雙軒庵松本松藏氏多年蒐集の美術骨董品七百餘點の中、其目星しき物二百七十點、六月廿六日大坂美術倶樂部にて入札に付せられた。國寶仁清壺の十八萬九千圓を最高値として總賣上高二百六十八萬圓餘を計上し近來珍らしき大入札なり。千圓以上の物左の通り。

一萬圓以上

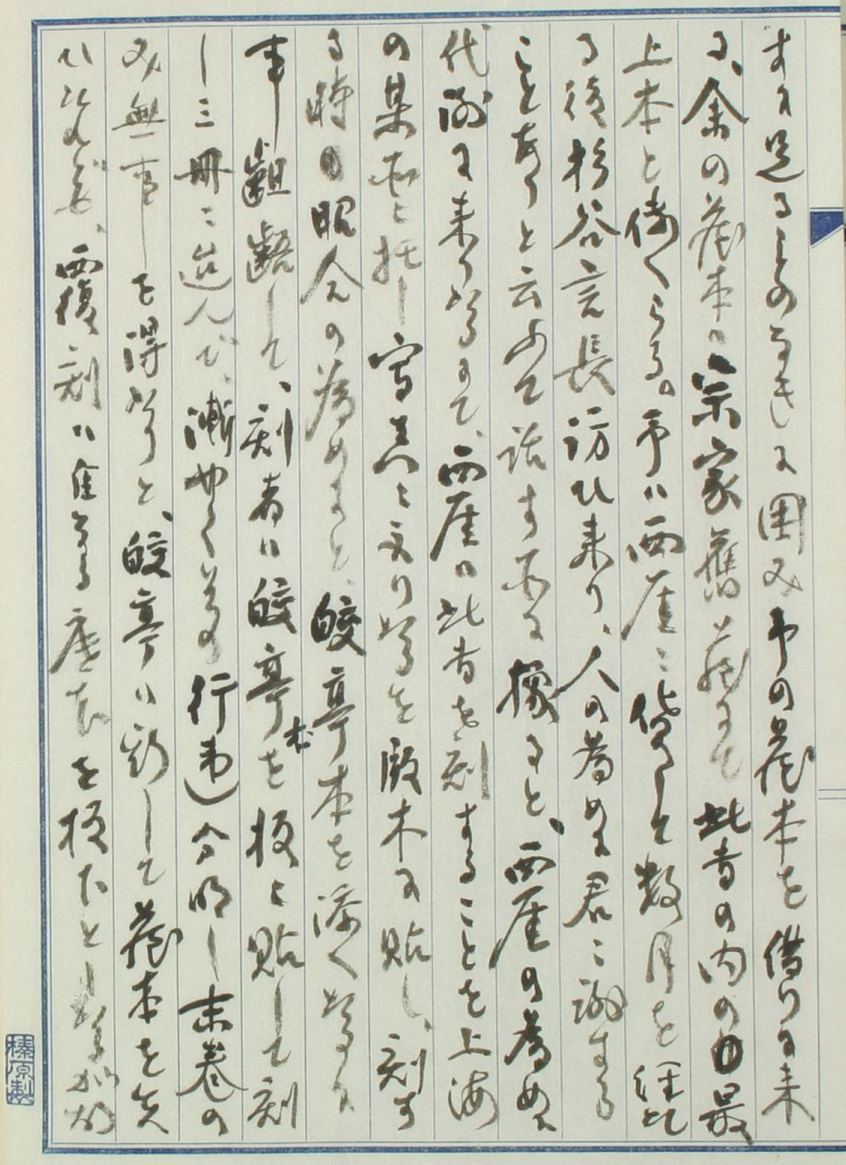
▲國寶仁清色絵藤花文様壺（拾八萬九千圓）▲藝阿彌瀧山水（拾六萬九千八百圓）▲竹田亦復一樂帖（拾八百圓）▲山陽天草洋詩（貳萬七千九百圓）▲竹田親鸞上人剃髪（貳萬六千圓）▲一休梅絵賛（貳萬參千九百圓）▲古赤絵共蓋香爐（貳萬參千九百圓）▲一鳳佛法鳥（貳萬參千七百圓）▲碌青磁算木香爐（貳萬參千百九十八圓）▲東山名物牧溪拾得（貳萬千九百圓）▲梅逸老松双鶴（貳萬千四百六拾圓）▲應舉鶏（壹萬九千四百拾圓）▲竹溪中旭日群鶴左楊柳香魚右菊花双鶏三幅對（壹萬九千二百圓）▲青蓋麥縣式靈芝耳花入（壹萬九千圓）▲岸駒柳翡翠（壹萬八千九百九拾圓）▲華山吉野懐古畫賛（壹萬八千九百八拾九圓）▲竹田乾坤一草亭（壹萬八千九百五十圓）▲海屋溪山芳信（壹萬八千九百圓）▲秋風畫册（壹萬七千參百圓）▲梅逸疊泉密竹（壹萬六千百圓）▲景文紅蓮白蓮（壹萬六千圓）▲竹田松溪聽泉（壹萬參千九百八拾九圓）▲竹田水西宜[illegible]（壹萬參千九百圓）▲山陽月ヶ瀬[illegible]景言野子（壹萬千八百圓）▲寛齋秋溪遊鹿（八千參百九十圓）▲一鳳雪中六甲山（八千百圓）▲山陽[illegible]七絶（七千七百圓）▲常信四季山水六曲一双（七千百九十八圓）▲介石南山黄柑那智懸泉双幅（七千四百參拾九圓）▲文人名家張交六曲小屏風半双（七千百圓）▲古九谷祥瑞模様輪花鉢（六千九百九十三圓）▲其一雪松（六千九百五拾圓）▲青瑣玗勾玉（六千九百拾圓）▲竹田仙山採藥（六千五百圓）▲山陽十二名家詠史六曲一双（六千四百八十圓）▲探幽瀧（六千四百六拾圓）▲松花堂布袋（六千參百九拾參圓）▲應舉藤鷸南天鴨双幅（六千二百拾圓）▲竹田秋邨歸牧詩畫双幅（六千貳百圓）▲海鼠面盆葛明祥在銘（五千九百九拾圓）▲光起紫式部（五千八百九拾八圓）▲徹山遊狸（五千八百九拾參圓）▲草坪歳寒仙居（五千八百九拾圓）▲芳園褥尾秋景（五千[illegible]百合圓）▲竹田童道賛茶（五千六百圓）▲竹田消夏

入札消息

▲山陽與物爲春四字額（四千百三十圓）▲松花堂澤庵江月遠州和漢四句連歌（四千百十九圓）▲狙仙薔薇猿茶木猿双幅（四千百十圓）▲木米祥瑞摸山水花鳥絵四方茶碗（四千百圓）▲應舉千代能（參千九百三十九圓）▲應舉芒蟲（參千九百三十圓）▲直入四季山水畫册（參千九百七十圓）▲山陽眞率二字額（貳千九百三十九圓）▲岸駒猛虎（參千百拾圓）▲竹田松谿錬丹（參千百圓）▲景文夏山溪流（參千八拾圓）

壹千圓以上

山陽枯木寒鴉（二千九百九十八圓）▲青磁端反鉢（二千九百七十圓）▲山陽眞率二字額（貳千九百三十九圓）▲山陽智恩院看花詩（千九百三十九圓）▲清巖關大字（千九百三十圓）▲山陽謝安遊東山詩七絶（千八百九十八圓）▲保全安南鶯十二支茶碗（千八百九十圓）▲竹田清客喫茶（千八百九十圓）▲南蠻經籠花入（千八百九十圓）▲金銀毛織唐草模様敷物（千八百十



入札消息

▲雙軒庵藏品の賣立

雙軒庵松本松藏氏多年蒐集の美術骨董品七百餘點の中、其目星しき物二百七十點、六月廿六日大坂美術倶樂部にて入札に付せられた。國寶仁清壺の十八萬九千圓を最高値として總賣上高二百六十八萬圓餘を計上し近來珍らしき大入札なり。千圓以上の物左の通り。

一萬圓以上

▲國寶仁清色繪藤花文様壺（拾八萬九千圓）▲藝阿彌瀧山水（拾六萬九千八百圓）▲竹田亦復一樂帖（拾壹萬圓）▲竹田松巒古寺（九萬參千圓）▲竹田歳寒三友双鶴（七萬八千九百九拾圓）▲木米兎道朝徹（七萬參千圓）▲乾山八ッ橋繪賛（六萬九千參百拾圓）▲竹田輕舟讀書（六萬參千圓）▲碪青磁袴腰香爐（五萬參千九百圓）▲飛青磁瓶子花入（五萬參千圓）▲華山千山萬水（五萬千九百八拾圓）▲古赤繪六角瓢花入（四萬七千九百圓）▲景文中芙蓉峰左曉禽紅樹右柳鶯旭影三幅對（四萬參千九百九拾圓）▲牛江春山閑居（四萬參千九百九拾圓）▲竹田遺印三十顆（四萬參千圓）▲吳春中雲中壽老左老松双鶴右海邊旭松三幅對（四萬千六百圓）▲傳周丹子雲中釋迦（參萬九千九百圓）▲祥瑞在銘蜜柑香合（參萬八千八百圓）▲竹田秋溪訪友（三萬五千九百三十圓）▲吳春旭磯馴松（參萬參千九百拾圓）▲雪舟晴雪齋圖（參萬參千九百圓）▲竹田清溪煎茗（參萬三千八百九十圓）▲時代薄虫蒔繪茶籠皆具（參萬千八百圓）▲山陽天草洋詩（貳萬七千九百圓）▲竹田親鸞上人剃髮（貳萬六千圓）▲一休梅繪賛（貳萬參千九百圓）▲古赤繪共蓋香爐（貳萬參千九百圓）▲一鳳佛法鳥（貳萬參千七百圓）▲碪青磁算木香爐（貳萬參千百九十八圓）▲東山名物牧溪拾得（貳萬千九百圓）▲梅逸老松双鶴（貳萬千四百六拾圓）▲應舉鶏（壹萬九千四百拾圓）▲竹溪中旭日群鶴左楊柳香魚右菊花双鶉三幅對（壹萬九千二百圓）▲青磁麥鼎式靈芝耳花入（壹萬九千圓）▲岸駒柳翡翠（壹萬八千九百九拾圓）▲華山吉野懐古畫賛（壹萬八千九百八拾九圓）▲竹田乾坤一草亭（壹萬八千九百五十圓）▲海屋溪山芳信（壹萬八千九百圓）▲秋風畫册（壹萬七千參百圓）▲梅逸疊泉密竹（壹萬六千百圓）▲景文紅蓮白蓮（壹萬六千圓）▲竹田松溪聽泉（壹萬參千九百八拾九圓）▲竹田水西草堂（壹萬參千九百圓）▲山陽月ヶ瀬眞景扇子（壹萬貳千九百六拾圓）▲竹田風標公子（壹萬貳千參百圓）▲唐物青貝樓閣人物平卓（壹萬貳千百九拾圓）▲御本刷毛目歪鉢（壹萬二千百參拾六圓）▲吳州赤繪見込花鳥鉢（壹萬千九百十圓）▲蛇足漁舟山水（壹萬千九百圓）▲大雅堂楓橋夜泊（壹萬千六百圓）▲吳州水鳥繪火入（壹萬千六百圓）▲古染付胸紐茗碗六客（壹萬千二百九拾圓）▲織部手鉢（壹萬千百拾圓）▲色繪祥瑞梅竹裂模様中皿十八人（壹萬千百圓）▲山陽日本樂府第一首（壹萬八百圓）▲山陽水墨山水（壹萬五百圓）▲乾山色繪椿若松四方水指（壹萬參百圓）

五千圓以上

▲梨皮泥具輪玉茶銚（九千參百圓）▲竹田梅花宿鳥（九千百九拾圓）▲堆朱黄蜀葵彫香盆張成在銘（八千九百八拾圓）▲和蘭陀藍繪花鳥鉢（八千九百三拾圓）▲素絢美人戯猫（八千八百五十九圓）抱一紫式部（八千八百圓）▲寛齋秋溪遊鹿（八千參百九十圓）▲一鳳雪中六甲山（八千百圓）▲山陽史七絶（七千七百圓）▲常信四季山水六曲一双（七千百九十八圓）▲介石南山黄柑那智懸泉双幅（七千四百參拾九圓）▲文人名家張交六曲小屏風半双（七千百圓）▲古九谷祥瑞模様輪花鉢（六千九百九十三圓）▲其一雪松（六千九百五拾圓）▲青琅玕勾玉（六千九百拾圓）▲竹田仙山採藥（六千五百圓）▲山陽十二名家詠史六曲一双（六千四百八十圓）▲探幽瀧（六千四百六拾圓）▲松花堂布袋（六千參百九拾參圓）▲應舉藤鷸南天鴨双幅（六千二百拾圓）▲竹田秋邨歸牧詩畫双幅（六千貳百圓）▲海鼠面盆碁明祥在銘（五千九百九拾圓）▲光起紫式部（五千八百九拾八圓）▲徹山遊狸（五千八百九拾參圓）▲草坪歳寒仙居（五千八百九拾圓）▲芳園栂尾秋景（五千八百拾圓）▲竹田鐘馗煎茶（五千六百圓）▲竹田銷夏遊戯畫册（五千五百九拾圓）▲白砡遊環共蓋花入（五千四百圓）▲高芙蓉幽賞未已（五千參百九拾八圓）▲吳春雪中訪友（五千參百圓）▲山陽茶色竹蘭四字額（五千三百圓）▲山陽露頂灑松風五字一行（五千百九十八圓）▲海屋瀑布（五千百圓）▲芳園旭日古松（五千百圓）▲雪舟一本菊（五千百圓）▲竹田高客喫茶（五千三十圓）

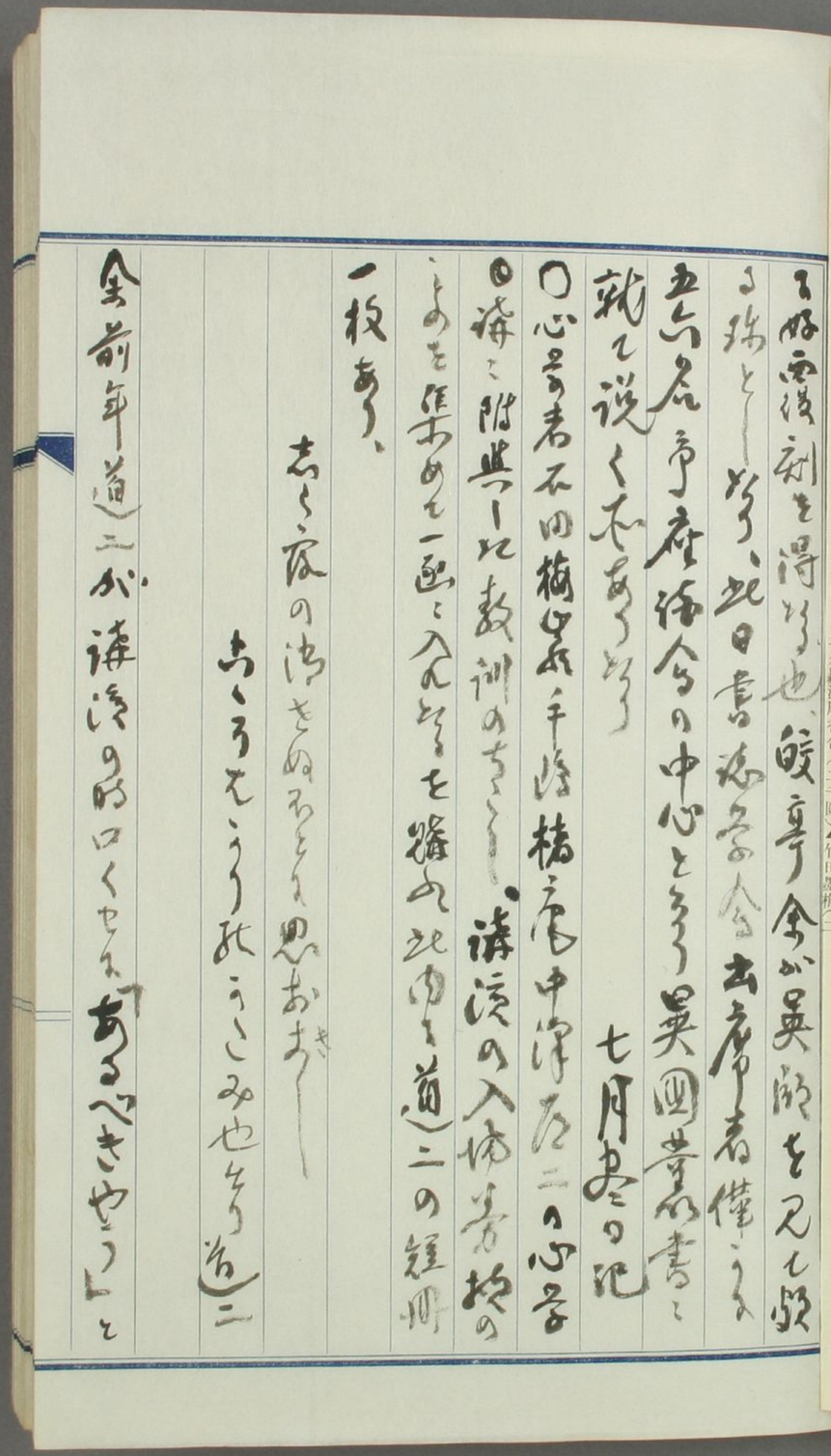
參千圓以上

▲長寛正法寺形煮物椀二十人（四千九百三十圓）▲寛齋溪山雪霽（四千八百九十八圓）▲海鼠横手水注葛明祥在銘（四千八百圓）▲草坪羅壁山房（四千七百九十三圓）▲清曠柳翡翠（四千七百六十圓）▲竹田魚貝（四千六百六十圓）▲竹田挿秧（四千三百九十八圓）▲竹田果蔬蟲卷（四千參百九十三圓）▲山陽桓武陵詠史七絶（四千三百圓）▲雲華芝蘭竹石卷（四千百九十圓）

▲山陽與物爲春四字額（四千百三十圓）▲松花堂澤庵江月遠州和漢四句連歌（四千百十九圓）▲狙仙薔薇猿茶木猿双幅（四千百十圓）▲木米祥瑞摸山水花鳥繪四方茶碗（四千百圓）▲應擧千代能（參千九百三十九圓）▲應擧芒蟲（參千九百三十圓）▲直入四季山水畫册（參千九百貳拾圓）▲山陽無邪心居四字額（參千八百九十八圓）▲竹洞秋汀白鷺（參千八百九十八圓）▲山陽賻雲華七絶（參千八百九十三圓）▲菩提樹念珠（參千八百九十圓）▲古染付山水繪芋頭共蓋水指（參千八百八十八圓）▲古銅金銀象嵌獅子耳花入（參千八百三十九圓）▲孝敬雪中山水（參千七百九十圓）▲芦雪童子弄狗（參千七百圓）▲竹溪秋草鶉（參千七百圓）▲景文十二ヶ月繪短册（參千六百九十八圓）▲竹田花鳥（參千六百九十圓）▲雲鶴端反鉢（參千六百九十圓）▲山陽赤夜叉詠史（參千六百九十圓）▲名家聚錦畫册（參千六百八十九圓）▲山陽竹洞笠山合作山水山陽題詩七絶双幅（三千六百八十圓）▲芦雪若竹双雀（三千六百四十三圓）▲竹田高士夢瀟湘（參千六百三十九圓）▲竹田梅樓木橋（參千六百圓）▲竹田小景山水（三千五百九十圓）▲草坪花果（三千五百六十圓）▲古錫圓式托子五客（參千五百十圓）▲景文紙雛（參千四百九十圓）▲唐物青貝螺蒔軸盆（參千參百九十九圓）▲竹洞密竹（參千參百九十八圓）▲雪村東坡騎驢（參千參百九十八圓）江月一行（參千三百九十八圓）▲一鳳藻刈船（參千三百九十圓）▲□染付寄茗碗五客（參千三百圓）▲芳園月杜鵑双幅（參千二百十九圓）▲山陽主忠信三字額（參千百九十八圓）▲山陽膝上畫山水（參千百九十圓）▲山陽花落家僮未歸六字一行（參千百拾十圓）▲寛齋若松双鹿（參千百三十九圓）▲菰翁詠松七絶（參千百十圓）▲岸駒猛虎（參千百拾圓）▲竹田松繪錬丹（參千百圓）▲景文夏山溪流（參千八拾圓）

壹千圓以上

山陽枯木寒鴉（二千九百九十八圓）▲青磁端反鉢（二千九百七十圓）▲山陽眞率二字額（貳千九百三十九圓）▲梅逸蓬海舟中（二千九百圓）▲竹田盧頭迄臘畫贊（二千九百圓）▲竹田玉堂富貴（二千八百九十圓）▲山陽桂川七絶（二千七百九十八圓）▲泰琴秋鷺野禽（二千七百六拾圓）▲山陽十五名將詠史卷（二千七百圓）▲玉堂松風洗心（二千六百九十圓）△山陽蘭竹石詩畫二枚折半双（二千六百九十八圓）▲唐物籠六角上手花入（貳千六百九十圓）▲山陽春山淡煙（二千六百三十圓）▲山陽小早川隆景詠史便面掛額（二千六百二十八圓）▲竹田碧溪蕭寺（二千五百九十圓）▲狙仙金地三番叟華合作枯木竹石（二千五百三十圓）▲山陽荷古二字額（二千百九十八圓）▲竹田奇君老松（二千三百九十八圓）▲竹田茶道三十六家撰畫册（二千三百九十圓）▲竹溪梅竹林山水竹洞題詩二枚折一双（二千三百八十圓）▲竹田下繪舞子燒茗碗五客（二千三百十圓）▲田黄獅子紐印材（二千二百八十九圓）▲唐物青貝樓閣山水風呂先（千四百九十圓）▲竹田溪村尋梅七絶（千三百九十八圓）▲杳雨山水卷（二千二百五十六圓）▲海僊松蔭清話（二千二百三十九圓）▲吳春係康畫贊（二千二百圓）▲祥瑞梅竹繪德利（二千二百圓）▲竹洞林和靖（二千二百圓）▲山陽溪堂待友（二千百九十八圓）▲山陽浪花橋納涼七絶（二千百三十九圓）▲小竹瞞堂書屋（二千百二十九圓）▲飛龍在天硯（二千百十圓）▲竹田陳魯望煎茶（二千百十圓）▲大雅堂疎竹水亭（二千百圓）▲松花堂鴨長明繪贊（二千九十圓）▲竹溪春山花雨（二千五十圓）▲堆朱羅漢彫香合（二千圓）▲竹田墨梅（二千圓）▲山陽智恩院看花詩（千九百三十九圓）▲清巖關大字（千九百三十圓）▲山陽謝安遊東山詩七絶（千八百九十八圓）▲保全安南寫十三支茶碗（千八百九十圓）▲竹田清客喫茶（千八百九十圓）▲南蠻繩簇花入（千八百九十圓）▲金銀毛織唐草模樣敷物（千八百十圓）▲長寛菊桐模様吸物椀三十人（千七百九十八圓）▲時代籠地秋草蒔繪手焙（千七百五十九圓）▲山陽古屋書龍蛇五字一行（千七百二十五圓）▲日野南洞公詩稿（千七百三十圓）▲竹田掃具（千七百十圓）▲木米雲鶴寫茶碗（千六百九十八圓）▲堆朱春星古竹筆取交五本（千六百九十八圓）▲唐物籠木耳花入（千六百九十三圓）▲砂張青海盆（千六百九十圓）▲宜興窯獨茶銚（千六百九十圓）▲竹田三叉港詩畫合裝（千六百五十圓）▲竹田手造舞子燒煎茶皆具（千六百十圓）▲竹田兼好法師歌意（千六百十圓）▲山陽移居築園十四首通議七首外十三首卷（千五百九十八圓）▲青磁李白盞八角香爐（千五百六十圓）▲應擧達磨（千五百六十圓）▲椿山山陽像（千五百圓）▲唐物青貝寒山拾得繪掛額（千四百九十八圓）▲唐物青貝樓閣山水風呂先（千四百九十圓）▲竹田溪村尋梅七絶（千三百九十八圓）▲小珍幅四幅（千參百九十圓）▲文政諸家寄合小畫册（千三百八十圓）▲竹洞夏山烟雨（千二百五十圓）▲牛江細香合作蘭竹（千二百二十圓）▲竹田清淨中和之樓六字額（千二百十九圓）▲夙夜山水畫册（千二百圓）▲古銅龍耳細口花入（千二百圓）▲青雲一路硏（千百九十三圓）▲吳春賓舟（千百八十九圓）▲松花堂詩卷（千百三十九圓）▲山陽乞正茶山詩稿（千百十九圓）▲唐物黑無地平卓（千百十圓）▲山陽寒潮二字額（千十九圓）▲上田秋成和歌景文繪表具（千圓）



多くモツトし此しれ。北海を一折つ出いれのを桂湖村
と共くん愛けれることがあるが、今ハ之を笑中に
し北征冊帥と共文を論ずるか、
○此の一二の書畫を得り、益田通夫の印の家蔵
多くあるも其の業績い夢つを得ることを、偶
々得本小松の詩帳を賜の日く
曲逆雲環石級高、滿亭山色繞闌黄
松風似聽長春夢、自笑雲門百尺
通天南
溥
仙の一長尾海田の花信十番を字り画興黄
縑を畫す、例と侍り便奥ゑき不余も愛すし
此の尚は二三の書簡を婚の、中ゑあ雄文完

岩崎炭坑を後藤象次郎
に譲受の顛末を詳細と録し、巻
紙丈紙と及び、後藤世ゑ知れる後藤との内
秘を詳かにす、徳川とゑべき文書ゑ、黄金
文左のごし
明治十四年三月一日後藤象二郎岩崎弥太
郎の間に高島石炭坑譲受に付左の趣味
の契約をなり
一岩崎の金六十萬円を支出し後藤ハ黄金数
を以て田氏の債券及営業未拂金を
清償ゑ仕事ハ一切七十五名代の担保
に務定し若し黄務定に違ふる時ハ

共差金ハ岩崎の負債とす

一 後藤氏より政府へ上納すべき高島炭坑の代金残金二十五万九千六百三十六円四十五銭八厘六毛の外に岩崎氏に於て引受す

一 右に異し後藤氏ハ高島炭坑機械建物地面其他一切を抵当として現在炭を担保とし岩崎氏より借入れ為替金、即チ前借り金の岩崎に於て清算すべきもの

一 政府上納金の後藤氏の負債及ひ共差

来拂金清算の為め要する金額六十万円を限度とする時の岩崎氏の北海道と取消スことを得ること

一 四年三月三十一日の炭坑其他一切の物件引渡完了するものとして二氏連署政府へ届の後登記を差出すべし登記料ハ四月末の工部大蔵の許可を仰ぐ

一 右の後藤氏の炭坑ハ政府上納金の内として同氏と負債者等を清算すること

主等の相談見込通り不被行終て金六十六万千七百七円八十八銭九厘を金額を

要するに三ヶ年の契約期限を六箇
年間の後者と歎願し岩崎氏支出
しなり

一　初め高島炭坑及び債と就て以後彼の生活費
用として炭坑営業中毎年銀貨壱万五
千円を岩崎氏仕送るべきとなり而して炭
坑の営業十ヶ年以後に償債する時は
一時に金拾萬円を後者に仕送ること但し
毎年の仕送り金を止めるべきこと
右契約金の期限に新しく年々壱万五千円
に減じ毎月銀貨壱千円を仕送
ること但し同時に十ヶ年の期限を濁し高島氏

業中無利息とし一時に拾萬円仕送
りをなす取消しなり

一　明治二十六年四月二十日岩崎久弥と後者の
間に和議成りて右契約を取消し久弥氏
後者に一時に金拾萬円を送り月
々の仕送り金を中止し澤と高島と新
双方の関係を元通りとなる
此の如き書面に何うの効験あるや疑
お書面の如き弥太の書面なるも久弥氏と宮内氏
かに、元来撰ると此の撰山の責任者が
公一のうち後者に焼いさん、明治六年
「ケリ」かけいなとて　（了）

新聞界の元老
山田本社主筆
昨日午後三時遂に逝く

本社主筆、理事山田毅城氏は近来健康すぐれず西大畑の自邸において療養の傍ら社説を擔當し常々の健筆を振つてゐたが、この春以來臥床の日多く、布川、小山兩博士の診察、治療を受けつゝあつたところ、數日前より病にはかに革まり、藥石の効なしく、衰弱日に日に加はり田鶴子夫人始め遺族、親戚一同の手厚き看護のうちに三十日午後三時遂に逝去した、享年五十八歳、遺骸は盛夏のことなれば三十一日茶毘に附し

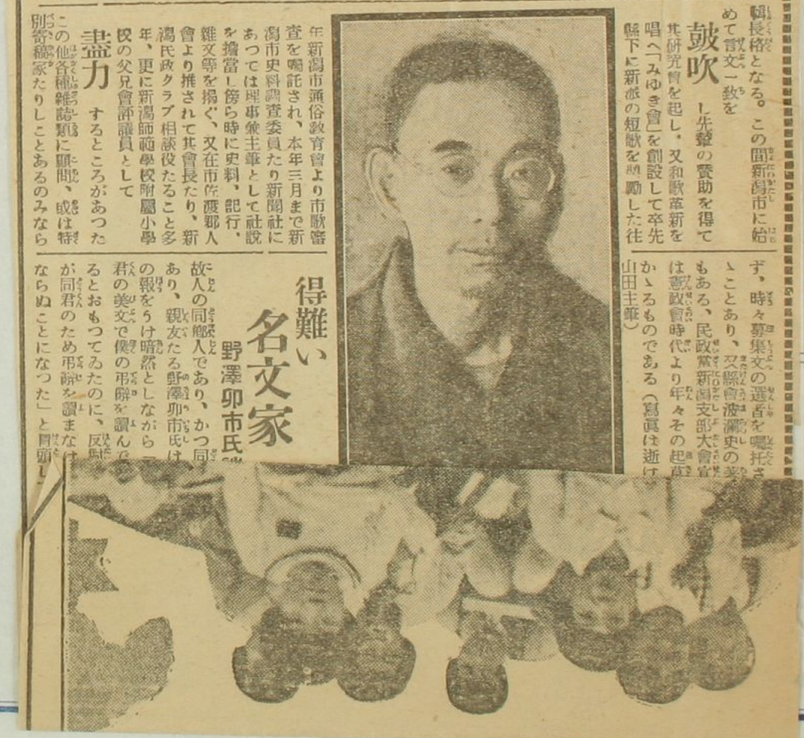
葬儀 は八月二日午前九時より十一時迄の間自邸において行はるゝことゝなつた、遺族中又一男順氏は小學校教員にして又一男氏は市内豊照校に勤務氏は北浦原郡水崎校に勤務してゐる、自邸には親戚並びに本社員がつめかけ、しめやかに通夜をなした

氏は佐渡相川町の舊士族の家に明治九年八月生る。幼より數學を厭ひたゞ作文は常に其首位を占め、之に次いで習字及び讀方を得意とせるも、體操に至つては極めて拙にして多くは之を回避した。十五年新潟に出でゝ北越學舘に學びしも、居ること半年にして腦病にかゝり、退學帰郷專ら漢籍と國學、和歌の研鑽に沒頭す

讀書 は多く十二三歳より廿歳までの間に、數學、理科學、農藝、經濟等を除くの外、文藝、政治、歴史、隨筆の類を貪り讀み後年新聞記者としての素地をこの時代に得た、十九歳にして新潟新聞に入る、その動機は佐渡に發行せる漢雜誌に毎號寄稿せるを當時の新潟新聞主筆にして佐渡出身なる故富野關藏氏の注目するところとなりによる、ゐること九ケ月にして地方通信部主任となり、縣會擔當記者を兼ね五年後にして編輯長格となる。この間新潟市に始めて讀文一致を唱へ「みゆき會」を創設して卒先其研究會を起し、又和歌革新を唱へ「みゆき會」を創設して卒先縣下に新派の短歌を煽動した往年新潟市通俗教育會より市歌審査を嘱託され、本年三月まで新潟市史料調査委員たり新聞社に於ては理事兼主筆として社説を擔當し傍ら時に史料、記行、雜文等を揚ぐ、又在市佐渡郷人會より推されて其會長たり、新潟氏政クラブ相談役たること多年、更に新潟師範學校附屬小學校の父兄會評議員として

盡力 するところがあつた

この他各種雜誌類に顯明、或は特別寄稿家たりしことあるのみならず、時々新集文の選者を嘱托されたことあり、又縣會議員、市會議員の經歴もある、民政黨新潟支部大會當時は縣政會時代より年々その起草かゝるものである（寫眞は逝けし山田主筆）



得難い名文家
野澤卯市氏

故人の同郷人であり、かつ同學の親友たる野澤卯市氏は、「故人は君の美文で僕の弔辭を讀んでくれるとおもつてゐたのに、反對が同君のため弔辭を讀まなければならぬことになつた」と冒頭し

日山田毅城八五六年未肺患と羅り家居執筆し新潟新聞社を営むもの十ヶ年新潟市に越き、新潟新聞社中の人と共病苦を共にしつゝ病の癒ゆるを待ちつゝ執筆に従事し、事その重職を担ふ者の如くに、而して自分の交りは二十数年来の友人なり、余の故郷佐渡の出身なり、余が始めて書を代つて書きし、余を取つて社員に誠を諸氏の秘書であつた。七八年前余が酒筆を生涯

新聞界の元老
山田本社主筆
昨日午後三時遂に逝く

本社主筆、理事山田鶴城氏は近来健康すぐれず西大阪の自邸において療養の傍ら社説を擔當し意々の筆鋒を振つてゐたが、この春以來臥床の日多く、布川、小山兩博士の診察、治療を受けつゝあつたところ、數日前より病にはかに革まり、壓石の効なしく、衰弱日に日に加はり田鶴子夫人始め遺族、近親一同の手厚き看護のうちに三十日午後三時遂に逝去した、享年五十八歳、遺骸は徳夏のことなれば三十一日茶毘に附し

葬儀 は八月二日午前九時より十一時迄の間自邸において行はるゝことゝなつた、遺族中又一夏男爵氏は小學校教員にして又一氏は市内豐照校に夏男氏は北浦原郡水崎校に勤務してゐる、自邸には親戚並びに本社員がつめかけ、しめやかに通夜をなした

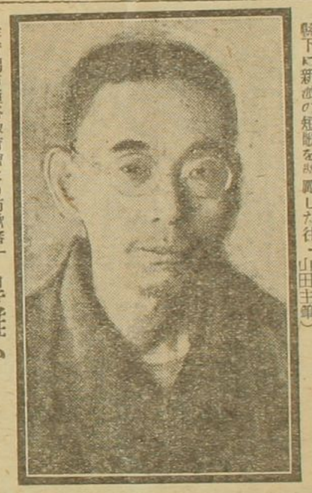
氏は佐渡相川町の舊士族の家に明治九年八月生る。幼より數學を嗜ひたゝ作文は常に其首位を占め、之に次いで習字及び讀方を得意とせるも、體後に至つては極めて拙にして多くは之を回避した。十五年新潟に出でゝ北越學館に學びしも、居ること半年にして腦病にかゝり、退學鄉專ら漢籍と國學、和歌の研讀に没頭す

讀書 は多く十二三歳より廿歳までの間に、數學、理科學、農藝、經濟等を除くの外、文藝、政治、歴史、隨筆の類を貪り讀み後年新聞記者としての素地をこの時代に得た、十九歳にして新潟新聞に入る、その動機は佐渡に發行せる漢雜誌に毎號寄稿せる當時の新潟新聞主筆にして佐渡出身なる故高野鶴藏氏の法月するところとなりしによる、ゐること九ケ月にして地方通信部主任となり、會擔當記者を兼ね五年後にして編輯長格となる。この間新潟市に始めて詩文一致を

鼓吹 し先輩の贊助を得て其研究會を起し、又和歌革新を唱へ「みゆき會」を創設して卒先縣下に新派の短歌を鼓吹した往年新潟市通俗教育會より市歌審査を嘱託され、本年三月まで新潟市史料調査委員たり新聞社にあつては理事兼主筆として社説を擔當し傍ら時に史料、紀行、雜文等を揚ぐ、又在市佐渡郷人會より推されて其會長たり、新潟民政クラブ相談役たること多年、更に新潟師範學校附屬小學校の父兄會評議員として

盡力 するところがあつた

この他各種雜誌類に顧問、或は特別寄稿家たりしことあるのみならず、時々募集文の選者を嘱托さるゝことあり、又歌會、波瀾史の著書もある、民政黨新潟支部大會宣言は歌會時代より年々その起草にかゝるものである（寫眞は逝ける山田主筆）



得難い名文家
野澤卯市氏談

故人の同鄕人であり、かつ同志であり、親友たる野澤卯市氏は死去の報をうけ暗然としながら「山田君の美文で僕の形容を讀んで貰ひたいとおもつてゐたのに、反對に僕が同君のため形容を讀まなければならぬことになつた」と冒頭して語る

山田君は明治、大正、昭和を通じて雄佐を代表する文人だ實際君の名文は寶玉に等しいと言つても過言であるまい、どちらかといふと文人肌で政、經の實際的知識のとぼしい人だが一度紙上に論陣を張るときは實に中正しかも鋭い劍と化す、こんなことがある、明治四十五年森知事が來任、徹底的に政友色を發揮しこれを中心に毎日新聞の宇田滝漠主筆と論爭遂に論敵をして沈默せしめた等その證據の一つだ、それから縣會批評等は當時洛陽の紙價を高からしめるの感があつた、君の性格の清廉さも特記するに足りよう、新聞界、政界を泳いでゐるにはもつたいない位の集も何もない純情の詩人だ今この人の死をきゝ殆んど兄弟の樣な氣持でつき合つて來た僕は轉た感慨に堪へない、そして惜しんでも惜しみきれぬ氣持でゐる

山田氏の辭世
筐底より和歌五首現はる

逝ける山田氏は十年前に大患をわづらつたが、その當時ものせるものと覺しき左の辭世の和歌五首が筐底より發見され田鶴子夫人より示されたが歌人としての氏の一面をよく物語つてゐる

太患を掩きてより心ひそかに死期の迫るを知る

眠られぬ夜半に思ふはじき後のわが妻と子が行末のこと

やすらかに眠れる子らよ知らであれ死とたゝかへる父のくるしさ

辭世

死を酒にわれは紛かじたましひを子らに殘して去ると思へば

とこしへの別れぞ迫る子らよこの捨せたる父のおもわ忘るな

いとけなき昔に返り亡き親のみそばに行かんさらば妻子よ

×

何時を限りと知られざる我れ、一夜眠り成りがたく、萬感胸を衝いてこゝに此五首を詠ず、死後幸に發見せば之を近親知己に傳へよ。

複原製

○山田穀城八五六年未詳　新潟市の人　佐渡出身　新潟新聞主筆　新潟市内豐照校に勤務　自邸　佐渡相川町の舊士族の家に生る　明治九年八月生　幼より數學を嗜ひたゝ作文は常に首位を占め　習字及讀方を得意とせるも　體後に至つては極めて拙にして多くは之を回避した　十五年新潟に出でゝ北越學館に學びしも　居ること半年にして腦病にかゝり　退學　鄉專ら漢籍と國學　和歌の研讀に没頭す　讀書は多く十二三歳より廿歳までの間に　數學　理科學　農藝　經濟等を除くの外　文藝　政治　歴史　隨筆の類を貪り讀み　後年新聞記者としての素地をこの時代に得た　十九歳にして新潟新聞に入る　その動機は佐渡に發行せる漢雜誌に毎號寄稿せる當時の新潟新聞主筆にして佐渡出身なる故高野鶴藏氏の法月するところとなりしによる　ゐること九ケ月にして地方通信部主任となり　會擔當記者を兼ね五年後にして編輯長格となる　この間新潟市に始めて詩文一致を　鼓吹し先輩の贊助を得て其研究會を起し　又和歌革新を唱へ「みゆき會」を創設して卒先縣下に新派の短歌を鼓吹した往年新潟市通俗教育會より市歌審査を嘱託され　本年三月まで新潟市史料調査委員たり新聞社にあつては理事兼主筆として社説を擔當し傍ら時に史料　紀行　雜文等を揚ぐ　又在市佐渡郷人會より推されて其會長たり　新潟民政クラブ相談役たること多年　更に新潟師範學校附屬小學校の父兄會評議員として　盡力するところがあつた　この他各種雜誌類に顧問　或は特別寄稿家たりしことあるのみならず　時々募集文の選者を嘱托さるゝことあり　又歌會　波瀾史の著書もある　民政黨新潟支部大會宣言は歌會時代より年々その起草にかゝるものである　（寫眞は逝ける山田主筆）

○山田穀城　八五六年未詳　新潟市の人　佐渡出身　新潟新聞主筆　新潟市内豐照校に勤務　自邸　佐渡相川町の舊士族の家に生る　明治九年八月生　幼より數學を嗜ひたゝ作文は常に其首位を占め　習字及讀方を得意とせるも　體後に至つては極めて拙にして多くは之を回避した　十五年新潟に出でゝ北越學館に學びしも　居ること半年にして腦病にかゝり　退學　鄉專ら漢籍と國學　和歌の研讀に没頭す　讀書は多く十二三歳より廿歳までの間に　數學　理科學　農藝　經濟等を除くの外　文藝　政治　歴史　隨筆の類を貪り讀み　後年新聞記者としての素地をこの時代に得た　十九歳にして新潟新聞に入る　その動機は佐渡に發行せる漢雜誌に毎號寄稿せる當時の新潟新聞主筆にして佐渡出身なる故高野鶴藏氏の法月するところとなりしによる　ゐること九ケ月にして地方通信部主任となり　會擔當記者を兼ね五年後にして編輯長格となる　この間新潟市に始めて詩文一致を　鼓吹し先輩の贊助を得て　其研究會を起し　又和歌革新を唱へ「みゆき會」を創設して卒先縣下に新派の短歌を鼓吹した往年新潟市通俗教育會より市歌審査を嘱託され　本年三月まで新潟市史料調査委員たり新聞社にあつては理事兼主筆として社説を擔當し傍ら時に史料　紀行　雜文等を揚ぐ　又在市佐渡郷人會より推されて其會長たり　新潟民政クラブ相談役たること多年　更に新潟師範學校附屬小學校の父兄會評議員として　盡力するところがあつた　この他各種雜誌類に顧問　或は特別寄稿家たりしことあるのみならず　時々募集文の選者を嘱托さるゝことあり　又歌會　波瀾史の著書もある　民政黨新潟支部大會宣言は歌會時代より年々その起草にかゝるものである　（寫眞は逝ける山田主筆）

とする際、上京今の家に宿して助業したことがあつた。
彼はゴヨムナリストとしては最も熟達のものであつた。政
論も書いたが、其長所は寧ろ風流の記事にあつた。彼
はまた俳句や和歌をよくし、又俗謡を心得た。花心と
言葉が軟流記事にあらはれたことは人に注意して貰
ひたい。俳句作者の中に彼の著作の多い理由は
彼の死は俳句作者の大打撃である。彼の
俳句の出身は俳諧であるが、俳句作者の出身
者に多い所がある。自分の社会時代の時代（蕉
山）が文藻で童とをり、山が、蕉川も俳句出身
である。蕉川は漢詩を長じたが小説をも
兼心した。余は社時代に自分が楽で

或は西洋小説を意訳し、蕉川はいつも笑を書き
綴つた。俳し新る軟文は蕉子花紙が一番上であつ
たやうな思ふ。穀城は氣のまゝ社の頃時代、俳句
酬へうんぬを過ごした。あんが来ると出て、文藻に
磨きをかけ、多の子の間をしたら、後人も大を
ものであらうし、自分はいつもこんを思ふたが、穀城
の境遇はこんを許さなかつた。

八月二日記

○狂句と谷の鬼子母神　境内の書生時代を思ふ
教業して豪傑と立寄り、小禽の焼き鳥を食べ
ながらと奥さんに公の九を大きな面白を喜び、蕉
態を存する。俳と前風俗を淡白な地
の社の風景を孫しとる柳湾の二首を掲ぐ

鬼子母神前海鼠廊、或群秀花晩恰人風
車利樺蓋興上、日紅緑渾〻「彩翠」
盆栽と月雅為廣、或年疑懐今明休、
一笑西村寺前路、老花入店 化鶴楼

光然深世俗を忘ること
の山海加年の詩巻松牧おろ来るものあり、何人
の詩巻なるか、萬為高尚なるもあり、或へ出産時期
あるべの知人の家産家多あるもあんか、詩を書も住
なるべし、半紙一枚に一詩を書す、山陽毎紙に必ら
ず雅号を施し、或の自信を書き、或の飽白を消
息をものす、こん時孫と共に一帖なるすべき歟

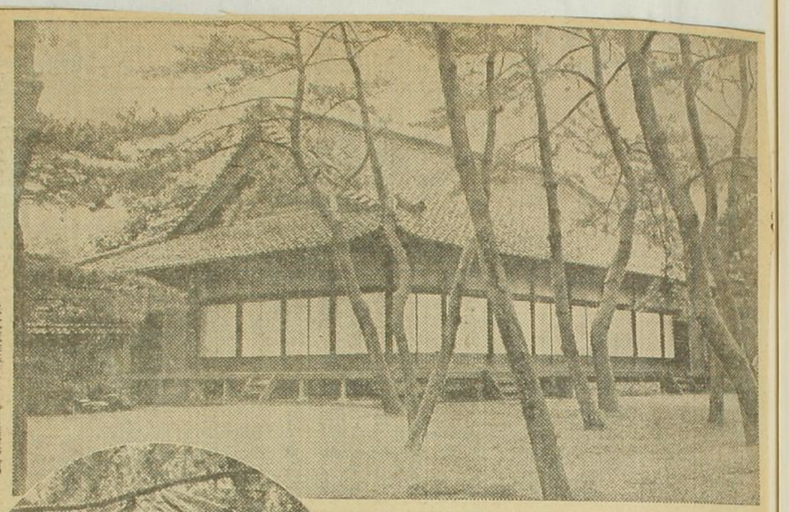
東都古美術の逸品

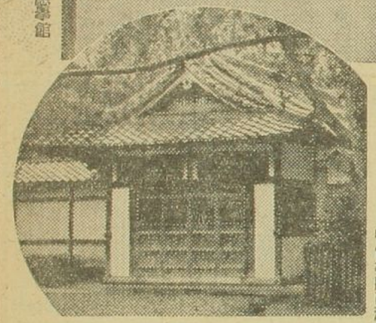
上野に新名所

應擧館公開

益田男獻上の意をくみ

秋には博物館内に移轉





公開される至寶　上は裏庭より見た應擧館　下はその正面

品川御殿山の益田男爵邸内にある有名な應擧館が近く上野の帝室博物館内に移され一般にも公開されることになつた、應擧館はもと愛知縣海部郡大治村にあつた明眼院の書院で、明治二十二年益田孝男が書院内ふすま、障子、欄間に描かれた圓山應擧の繪諸共に買ひとつて品川の自邸内にそつくりそのまゝ移し建て自ら「應擧館」と名づけたもの、十八畳二間つゞきの書院のふすま、障子、腰繪、並に欄間にかゝり、松竹梅の畫繪が彼一流の寫生的筆致で描かれ板戸二枚には特に彩色で犬の戯れてゐる圖が描かれてゐる

天明四年當時五十二歳の應擧は眼を病んでその頃もつとも有名な眼病院だつた明眼院に養生に行き、全快のお禮として彩管を揮つたと傳へられ、圓熟した應擧の技巧がうかがはれ藝術的香氣の高いものである

益田家ではかゝるものを一個人でみで見るべきでないとの建前から昨年末建物もろとも宮内省に献上の手續きをとり、繪だけは既にとり外して帝室博物館の倉庫に收められてゐる、現在工事中の博物館の地均し完成を待ち今秋頃までには應擧館の移轉を行ひ昔のまゝに飾りつけられて公開されるはずで、關西方面に比し應擧の繪に恵まれなかつた關東の美術愛好者にとつて非常な福音であらう、なほ繪とともに書院の建物も天明時代の寺院建築をそのまゝ傳へてゐるので建築史上の好材料と見られてゐる

占有 し一部藏貿家の

建物

濱尾新先生像

（作二　迫　堀）像生先尾濱
（書山竹田高）字　　題

○文行堂ゝと一枚のつゝりを賜ふ、兎國社中の今
此ゝを文寶の四五の人物を拙き、馬琴か京中の人
物の名を後のこゝろ狂歌あり、山崎美成屋代
弘賢の和歌あり、兎國小唐と題をを書きそ
関雪江歌、他と一人不明の人のものの別れけ
ゝ衛修一軸とゝ、伝ゝ
○濱尾先生の銅像去月末帝大の構内に建設せ
られ、文人墨客有志の発起にて今日報ゝ予等の追懐話
と載せ特ゝ予等に示さる、当時のゝ花ゝ夢の
如し、此の話に接り、役員減数か年等ゝ年之宝
湖の大仏造ゝゝ
昭和四年三月　　編輯

東京帝國大學演歴史記念事業實行委員會

昭和八年六月

昭和三年五月本學設立記念事業實行委員會遂決建設銅像以致追慕之忱於先生德業基於至誠以俟後人云

○文行堂から一枚の繪はりを請ふ、兎園社中の會心を文寶の四五の人物を描き、馬琴が座中の人物の名を後ひとつ〻狂歌あり、山崎美成屋代弘賢の和歌あり、兎園小集と題名を書きそへ関雪江數、他と一人不明の人のものあり、合せて一軸となる、伝聞する

○演藝子爵の銅像去月末帝大の構内に建設せらる、支人間に有名の學士今日報ずる所の逸話を載せ、特に事に示さる、当時のまゝ花さいた夢の如し、此の話に據り、從來減數が五等を二名宛減の大問題となることを憶ひ出す、即ち左の如き

榛原製

夫誠積于中則發乎外可以感乎於天地鬼神況於人乎是以至誠之人生則爲衆人所感戴死則爲衆人所景仰豈功盛德光前照後焉濱尾先生至誠之人也其在文教要職爲東宮大夫爲樞密院議長無一不至誠服務膺事而其終始所總纜者爲本學事業矣自始官於東京大學至薨前後五十年雖職司有不同心則無一日不在本學充實內容擴張規模創講座制定學位令增設農科大學等皆出於先生至誠主張其罷文部大臣後再爲本學總長以樞密顧問官姑兼本學總長者亦以至誠感孚人心也其薨也全學如喪父母以大講堂充葬儀場藉表哀痛之意葬之前皇上賜御沙汰有致意忠誠謀事纜密之語天語昭昭眞蔽先生德業矣葬之日勅使來臨顧官鉅公以至學生列于儀者二千有餘可以觀先生德業之盛焉昭和三年五月本學設記念事業實行委員會遂決建設銅像以致追慕之忱之議像已成乃舉所以先生德業基於至誠以諗後人云

昭和八年六月

東京帝國大學濱尾先生記念事業實行委員會

銘（服部宇之吉撰　岡田起作書）

故濱尾先生銅像に謁しての思出

隈本有尚

事は今より半世紀餘の昔に溯るのである。明治九年九月吾れ〳〵は東京英語學校（英文 Schedule of Studies はその明治八年分今猶手許に保存する）より東京開成學校（東大の前身の一部）普通科下級に進入した。時に他の英語學校（當時學制上三府五港に各一英語學校の設けありしが、東京のは後に東大三學部豫備門に合併され、大阪のは大阪專門學校となつたと記憶する。但しこの學制は東大五十年史に脱しあれば、明確には他の現存文獻に依りて考證を要する）より學生の參加する者あつた。先東京のよりは土方（寧）、藤澤（力）、石川（千代松）、田中館、關（直彥）、市島（謙吉）、故砂川（雄俊）、等の諸君、大阪のよりは故三和（親本）、故三崎（龜之助）、田中（正平）、故小野（德太郎）等の諸君、新潟のよりは故岡山（兼吉後に最古參の辯護士）等の諸君計百人位なりし。是等は翌々明治十一年九月には當然普通科上級に進みたるに、先是十年四月東京開成學校は普通科上級と本科三ヶ級とを合せ、東京大學法文理學部（俗に三學部）となり、以下普通科の二ヶ級は同三學部豫備門となり、學科課程の改正は九月より實施されたれば、從つてこの時吾れ〳〵は帝大三學部第一學年に進んだ譯けである。

學校長同補の名稱は、綜理、綜理補と改まり、加藤弘之、濱尾新の二氏それ〴〵任命され、豫備門長は初代は服部一三氏なりけれど、同門は固より三學部の附屬なるより學生に關する事等は大小前述二氏の許に於て最後的決裁を見るのであつた。

始め吾れ〳〵の入學した際は（この制度は給與に關する外明治十七年頃迄存續された）授業料は全免され、教科書製圖器具等は全部貸與を受け、外に六圓の給與（名義は給費であり）を受け、これより用度掛に於て舍費、薪炭油費、食費等を差引き、殘金二圓内外（月に從ひて消長あり）を支給されたるに今や又從前貸付の寢具（布團、蚊帳）、机（書架附）等一切下渡され、銘々の所有となつた。處にこの六圓の給與が這次の進級と共に五圓に減額され、これが本文の事態を起す發端ともなつたのである。

この減額は學生一同に取つて晴天の霹靂でもあり、特に上級の人々

榛原製

は時の綜理補に向つて一再ならず抗議（哀訴）を申込み、又當局としても學生動搖の兆を看取してか、進んで學生引見の擧に出でられ便宜上各學年より二人宛の委員を出すことゝなり、最下級吾れ〳〵の學級迄に限られ）よりは筆者その一人として參加した。この委員は同學年では自分の外故渡邊（安積）君であつたるか（?）又上級では故田中稻城君（後に教育圖書館長）を慥に記憶すれど、他は增島（六一郎）、故鈴木（充美）等の諸君なりしか（?）詳でない。兎に角委員八人許りであつたやうだ。この時應對されたるは故濱尾綜理補その人であつた。應對は當局の退出時間午後四時前後より夜の十一時頃迄に亘り、何れも食事を抜きにして熱辯を振ゐ、當局も亦悠々迫らず諄々として時勢の轉變、學生の本分等を說き去り說き來つて容易に屈しられるやうもなかつた。今にして之を思へば故濱尾さんの溫容、這次の銅像に謁するに就け、眼前に彷彿たるものを覺ゆる。但しこの銅像は時の綜理補晩年の風采を寫せる者でもあり、當時彼の方は齡三十代でもあられたらうなれば、威嚴の裏にも慈愛に滿ちたるその目許は、今は僅かに朧氣に過去の記憶を生氣つけるに止まる。

學生側の意向は專ら田中君の熱辯を以て代表され、中にも「吾れ吾れは今後困窮の餘り、大半は退學の止なきに立至り、殘る者は身に襤褸を纏ひ、時に市中に徘徊することあらう、それでも當局は敢てお構なしとせられるや」等の辭あり、之に對して當局の言は「それは甚困る、然かし今後學生の心得としては、無闇に官に計り便ることはせず、苟も獨立自治の精神を發揮すべきであらう。例へば、文筆の業の如き、今は學修中と雖も必しも餘裕なしとはしまい。學資の補ひは自力に於て多々その道あらう」と迄に及んだ。そこで田中君は「吾れ〳〵固よりその覺悟あり、就いては當局に於てその文筆の業に關して何か現實な紹介の勞を取られて欲しい」と述ぶるのであつた。こゝに偶然にか將必然にか兩者の間一樓諒解の道が明となつた。恰も林檎の落つるを見つつ彼の引力律の創見をなせりとされる一學者の如く、綜理補の心頭爽かに一案の閃くあつた。卽ち當局に於てはその頃「學藝志林」てふ月刊誌を發行しつつあり、その原稿として假に各學生に月に二枚（半紙罫紙十行二十字詰め）を寄稿し得るの特典を與ふることゝするなら、一枚稿料五十錢として缺損の一圓は方さしく回收の道ありと云ふのである。當局の寬大さは卒にこの案を持出された。但し當夕は時刻既に晩く綜理の退出後なりければ、最後の決定は勿論保留されたのである。

かくてさしも紛糾せる懸案は一夕にして解決を見た。同列の委員達も同學に對して面目を全うし、欣然後日を約して退出するのであつた。これと申すも委員等の熱心は去事乍ら綜理補の深き同情と非凡の創意とに待つこと多かりしと思はれる。

因みに白す、「學藝志林」は手許にその第四十六七册を保存する所より之を推すに、毎月一册發行と假定し明治十年八月より創刊されたるやと思はる。その第四十六册（明治十四年五月印行三六三—四四六頁）は次の如き諸篇を收めある。但し「志林」の發行は明治十七年頃 "Daigaku Memoir"（邦文は「理科會粹」）の創刊と共に廢刊となつた。

○古來風俗ノ變遷（男女の乘結、元服髮直）（應問）　八木隆氣述
○古代地名（太保湖、樂浪、犬上、鳥籠山、不知哉川）（應問）　中村不能齋述
○氷層易地ノ時代　エイチ・ビー・ノールトン氏述　理學第三年生　中原貞三郎譯

【以下十一頁下段へ續く】

【以下五頁より續く】

○濫恤ノ害　　英國チャンブル氏述
法學第三年生　岡山象吉譯
○讀潮汐新說（未完）星學科第三年生　隈本有尙述
○四月晴雨表

又學資の補給としては各學生の寄稿必しも之を「志林」に收めない。中にはテーレーの「法學原論」を譯した者もある（小野君の如きがそれ、而して筆者も專外乍ら時に代はつて之を譯し、その餘澤に與つたこともある）。

以上は臘氣にも過去の記憶を辿り、記るす所なれば、定めて誤謬（特に同學生の氏名乃至出身學校に就いて）多からう。是等は關係生存者の方々に於て遠慮なく正是されて欲しい。今は唯大量かにも故人の大人格を追慕する迄である。外にも筆者は小逸話一二記憶すれど這次は姑く之を省略しおく。

○百石の大戰ハ夏時納涼の為んなる行りんとがことしハ乱暴ノ時なれ此九月ハから十十一三日まてに防空演習が行はんるのに、吾等も緊張しるいなるハやうめ。此年の今演ハ為きりて充行機

又演習ハ國者を時ひ乱めて、銘夜の人ハ出の實際を目前まんることとなつ此。こんを先きに大るデハ、トまん防空の為ハ為かあるん、豫備ハ為を市民と共ハ。所今ハ

模原製

ハも防空演習ハ就その心得書を配つて来た。防空演習ハえまとそ千うボラ行はんれが、今日のハ今まる大規模ひ実際を行ハ帝セーあることが。こんが演習ハ止まらま遠かるまま事実と

ることを豫想するに、演習と云ふも秋息無関心ひある譯ハ中ん。初日九の八時ハのうちサイレン異者ハ空襲ハ為り演習ハ敵機の襲ハ来を報ずること異ハ為が開始、放送ハ受宗山上ハりの為ひ、後ハ後の夜司令部かくも、移動白動車ハから敷ることを刻々の模様を報じ来る。今日の演習ハ関東ハ為を區域とし帝機ハ為ハ方面ハ市民ハ来る。小松川のあ

九十防衛のある所まで防禦軍は此雷雨を
を阻止して帝都に入れまじと努力まんまと敵機
機は敵のやうなものだ雷雨を縫ふて飛行
で、なかなかーやうかきない。此の天候は殊に落雷
が深く、電波機を使用するには防禦軍の
に不利であり、世界大戦の時獨機が龍動落
雷に乗じて跳梁を極めたことを思へし
めた。放送の報ず若干の敵機横浜に入り、美
若し若干機飛揚せば敵行つてあることと
又若干若干機帝都方面に飛ぶ、帝都を
衛くの二十分の後ちまんまとの放送あり、忽ち
一敵機題竹の上空に現はると報ず、高射砲の射

横原製

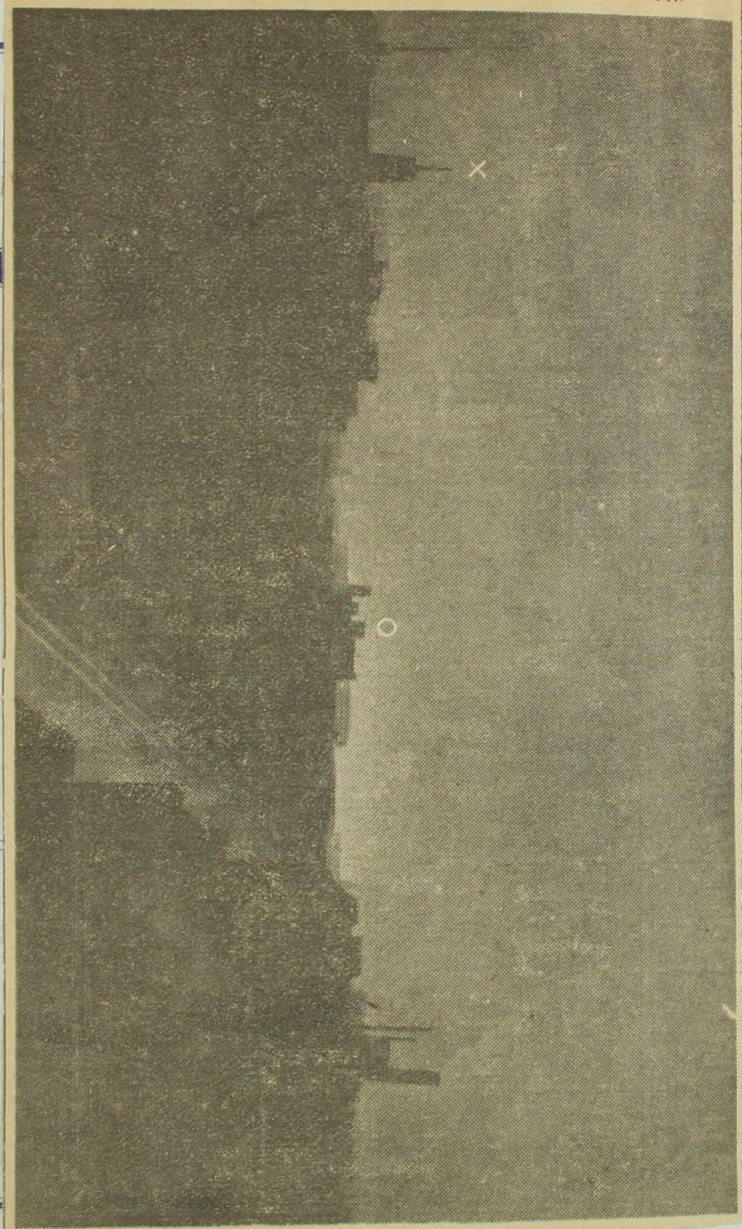
撃を敢てして敢行、十一時頃
の放送に敵機帝都の上空を飛び、杉原の屋
上に巻いた機関銃を撃ち、敵機
を退却と報ず、芝の芝浦方面に白煙落
ちたるを認むる報ず、十二時飛行機数
台金が原上を飛ぶ、今五甲機敵機を
追撃すること、敵機宮城を
通過のきつつあり、こゝは待機してある高射
砲あり、火蓋を切つたかと思ふ放送あり。
北の濱町の方面の放送を聞くなん特の一
星弾の雷撃を架設したりとて
ひのである。敵報告ありて再案と達し何ともて

が（き堂）午後の市中の祝祭を出うけて見た。杉尾の屋上のめざましい武装さんもおれた。勿論各階共全生の如く業務を二名人でおる。忽ち某保険会社の言き屋上に黒烟揚る、爆撃こゝを狙ふと覚し消防隊も早く消防隊も七来る、一車JOAKと煙記しを自動車（）ぐこのアナウンサーと成（）の機関を載を移動しつゝ放（）するのあることを知つた。来（）く宮城方面を望む烟幕を感きこえの湯としも展望全く利かない。更ら上空方面を刺りたれ、杉浦屋の屋上に防衛あり多数の防護班路信を控へて機を待つてあり、北（）に素見物を放ち、路上石日灰と

複原製

（一十）　G　號七十七回四万二號　（可燃物便携器三号）　聞新　日日

戰慄の夜
日本橋一帶
（印は三越○印は白木屋）



撒いて降雪でもあるかの如く、市街列
る家、廻廊所を指定したる焼夷弾の雨、防火用のある
所を指定したる、救護班の詰所あり、防火班交替整
理班等の詰所あり、まゝと敵時そのものゝ如くなりて
おれば、此夜焼弾を行ふものもあるべきが、
近頃の時間、行はんと、焼星世界を紅し、
試みに十分ばかりあると云はんか。此度の雲霧、敵来
機を利し、防禦軍は敵機を充分認めかねる国
難を感じたるしかつ故、大体敵機の飛来数を
数へ、而を後人に報せり。
十日（第二日）朝八時サイレン鳴るや、敵機の
襲来を報ず、ラジオは報ず、敵機五百機、元来

すと、又日本橋を市街焼夷弾を包囲する。宮城前の
高射砲射撃す、毒瓦斯放射の如き防護
班マスクを着す、元行機数〻金の家の
屋上を飛ぶ、後楽機と見えるが、十一時市中の祝
祭と見る、高射砲を放ちたるもあり、元行機二台の飛び来る
を見る、高射砲を放ちたるもあり、
数〻ありしもあり、
日本橋の黒い烟（幕）北の廃墟人を以て埋む
屋の上に、敵機飛行機の爆撃の張り拡
豆を撒くが如く、敵爆弾北の集まり、一時
電車不通となる。午後三時サイレン又鳴り時
機関銃の響、起る、市中を敵襲

北越方面の各高官に電報の如く聞き居るも、市民は
北の戦況に驚を与えんも如何なる仮令なりとも抵抗、撫恤救護を起すべきを期す、撫恤救護
すと後図いの優屋の市道中なるを認めず、
今夜の決戦と称宮さん攻防織宵相と動く兵を
き入つて敵機は奮戦を行ひ、市部の宮
沈むの函館さらさえ赤色の打撃を受けて抵抗
いなる此夜の脱出隊は出動したが丈の脱出と砲
撃を浴びたるも、敵機の八重洲橋に
を爆撃し、八重洲橋附近一帯を焼き、東京駅
に爆弾を投じ、愛宕放送局を爆撃する
もつた。自分の眠は午前二時のサイレンで覚かさ

れて、夜明るまでうじうじ大砲を聴いたが、機関
銃声は間断なく耳を衝き戦闘の猛を告
げしめた、敵機は新宿を襲撃したとの
報あり、淀橋附近に火災を起したとの報あり
つた。愛宕山は防衛軍一守りあるべき筈
観があつた、朝六時解除が今せられ、渋谷に
る喇叭は北の未曾有の防空演習の幕の
落ち、休刊令宣の撤去が放送された（八月十
一日朝七時記）

○系数第四　文行堂を過ぐるに甚所本
因坊丈和が碁しに初番の先状がある、その文
言いたのめくい大高綱子にあるこ書かれてある

印文 任是真 (朱印)

□

圍碁熟心修行無懈所怠稍普伝之自今
對上手三棋子之手合初段令免許之
候猶以勉励可為肝要者也仍免状如
件

官賜碁所
本因坊丈和 花押
(朱印 官賜碁所 朱字)
(本因坊丈和印 朱字)

天保七丙申年
十一月四日

東御門
川村亀之助殿
改名

文中所心術普とある普の字の意こゝに

北斗に

技術秘伝

と書いたる写本一冊を得た。こんの日本に伝わるあらゆる起重并に運搬の法を図にしたるものにて工芸上有益の書なり、日本は西洋の如く金属に乏しく起重機其他金属にある物を運搬する機械いまだ大石を運んだり家を動かしたりする大きな材木を動かしたりする為めに風さんに至妙なるものあるが木や縄の工風でいろ〳〵の方法がある、例へば神乗山と名ける機械あり八車あるものを曳く機械である、竿枕とこゝにあるは金属にある木材を運搬する時に木材の枕とこゝにあるものである、車はさまざまあって修羅車、八車、十

車などゝふものゝ皆重量を張くる車で輪がいくつもある。大きな石や材木を運搬するゝ地上に枕木を置いて行をさゝこんで動かし一尺進めゝ枕をかくてゝ進めるゝこのテコを力手木、持手木、もぐい手木るといふことゝある。美しい材木を吊り上げるゝにモツソウ揚と云ふがあり、又天秤揚と云ふがあつて、固まるあらいさ板ゝ共方法いろゝ工風されるけれゝ此の図譜ゝ成る為合理的なる事ハ成る得難い秘書であると思ふ。

○俳聖芭蕉と時を同じゝして二聖と称せられた上島鬼貫の墓ハ大い間伊丹の墨染寺ゝ心とゝもあれが小林丹俳とゝふ孤心の研究がある。それを要点し

墨染寺にある墓ハ鬼貫ゝ前ゝ頭ゝ此子息の墓ゝ、その周囲ゝ鬼貫の名を刻ゝ此ゝ墓ゝ真ゝ鬼貫の遺骨を埋めゝ此寺ハ大阪の北郊豊西成郡南方村天台宗雲松山鶴満寺ゝあるゝ此ゝ別刻ゝ晩鐘成の稿本「摂津名所図会」の十一の巻ゝ

鬼貫の墓　摂津国西成郡長柄村　雲松山鶴満寺鐘楼の傍（注　鐘楼ハ最近本堂の前ゝ移されたゝ）にあり。元文三年戊午八月二日円寂七十八歳ゝ勒す。墨ゝ云ふ

おもしろさ急にハ見えぬ蕎麦ゝ

とゝんが典拠ゝ成る、法號ハ仙来別号居士ゝ云ふ

此行満寺の鬼貫の墓碑を探ねて仙林別当上島拙庵
衛とあつて、寺僧の仙林別当あを始めて鬼貫ひあ

鬼貫の肖像（盛染寺蔵）

うとかつたと云ふ、鬼貫の本来の籍者は伊丹に生
んだのは伊丹の人は誇りとしてゐる、今なほ伊丹に
住て来たのも伊丹固有の鬼貫の酒の句を

賤の女や袋洗の糸の汗

とあるは名吟である。此人の句は何故か多く俗いくらな
い、自分は尤も此人の俳文を愛ます。

○天保頃の俳人に雪多斬茶都といふ人一茶に集
る孔士郎とも、同名と思はるゝが此人のそうくの段
味家であつたらしく　各不から寄せた俳句を心
右自筆の俳版を鐫し、さうこと云ふ、えいみさま
と名けて集まる、俳客の手鑑とも云つて好刷
の俳版らしく、先に蹟あて第中に一頁きに

こが北人の刻しなるものなるべしとあるは知もつるき二冊のも
ものゝ、それは鶴業俳句●金と云ふ書にも春夏秋
冬の四季にわたりてわかるゝ俳句を集めたるものにて、
それに解説があるも、俳句を云ふに真味があるのは、
至難なる日人が長い百の歴史にあるものなる
ことを固もしめしたるものなるべし、鶴業とは異なるも、農用や漁村の
あるがまゝの鶴業とは、農用や漁村の
久しく生活したる日のあるものなるべし、さてもさても
のあるものなるべしとて、なくてもあるべからざる雑きことなる
べし、例へば甲州なる産をこえたる家根の上の鵜ケ
の皮を出しそれを動かす産鶴、まること、お出で
茨城をえうるべく水戸を跳てこれ山くを登てる茨城や

榛原制

こあれは必ら手松の滅ます、そこを目あてに漁ること、
上信房州の海中の岩こ紫線多くおびゝ出こ
とあり、人の近つくを嫌はゞ、力一杯いる蓋を引しめ
網をるハツミを陸海中に入るゝ漁夫いとまを多く
集まる岩上に蓋莚を●敷き、そこに宮の集まん
ば、●紫線身を要俗にを造る引きかゝりて海中に
浮ず、漁父は多くこれを入るをさこえるひと
云ふ事、先づこの数にて九化を能取を海世とする事
伝海中が海産を海に捕獲すること、然や
先日のこり校陸回る伝る俳句と実談さるなる産
あるこ、それ●等が陸おもしろく嘉かんあり、苦し
お情を遠方にいらる時の方法にも高き山を登

つて火を振つて次きへ〳〵と傳へて行くことなどは地蔵中の国に伝つて来たものであつて、誠に面白き事きを揚げべきし書物も前年もチラホラと受売せしが今の紫中又無きにしかん、森羅ひんそう

○近頃の雑説小説類の数で所謂大衆読物と言ふ書籍の発達の印刷物はどんなに文化に貢献するかは言を俟たず。

問ひ、或る人はちつとやるとの印刷物のなかに日本内地の山が近く元げ山となるのは概数の伝説なりと言ふことが出来ない。紙の清潔は元来ひなる。製紙のなる内地産の木材の為めに不足を感ずる伝説と言ふが一概の紙が清潔なるものを見れば

文化の発達なりと言ふのである。

小説の為めに樹林なくなる日本特色の風景美を失むいと云ふのは如くなるのは西洋と違ひ国歌とも書せるを得ない。

○京坂方面の内に云へば灘の酒に就き酒の税金の高いことの誰かは知らないが、一石四十円といふのは如何、樽の実費の高いことは、ほんとにたまらないらしい。かうして特殊産業が十二円かゝり、餘計にその外に比較して実費が十二円ほどいつて、時く税金を一石を飲んでもつぶれるから、今まで酒を飲んでもつぶれるが、実は税金と樽代とを飲んでのことであつて、実は割合いと低いのである

と、

○浪華に行つて酒を飲むと云ふことは、酒のうまいことは、東京の数倍だと云ふ。京がくまんは清酒は酒の本場であるから、何れも清酒を飲むことを好むと云ふ。実を云ふと前者は本場を買ひ冠つて清酒は東京以上の酒を飲まるべくうと云ふ所待から銘党を生ずることゝ云ふのが本当だと云ふ。清酒は造人に云ふてみる。清酒を仕つてみるのは、えんの倫理を良びたる者一流の酒を下るまで保し流れんとする酒は数を上るやうなことのうへ。東京のどんな酒でも数種の酒をかまへてみるから、其の者の

標原製

酒を飲んでいる酒は清酒を造ることを好むと云ふ。清酒は高級である。全部地四国の灘の酒は辛口を醸るが例で、東京向きは甘口を醸る。辛口と甘口は指り方を後者は後者の差がある。辛口は十石に つき七八十斗目の粕しか出るのが、甘口とすると百斗以上の粕が出て、前者の粕は高級のやうに堅くなるが後者の粕は多くの灘ひがある位び、醸造も七四の分は清酒である。又米の粉け方も善き者は優良と云ふのに酒は粉白程度が二割五分減であるのに対し、大吟醸とすると粉白程度が四割五分減であるのは、東京の酒の最上と清酒を通例用ひる酒とは比較するとなる優劣の差が

ある筆記とは同じく百姓の物語である。
○前の録した宮の新茶話の俗書も亦紹介すべき
ことがある。只人もそれに俗句を自筆のまゝ刊
行した其の書名を「みさき」と名づけたる茶話の段
味から出した題署である。ミサキと鳥か海上を翔翱した
魚類を捕獲し、其を直ち喰ひ、口に入れて唾を
和し、一種の特殊食物を他の、それに異なる花
豆き或る薬草の合剤を供するのだが、海辺の人は
其を奪つて食ふことがある。茶話に此のことを序
書き記し自分もさうした「みさき」と鳥のごとき
ものが、他人がそれを奪ふのを捉へて比喩
してゐるものと思ふ味がある。職業俗語合は何
為めの刊しかと其自序を後人に見る俗人は此
から俗句を恵贈を受けて概略それに書報する
ことをしてゐるから、此者を著りても此家に報
ゆるのだとあるが、それの「みさき」の合を唯取りして
ハ海鳥と意がついての豊業を見る。「みさき」と
「職業俗語合」の二集は此の意味を連絡がある
離すのならば書で、但つ茶話の段味廻を現ハ
すぬ著であると感ずる

（八月十三日）

○先年大隈侯の八十五年史を編纂する時の
自分が主任となつて信家和尚の山ゝを書刷数
を取調べ、倫記の扶翼ともなるべきこの、逝去さ
るも此流の大なる件に顧みもある吉岡ハ、ザウト四巻

を見れば、宮家書を傳ひ来れる一定の界紙を以て謄
写せしめ、その数の五六倍に及んでゐる。宮家は
八月頃より三ヶ月餘もかゝつて筆の達者な心
得のある宮生徒どもに手紙も読み得ないのに宮
様はそれらの紙を以て史料の謄写を命じ
役立たるこゝに於て、即つて源氏の文書より
見る大限度を編集せしめ役立つべき自分の紙
の文書を見れば、の手紙の皆バラで後のやうに
纏めて或巻一に或巻毎つれから大切なるもの
見落しなきやいくらもあつて相違なきの源
氏の其後を追んで再検し手の免しにしたものを拾
ひ上げたのは一通を追うて見るに、自分が

榛原製

相当骨を折つた宮しかが文内閣のまま務大臣兼
農商務大臣の命令を以て分配するの雲のあるを氣が
つき、北陸全部の宮しと手の手を収めれば、
人物別にまとめて揮毫がバーに入れてあるが其
内整理した製本の上保存せんと度式してゐる
（八月十三日記）

○昨夕著述と題して隨筆の稿を作つてゐる
ブックドム社にも出版せんとする隨筆は去年
北海道新聞に二百回連載の内、六十四五
件除き、他に三十件とかくんとして其の
著作を志ざすに俗のある傍ら、出版社に
は、北海道に載せる漫、後の稿も書きぬき

白紙を貼附し、約束数の計算を
試みつゝあつたが、昨日来り報ずる所の極
金が刪去の分を控除してある六七頁となる
と云ふ、依つて上下二巻としていとの案も出たが、
予は同意を為つゝ、多けれは尚ほ刪去すべ
しと、今朝未大公命をかくつゝある、折角昨日の
折れに記る分は概ね長篇なれども刪去
するの分とする積り、試みに、れのめきの分
る他の記事(万)ち春秋今ちと出さんとする
を入るべしとすると、思い切つて刪去し長篇
五頁程度(ら)減まることの可なる困難なる
自分は今更ちゝ二頁の連載記事の

榛原製

分量の意味を大なる感思ひ刪つた、石の沢大
ぶ長くなるから、刪去を代りに他の記事を次つて補
ふ、実に不思議のところなるのだ、つゝ思あて
春秋今ちゝ出版せんとする時に目録を見ることが
刪去の分ちも一日方のこと雨り入んなる少
かゝるあつて、春秋今の分もおよそ材料の
見当が付いたやうな氣がする。春秋日時二書
の出版を見ることが出まんは仕合せである
と、去きりる報知に勢力中ちる　八月十七日記

春秋漢法から除いた記事の内四十件　六七行

乃ち十行ばかりの短篇であつて、こんなものは一

繼あとをとて一行の組立をとまんが淡々あとを
るが、一件く相まさせて入んるネどのこまどるいを
こで北者い春城今の分を入るべーと考ひ、えん
を就て小面則位を得といい、おの[illegible]を
[illegible]を得[illegible]えを鶏肋百片
とも名つけて、北今[illegible]二あ組とまること
ーなる。

○其趣と聞いつく毎の、日課として地業小稽を使め二
巻共略々日の暮つく、唯比配列未比考ふるの
暇なし、○五行を既捨する為て瓔珞を為見
し、永不温を載すこん昔中の一業目録也
春城今まりの分の巻末と鶏肋百片とを

[illegible]

分を通り行数の短かきこと[illegible]
北の一通るる行四十の毒の原形を化り、可ち快
絶を覚ゆ。

○八月七一二日を割するも漸やくるく倦む
但し中分一瓶の冷印表酒を飲は倦こるる
快を云る、時々研数菓、人々の活帖一と
倦本を婚めを悔くり、倦ちの[illegible]し漢文活
帖[illegible]い毒ち置て静かんを習ふこんを錯ふ
の一法也

○今次の随筆偏英ふ、就き巻一方の北仏紙
に掲載の漢詩の[illegible]方は頁数が多きまるる
ので省くる筆ち骨が折れんが春城今ら[illegible]

行の今の新聞紙が拵へられるんのだ。此の三年来の日録を見ると多く材料を取り、筆勢を磨ぶ。自揉すべきものを揉すべきものを、すべて冊子にし勢りをつけると、人の為め新聞の自抄本がサンザンなる。実の新聞を書くことを多く免と雖、一旦書いたものを更らに書き直すことは、極暑の折柄甚だ煩わしいのだ。事の運び(運びを敏速)ならしめんが為め新聞紙の三年来の日録、陶著、自娯小録、自娯補録、日惜陰録、和約三十冊である。合冊にし表紙を剪り外し、なければならぬ。之は重要中の重要部分を過きるから、此等の日録陶著は保存を要する。但日

榛原製

録陶著を後まで残すべき所の価値ある所の価値は、自己心得ぬ所ならしいのである。

日毎々陶著を繙くも不満に感ずるのは、畢竟陶著の価値ある。此等時日の陶著としては時勢の関するものが無いからである。やうな氣もするが、実は政治そのことを書いてもよいは減れ一時的のことを書いてある内に、事態が変遷するのだ、どうも言ふ気がしないでもない。矢張時勢の問題であれば、それでも卓越論を抜くやうな名論であれば、それでもよいのだ。その書つ家に委する方がよろしいのである。自分の陶著は自娯を主としてゐるのだ、之がいと

らか他人を楽とするんが、えび目的が幸福するのだ。どうも兎角見張りたい潜在意思が動くのだ。いつも隠蔵をえんえん満足し得ない。

○二十行乃至三十分許の小話でも一枚に集て蔵ることがある。百則小宇宙の集めをえんが、あまり興味もある。いつも隠蔵の内を一ケ所掃き宇宙の七曜を心つて置くことが肉法である。何人でもかんでも叩きこむ所がある。杖科も流きる深さだ。今家のれ、鶏助百法」のあるのも共通である。

原製

お經の裏から貴重な文獻

『北條九代』說を覆へし

史學上に興味深い資料

從來資料不足のため、日本歷史家にとつて最も不明とされてゐた鎌倉時代末期を語る文獻が、多數發見され史學界に光明を投げかけてゐる

神奈川縣 金澤町稱明寺境內の金澤文庫は古く北條氏の手によつて作られたもので、その後北條氏滅亡と共に立廢れとなり、戰後に古蹟として委を止めてゐたのを、昭和四年縣の手で御大典記念にこれを復興したがそれを機會に稱明寺住職小林榮住氏は本堂裏の長持九棹に納められてゐた經文の保存方を同文庫に依賴した、この古經文を最近同文庫長關靖氏が整理すると、鎌倉末期は用紙が不足だつたゝめか、總て書簡の裏を使つて寫經してある事實を發見、當時京都、鎌倉から稱明寺の明恥坊覺阿にあてた手紙類約四千通によつて裏付を前にした北條氏の狀態を語る

貴重資料 を得、大橋新太郎氏の援助を受け目下三千枚の整理を終つた、この中には日本における最も古い連歌や、片假名の古今集等と文學上香りの高い文獻や娘を入質した證文乃至戰錢帳等經濟史上有益なものも多數あるが、史學上非常に興味深いのは

北條貞顯 の手紙約三百五十通であつて、執權連署を以て終始したと一般史家から信ぜられてゐた貞顯が高時について執權になつてゐる事實が判明した、しかも貞顯の執權になつたことを高時の弟泰家が嫉妬して貞顯を殺すと騷ぎ廻り、貞顯がこれを煩悶し覺阿に身の上相談をしたといふような北條末期のお家騷動が如實にあらはされてゐる

また貞顯 が男子出生に際して稱明寺に祈念してもらふため一日に三通の手紙を送つてゐる事實もある、即ち

（前略）たゞ今子刻男子誕生毎事無爲候の間、喜悅の外無他候、御祈念の至り申盡難く候（後略）

◇

男子出生以後辰刻まで異る事無候、但し後物（胞衣の事）今に遲々候、醫師は苦しからぬ由申候へ共心もとなく候、なほ御祈念候者悅入候、心地は無爲に候へ共後物遲々返す返も心もとなく候（後略）

◇

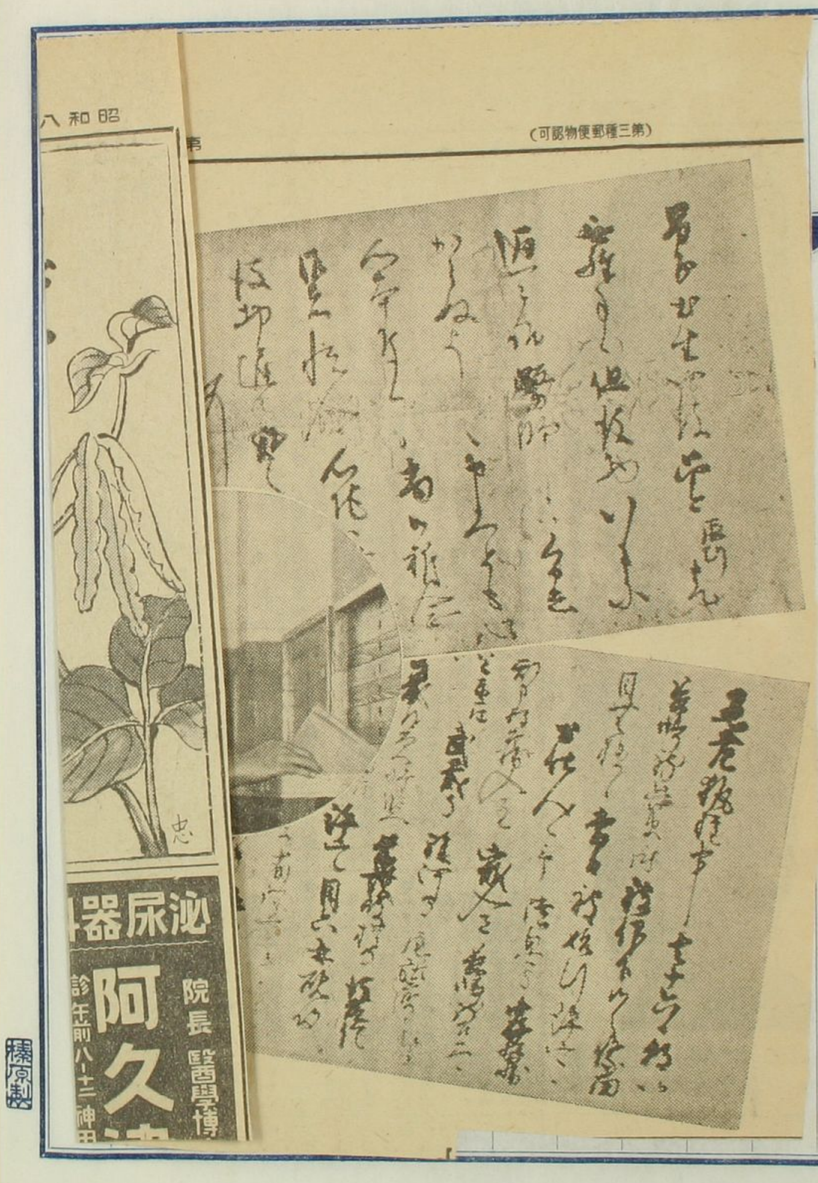
また遲め候、後物事無爲に下りて喜悅の外無他候、御祈念尙々喜悅腸ひ候、又只今太守（高時のこと）よりも御劍下されて候間面目極り無く候（後略）

一日三度 も鎌倉から使者を出して一切の家事を稱那寺に報告するといふ鎌倉時代の武家と僧侶との關係がこの書簡によつて明らかにうかゞはれるわけである、

このほか相州金澤に二度も足を留めた兼好法師直重の手紙の上書「進上、稱明寺侍者、卜部兼好状」は今まで前田家にある兼好直重の歌を唯一の資料としてゐた國文學界に大きな波紋を與へるべく注目されてゐる、金澤文庫長關靖氏は語る

非常に大部なもので整理をするのに手數がかゝり、まだ一千枚程未整理のものがあります、かうした文獻があることはまだ學界でも注目する人が少いのは遺憾ですから、專門家が大にこれを利用されて鎌倉末期の姿を明確にして頂きたいと思ひます

【寫眞】 上、北條貞顯が執權をやめた時の手紙、下は男子出生の時の書簡、圓中は金澤文庫長關靖氏、横は兼好法師の直筆



第二万四百九十七號　（第三種郵便物認可）

お經の裏から貴重な文獻

『北條九代』說を覆へし

史學上に興味深い資料

從來資料不足のため、日本歷史家にとつて最も不明とされてゐた鎌倉時代末期を語る文獻が、多數發見され史學界に光明を投げかけてゐる

神奈川縣　金澤町稱明寺境內の金澤文庫は古く北條氏の手によつて作られたもので、その後北條氏滅亡と共に立廢れとなり、單に古蹟として姿を止めてゐたのを、昭和四年縣の手で御大典記念にこれを復興したがそれを機會に稱明寺住職小林眞住氏は本堂裏の**長持九棹**に納められてゐた經文の保存方を同文庫に依頼した、この古經文を最近同文庫長關靖氏が整理すると、鎌倉末期は用紙が不足だつたゝめか、總て書簡の裏を使つて寫經してある事實を發見、當時京都、鎌倉から稱明寺の明忍坊覺阿にあてた手紙類約四千通によつて發亡を前にした北條氏の狀態を語る

貴重資料、を得、大橋新太郎氏の援助を受け目下三千枚の整理を終つた、この中には日本における最も古い連歌や、片假名の古今集等と文學上香りの高い文獻や娘を入質した證文乃至賴錢帳等經濟史上有益なものも多數あるが、史學上非常に興味深いのは

北條貞顯　の手紙約三百五十通であつて、執權連署を以て終始したと一般史家から信ぜられてゐた貞顯が當時について執權になつてゐる事實が判明した、しかも貞顯の執權になつたことを高時の弟泰家が嫉妬して貞顯を殺すと騷ぎ廻り、貞顯がこれを煩悶し覺阿に身の上相談をしたといふような北條末期のお家騷動が如實にあらはされてゐる

また貞顯　が男子出生に際して稱明寺に祈念してもらふため一日に三通の手紙を送つてゐる事實もある、即ち

（前略）たゞ今子刻男子誕生毎事無爲候の間、喜悅の外無他候、御祈念の至り申盡難く候（後略）

◇

男子出生以後辰刻まで異る事無候、但し後物（胎盤の事）今に遲々候、醫師は苦しからぬ由申候へ共心もとなく候、なほ御祈念候へ共後物遲々返す返も心もとなく候（後略）

◇

また進め候、後物事無爲に下りて喜悅の外無他候、御祈念尙々喜思賜ひ候、又只今太守（高時のこと）よりも御劇下されて候間面目極り無く候（後略）

一日三度　も鎌倉から使者を出して一切の家事を檀那寺に報告するといふ鎌倉時代の武家と僧侶との關係がこの書簡によつて明らかにうかがはれるわけである、

このほか相州金澤に二度も足を留めた兼好法師直筆の手紙の上書「進上、稱明寺侍者、卜部兼好狀」は今まで前田家にある兼好直筆の歌を唯一の資料としてゐた國文學界に大きな波紋を與へるべく注目されてゐる、金澤文庫長關靖氏は語る

非常に大部なもので整理をするのに手數がかゝり、まだ一千枚程未整理のものがあります、かうした文獻があることはまだ學界でも注目する人が少いのは遺憾ですから、專門家が大にこれを利用されて鎌倉末期の姿を明確にして頂きたいと思ひます

【寫眞】　上、北條貞顯が執權をやめた時の手紙、下は男子出生の時の書簡、圓中は金澤文庫長關靖氏、橫は兼好法師の直筆

金澤文庫に秘蔵せられし文書から、いろいろのことが出て来ることゝは、前にも述べたことがあるが、今度の新出の文書は、まことに掘出しものである。尚は彰古館文庫所蔵の古活字本の『日本書紀』（慶長十年奥書本）の裏張りしたものを、ひらいて銀子師元の日記とこれ又数枚あるを見ると、是亦師の書物の名が多く出てゐる、此の銀子師元の日記といふ書物の内容は、どんなものか、こんな伝つた事時の、歴史代がてのうのみちまで、是亦師の出版されたいろくの本論稿、三りやく千字文、節用集、大学、論語、孟子、孟子、きんしうたん、伊勢物語、万葉集、等をだいこんを以つて北等者をえ和漢を出版したことを推

複原製

定されてゐる本の刊年がおよそ判明して得らるるから、一応の文献と最も決して関係が出来ぬ文献の大切なる一例として保存せねばなるまい。

○数十日を通つて幾人と一緒に豪雨に来られて、池は二ヶ月程あるから、庭樹を通して結構せんとて、毎朝毎夕稗供を考へしも、方をもきく者も容易でない。池方のようなる打雨降雨もあるも、やはり何所より来るかとかく早魃か、つゝくのびあるらんか、二三日は別して雨振候ようく雨を期会してゐる所、但し其ちこぶべきは、奉賜雨日ひとり北庭を免かる時平雨うる気

○昨の数巻と二冊の宮本を購ひ得れ一は下巻四

聲論復興せり。日活大帝御巡幸の節行木勝に命じてあらうじめ作る）後一流派の名勝や地名をも研究せしめたる時の名稿本と和庭の用他の書あんとおもふ時の紀行ともなるべしと某中のようとしたる。他の一冊は冊波元堅の隠棲三冊を含むなり。実像庵隠棲とは自著なりひいるいが校本のようと思いる、刀圭のまつのことが重き記さんとおもふ中に、往々高人の無を惹きたるものもあり、漢法医両家の隠棲は閑却出来ぬ閑を得て興味あるの印を打ち出す歟

○ノートル法行実施及家元集と云冊子重複と義を異にす。ノートル法は大正十年刊行セ

えて、第一期の牧歌的時代を以て満足すこの秋、北陸北の海の実施を準とする有識の人々は西井伯を世話人とし各士今般に於て及家の決議をなす。其の及家元を印刷に附し而家の流名は名を刷に南高者の及者を使する名の法。至等はもとノートル法をもとにあり。花し之んを採用するとあれば、日本在来の家景衡と共に保用すべしと云説もあるが、北の冊子を就て注家の説を見ると大略余の和見を同じ説なるが多い。[illegible]どこの国でも革命の起つた序を北の法を絶つしたから行はれもしたが、それが行はれない国々はやはりこんが行及

やうとの思ひ出、貴族院議員郡長菓子の説八月詳
を書しておくの

八月三十日記

標原製

の外にも多数の花の集まる山陽の評多
く自家の生涯を語り、左の三四を掲ず。

芳蘭紫杯酔別妙子行

不堪回朝分手面、離愁聊賦河女郎、恰
好宛小称君量、情到先斟勧酔醪

山陽曰某嘗共蘭庵飛比、不以飲而小者最
所長也、蓋小庵宜久世細談漸入佳境
也

又曰、聞説新宮長玉庵曰先賞其色後
飲其味是先護我心者、挙世用漆盞

Q

一生不出琥珀光也況冊醒在者色如曉月
玉乎冰玉庵不一の見焉
山陽ら杯の詩を少くい北の詩詩のおのい良。あるま
い、そこ〻詩の味がある
賴山陽先生近移居三樹巷誇称觀眺之
美、不堪歌笙次、因寄以此
我愛鹿涯名佳、美君這裏宮殿生、何有
日側黃宮枕、飽聽濤後帶金聲
茶窗曰一統政化飽聽三絃徹曉聲何也
山陽曰三絃彈時の列甲、然冰庵と而述
抱々而然者、公所謂濤後帶金也
山陽人曰濤ら北巷燈暗燈燈、鞠鞠

滿座、金聽濤後帶金聲、今冬久日幸
無後濤後聲、因光茶窗之嘲不一の
解也　癸未素平初六為
茶窗の詩何ぞ皮肉ら。山陽の北の皮肉の詩を受
くるの痛棒也、然ん共舞踏三絃の聲也共
しも山陽の庵ら所ゐあること、北著の詩を後
人ひ味ふべし、余の富ら茶窗の詩の大人為ゐき
を感ゐ也

竹院圍棋

竹淡ゆ院呼囲棋、翠影海邊起日移、欲陽
傳前起後、念兵又心没全師
小休曰、三四数て実亦不一の不黙、蓋有賞

世教、不獨碁也、黄頼古公不碁、故無一
詩耳

小林子黄頼二家の囲碁を解せざることを叙し
得意、書家も亦碁を解せざること詩中自白
あり、

黄堯佐書中云、方今天下文宗、以頼子成、
為冠冕、子以為何如、余答以此
天下文章一家、長公最是、恵文多、別家
逢人何不説、方今都下有無恨
山陽曰、溢美過之、使人面熱汗下、獨子
年時月生與賀公日相年、中年也
已前不飲酒、亦因近過飲、烟霞滋具

酒腸人也、彼詩云、少年多病性杯酌、先去
初去此味長、則言公亦未及先解此味也
山陽公東坡を慕取つれこと、有名なる実なり
公典稱、此詩、とあるのみ。
自家の事を無遠慮云ふ、友人の詩文を評
する時、必ずあることを、その義の詩を解山陽の癖
すこ屬する評うるべき意れ前掲二三を止まらざ
る也

十二月廿七日記

花下與友人飲

一年芳時如夢時、只須痛飲答春熙、芸窓維得
数人句、莫向花前羨満巵
山陽曰、世間俗漢往々對花攤殺書、杯到不

飲、余願炊泉義書北詩千萬篇張籍延
也
酒家山房北評無可ならず、詩を棄てざるべからず、詩を
務めて世を罵るべし、山陽の評掩ひ難き蓄あり
歎老
婆醉特閑耳將聲、猶是癡情無此回、
偶入少年叢裡笑、依此李去獨留詩
茶罐口、依遂法歌、李尋私宮、獨使先生
坐殘燈耿之中、元是莊周
山陽に評無るべからざる詩を記して茶罐の評
をなし、山陽をして評せしめんと欲する語を為
さん。

東京製

弼夫
誰道降旗摩父兄、何如前志事紛紜、遺縱
曖昧誰能別、偏博千秋留教名 函像
山陽曰、函像事跡不可的知、某作外史、至此
擱筆躊躇久之、亦終於糊塗、日本史收之
於將軍家康傳、所以懲惡、某之為糊塗
所以闕疑、
固ふるも北評ならず外史執筆中躊躇の一事を
聽く
十七日 菅忠侍
石塘村把似陵沈、只見中洲港口投、船頭船
尾相銜蓑、政是江湖歸棹時

山陽曰、三四舟行、実況、蒙窮異舟如南、未
嘗游北境、故不能盡詳耳
蒙山の冊婦ひのことも北評語に因り知ることを得
り。著者人の行状、えん等珍重すべき事実を知る。山陽の評語を
しも其深を能くかめ、えん余の言も無きを成す
歟、温酒有候、迄不及之際、義士髮然
氣味蒙然、笑、故不可不自為之
こんなら山陽の酒飲の味を聴く、山陽の酒の
燗のやかましかつたことは言て老後にしてみたい。自から
燗をやることがこんひてるる。
余嘗聞西豆飯、偶有此作
恵像頼春延忍流、今荊下種典倍猶自笑
老夫常後事、東郊に有嫩芽抽
山陽曰、菓西河嗜俱蒙産豆、其皮軟
知及炊之、青赤倍他産者、一来京城地
味迄特殊、老之而已、後有能集赤流延
獨未書賞地産何如蒙耳
ここのまに山陽が豆を嗜好することを知る得た
り

[illegible]ばかりの時の状態は
[illegible]人と保存しておくことが、実さんな者を第
行本として出したもの。長年まうまうのかく。他業の
間へ絡り邪魔をまうまあやうまして入れないと思
つてゐたがさて無味のきいうものだから、いつも入れ立
行をみる。別居出版でもまことはあるまいへか
さりとて友故まうまの物なる、其内閑をぬも多
のの題目を施して保存しないと思つてゐる

其日左の如し

郷愛弘業銀の沿革
[illegible]の桜田村の[illegible]
早稲田大学の田〳〵八生

各氏新旧諸家録

徳志園

長家の先祖地

長家の田溝業

政事時代

明治庚辰の田厳

明治初年頃の田厳

明治時代

高田藩時代

大坂駐在の田厳

大隈侯葬儀并教養会記

此等の記事は概ね長崎にあり悉皆写し取る

横原製

バ教養をもつもの多かりしである。

自分の祖父の田厳録に断片的に折々の逸事とかあるも、之の中に除かるべきものは除かるべし、他と分かるべきものは郷土の史料たるべし

九月四日記

○今日市に使人て数来文行堂を訪ふ書籍は一些も買ふべきものなく、骨董一個を購ふて帰る、それは洋式の間鑑の薬箱にして長崎の醫者高橋某の先代より持ち傳へたものなり、薬箱の里漆と塗り分ける抽手三段つき、上段と里漆塗薬匣五個つゝを二行に入れあり、その薬匣の中にまた各々銅のフタとしてあり

蓋の漢字を一字づつ金を蒔絵してあり、外部へ
はとゝのつて四方ともに掩い、今の鞄のごとくして、上蓋
の提子あり、内部の金具はあの真鍮のモールを細
工あり、華も細文ありて上等也、此花の中まい銀
七、器の装飾の五六の機械附随する外に金属
朱ぬの外科機械三十数點を納め、皆古代
代外科用式なる今と異、ちゝあり、数個の器械
鑷、鋏等、紙に包みたる薬も若干あり、金瘡の
針、真鍮の壺も入れあり、今日の真のやうな
んも和蘭陀後味の抽ぎし、便五十用也（九月分）
お書き添らしたことを一二神也、また此の花瓶
一本の漢法醫の手と格別異うて和か精巧

榛原製

の上まるいは日本醫の所持したものであるから此
が、西洋真い箱を云へば箱の蓋がモールの金
具蝶番び開閉するやうなりて居り、又蓋の
一方の皮のベルトが附着しあり、此のベルトの三
個所の孔が、抽子の把手を結ハまるやうな仕
ればある。ここらの金具洋式である。
臭今が前年長崎で淋病の河内吉陸坂味
の骨董を得たいと、二三の骨董屋をいろ
と尋つたが、何れも入らうへた。若し此の器
器の出きることあらばと、ちんと買ひ入
んとことあらう。彼んを得ることとなり数十年
を帰てたなる手も、うく獲化の有望を湯し

ひとを言い得やうか、

○近刊服部嘉香の「現代歌文評講」は余の隠岐中らとも書かれ」を指摘し隠岐は家とりの事を

たのもし詳しくもある。

市野秀城氏は隠岐を家とし霞佐川後の

才一人あむあらう。内外文学者の通派系

である「蕉光」多「詩」の二誌は隠岐

の微笑を誘くしたまぬこまあるが隠岐

の微笑は人氏の研究の特

異性と詩術の巧みとは大いなる世人を驚

かしやうむ、なるい形容詞。

陽の紙幅を高からしめた。続いて出比春城

隠岐集」春城隠岐二行」は、更に隠岐の本領

を発揮し、研究と鋭味と着眼の深さ深

さ毒しさ鋭さを以て、一人の裏面、学術の

裏面、四人の裏面、一人といふも表裏と

微しもの真実を伝くるに奥味の尽きぬよ

かあるる。特に氏の隠岐の特色は詩術の巧み

なること、文章の上品なること、皮肉や衛気

がなく、温情の溢れたること、ものを人

間がなく描かれたること、などいとまなくらう。

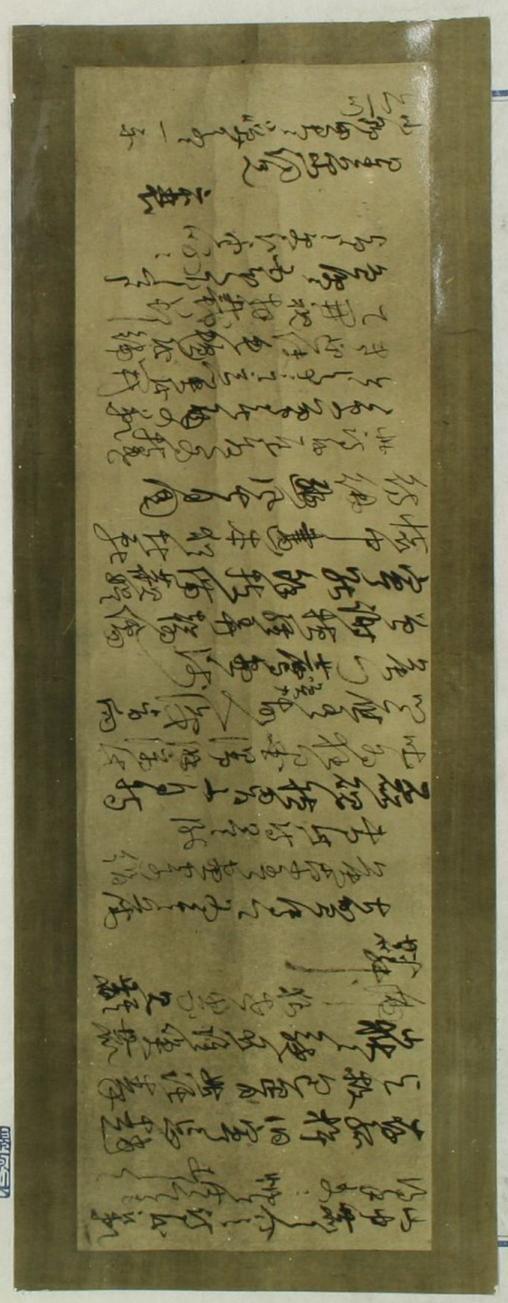
九月十六日
於竹文と感想文

八年九月九日記

○未だの人久保田辰彦氏武庫

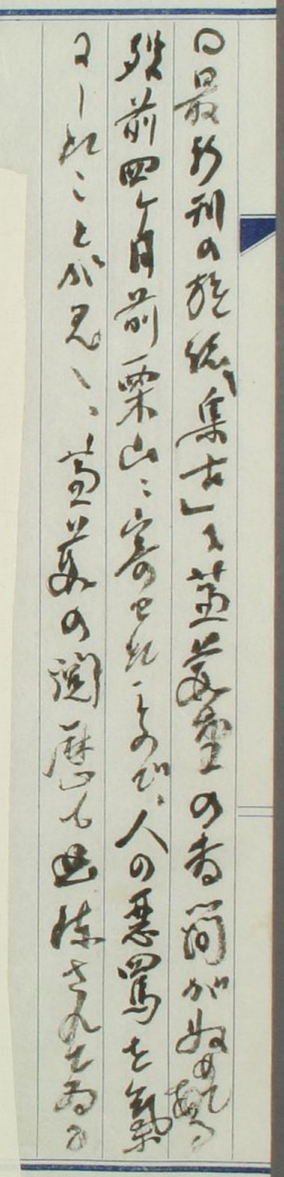
郡精道村村出身主地）二冊を寄せ来る。

予が絶筆頼山陽」を収め、星巌・玄山陽の吉状八余の珍品とする所のものであるが、北方前を久保田不花の画を宮本海峯の書とされも拙者の嘱数であるものである。



而は四人不花の山陽の九の三詩あるとの所の
も集中の逸し居るものなるものなる
えんとする、たゞ如何せん
不安平無こと已無、清貧恢諧如人、一室
午日我茶窗臥讀、不生未見書
大酒如君獨出群、新醅字生錦愛
仗、横亭他日可相酒、須向隣人覓上雲
紙帳此庵訂面、一夜江帆向北飛
微雨新蒲蛍川路、共看蛍火上羅衣
浮雲社伝岩出実、唯
夫久来覚

蕉



兼葭堂の手紙

森　銑　三

一

木村兼葭堂は享和二年の正月二十五日に歿したが、その逝去に先立つこと四箇月、享和元年の九月二十四日に江戸なる柴野栗山に宛てた手紙の寫が、靜嘉堂文庫に藏する小宮山楓軒叢書第六十三冊の「諸子與栗山書」の内にある。その手紙の内容が兼葭堂の傳記資料として價値を有する上に、それを通して兼葭堂の人物がいかにもよく知られて來るものがあるよつて私は數年前に全文を寫し止めておいたのであつたが、それを發表するならば、兼葭堂のことをも少し調べて見た上でなどと思つてゐる内に時を經た。兼葭堂は、生前から名前の高つた人だけに、零細な資料の各書に散見するものがあまりに多過ぎて、簡單には手が下しにくい。一つはそのために時期を逸してゐたのであつたが、近く兼葭堂の研究家高梨光司氏は、舊著兼葭堂小傳の增訂に着手されるよしを聞いて、私は手許にある資料の覺え書を同氏に通知し、兼ねて右の手紙を何かに發表することを約した。手紙の寫も高梨氏に送つてしまへばそれでもよいのだが、兼葭堂ももと〳〵多少の關心を抱いてゐた人ではあり、もし出來たら何か書いて見ようと思つてゐたのだつたからである。ところがいよ〳〵となつて寫を探しにかゝると、それ一つだけが見つからぬ。高梨氏に約束したことでもあり、心苦しく思つてゐたところ、數日前書き拔きを整理してゐたら、やう〳〵にして發見された。よつてまたこれを本誌に載せさせて貰ふことゝする。

二

「近比は御用御繁務被爲在候趣承及候。千萬御勉勵奉恐入候へ共、小生一身に付不得止事御座候に付左に申上候。其意趣は、當秋尾州名古屋風月孫助と申書林にて、奥州伊達郡高子村熊阪子彦と申處士、文章緒論と申書を著、印行仕候十八頁に小生之名前を出、坐法其住を保たず、又禍に因て亡命仕、游說之士爲んと欲すなど、惡斥漫罵至らざる所無之書申候。學問邊之誹謗は、本より不學無術に御座候へば遺憾も無御座候ども、法に坐して住を保たず、禍に因て亡命と申に至候而は、公法を犯し、祖先之墳墓を捨候樣に相聞。御公邊之聞へ、世上之風評も甚以歎ケ敷、一已に取申候而は、先祖を辱、子孫を汚し、何とも心外の至に奉存候。且又游說と申件、誠以恐多奉存候。小生譬范蔡之辯舌御座候とも、方今泰平無窮之御代、諸侯方へ立入、何事を遊說可仕候哉。尤文辭之過飾にて御座候共、忌諱甚敷文字に御座候へ共、甚以恐入候儀に奉存候。兼て御存知被爲在候通若年より物產之事、且書藉を相好申候故、御物好被爲在候諸侯方大阪御通行之節は被召寄候而、時行之花木、藥石、書藉等御尋預申候儀は間々御座候へ共、小生より相求罷出候儀は決而無御座候。尤先年祖先之舊居北堀江五丁目に相離候儀は、小生微弱之性質に付、造酒商賣出來不申候付、妹に婿貰ひ、吉左衛門に仕り、釀酒仕候處吉左衛門は病身之上、時節不宜候（て？）

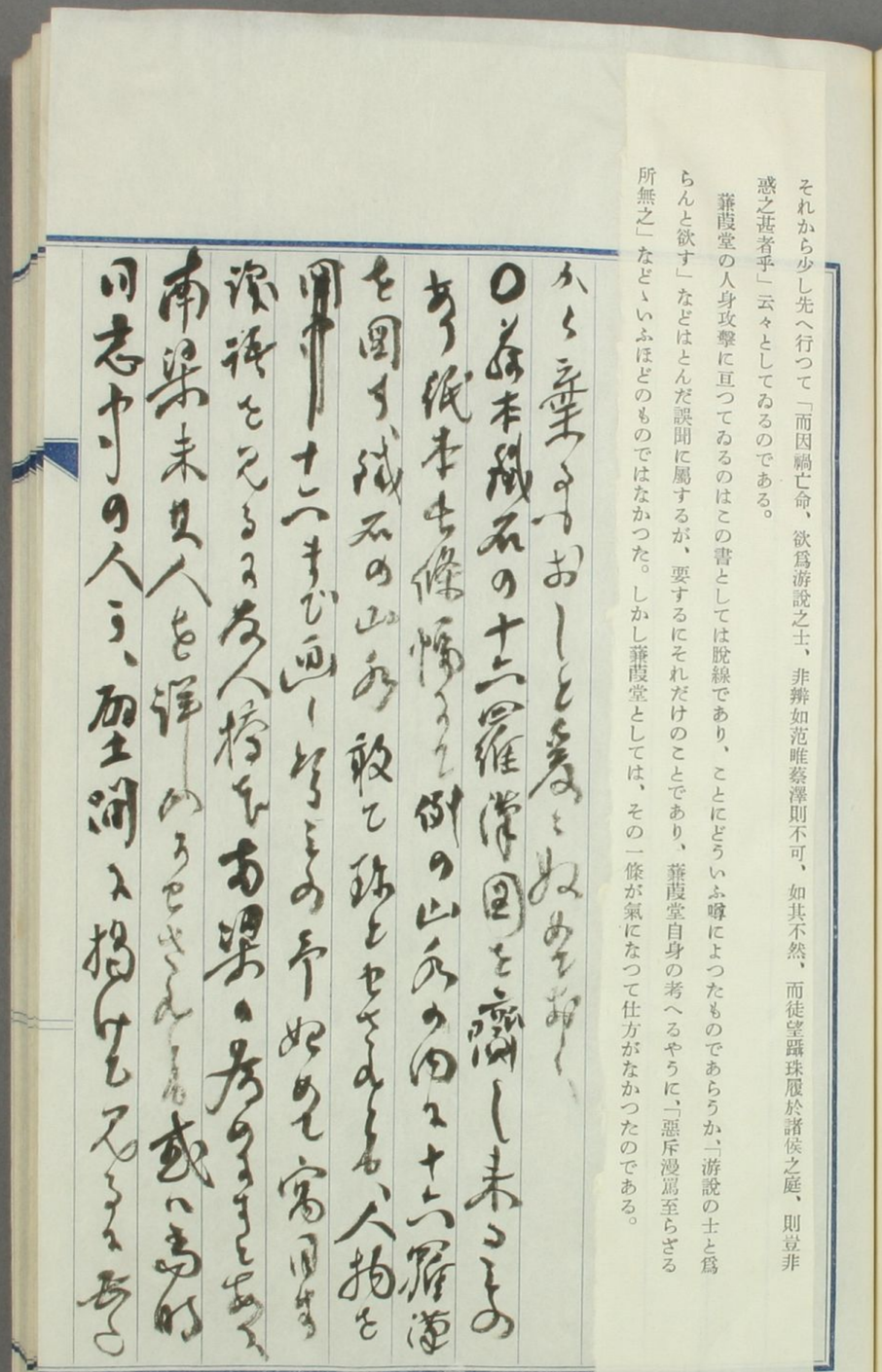
身上不如意に付、名前相退度旨申候に付、無據名前酒株共引取貸株仕候。安永五年宮崎屋次衛門と申候者へ貸付候處、同六年九月に至り候而、貸造不相成候段御觸御座候に付、無仕方小生名前を假し、次右衛門酒造仕候。同十二月酒株御改に付、次右衛門義憾（？）釀之製に紛敷由御咎を蒙り申候。其節は小生家主五町年寄を相務居候處、不行屆と御叱を蒙り候事御座候而事濟仕候共、次右衛門へ貸置候酒株諸道具等被召上候故、小生資本失ひ、鬱々不相樂罷居候所、寛政二年勢州長島侯より被爲招候而、御領分川尻村へ引越居候處、家事無據儀に付、暫時上坂仕候處、三年十月堀江筋大火に付、持屋敷始親族別家皆々類燒候而、書藉手道具隨身之分は相殘候へども、其他は皆々島有に相成候。誠に家產を盡し申候。右之仕合故、無據勢州を取拂、歸坂仕候。其後は只今弊廬を借り受、祖先之餘資、不用書藉等相拂申候。且又近年は、紀州樣よりの御合力扶持を仰ぎ、餘端を相保申候處、右之通之惡斥、眇々之身分候へ共、御上之御察當を不蒙候共、此の書後世に殘候上は、如何成惡名を增益仕候而、先祖之墳墓を合候而如何成汚名を受候も難計候。已に今時之人議論惡辭にも難義至極に奉存候。何卒此條を相除候樣に仕度と存候。小生義如被爲有御存知、生質至て小膽、其上度々災厄、困憊仕候。老衰日至り、苦心多く御座候處、此書を見候而寢食も不安候而、終日終夜に苦心仕候。格別之御憐愍を以て此一條を相削らせ候樣、尾州御役人衆御內意被成下候儀出來申間敷候哉、何卒可相成候はゞ、宜敷奉願上候。（註九月二十四日）」

三

以上が手紙の全文であるが、文中に見ゆるが如く、蕓葭堂は、熊阪台洲の著、文章緒論の中に、已に對する誹謗がましい記載のあるのに得堪へずして、栗山を通してその條の則除を乞はうとしたのであつた。

文章緒論は、寛政十一年の夏に成つて、翌々享和元年の七月に上梓された。同書の內容は文章汎論とも稱すべきものであるが、その第十七丁から第十九丁へかけて、近來浮華風を成して、文章を以て世に媚び詐を飾るの具とするの弊を述べ、その一例として蕓葭堂の許に諸名家にして篇什を寄する者の多いことをいひ、引いて「弘恭則近坐法、雖則不保其住也」云々とし、それから少し先へ行つて「而因禍亡命、欲爲游說之士、非辨如范雎蔡澤則不可、如其不然、而徒望蹂珠履於諸侯之庭、則豈非惑之甚者乎」云々としてゐるのである。

蕓葭堂の人身攻擊に亘つてゐるのはこの書としては脫線であり、ことにどういふ噂によつたものであらうか、「游說の士と爲らんと欲す」などはとんだ誤聞に屬するが、要するにそれだけのことであり、蕓葭堂自身の考へるやうに、「惡斥漫罵至らざる所無之」などゝいふほどのものではなかつた。しかし蕓葭堂としては、その一條が氣になつて仕方がなかつたのである。



拝呈　仰別之御伺吉氏ト種々相
談ヲ候處凡ヘテ同論ニ候同志ノ相談
ヲ機会ヲ観テ市島排斥ノ義ヲ為致
候ヲ相約ヲ候本日伊藤伊助氏ニ向テ
市島ト提携ヲ絶チ至誠君ト話ヲ旗幟
ヲ鮮明ニシ堂々ト打出スヲ可ト考ヘ不
然ヲ以テ多数ノ敵ヲ以市島ト提携致
ヲ候テハ如何ナル口実ヲ構ヒ候低事

敬啓、家長氏ノ帰京ヲ待ツノ外ナキト大体
ヲ以テ四条中ヲ置ク　九月十一日
ノ訪問ノ村岡議員ヲ以テ余カ仰回ヲ為ス此事ヲ
ヲ以テ当時ノ文書ノ写ヲ送ルヲ等ヲ
ガ敵将伊藤伊助ト提携ノ事二通ヲ最秘密
文書箱ヲ記ス　記ス除、敵ノ参集ヲ
業ヲ書面ヲ、彼等ハ余カ仮家ト提携
ヲ見ル根拠ヲ極メ状ヲ現ハシ居ルノ也、市二
通ハ当時北東議員部ト岩船一郎ヲ保ヲ
ヲ往ヲ敗ルノ岩船部ヲ
無意ヲ為セサル為ニ、伊藤伊助ト
当時岩船部ノ者カ為ニ、ヒヲ提携ヲ

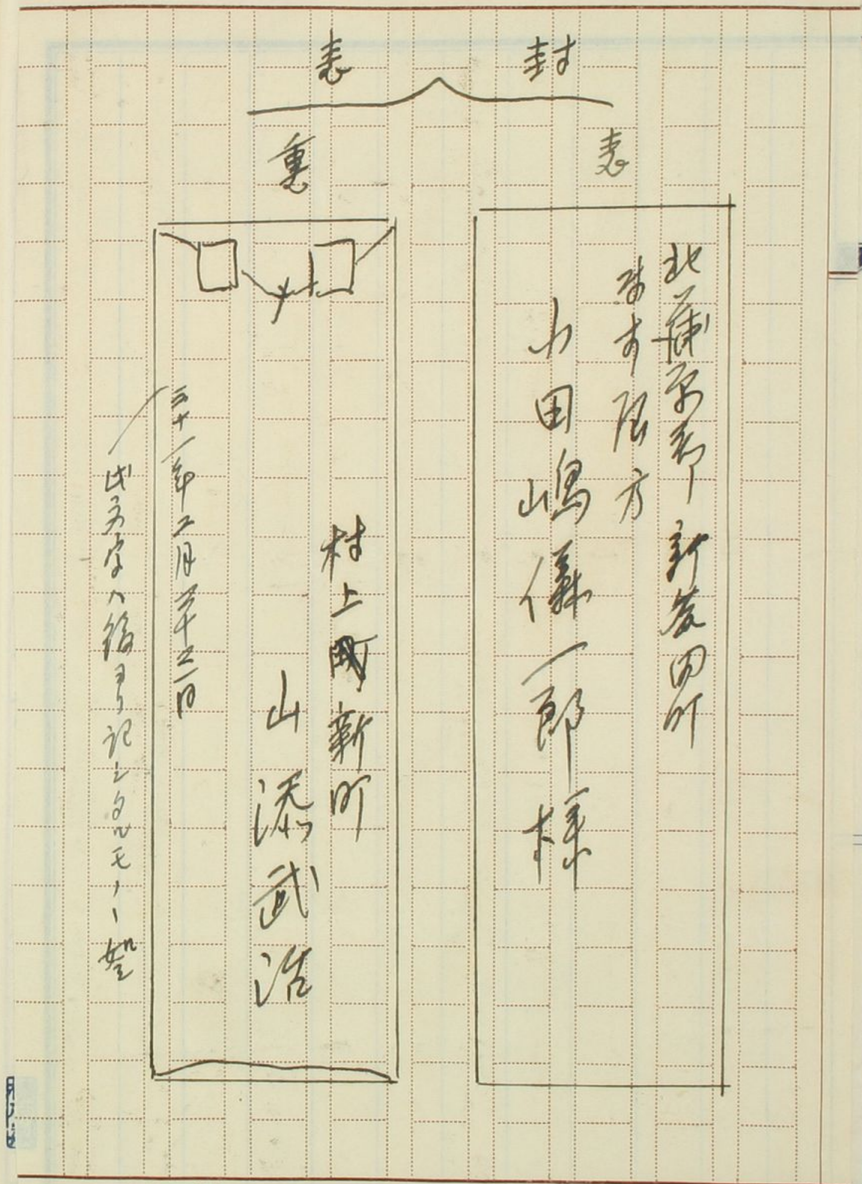
節ヨリ誹謗ハ不可免覚悟ナラス其結
果又岩船ノ政友ト兵を過半政敵ト相
成ルを知リ可ラス云々忠告仕候而メ
加藤氏ヲ同意ノ見ニ候ヘハ結局見込通
ニ相成ヘク存候当郡全体ノ意嚮ハ親
家ヲルニ貴下ノ軍門ニ降リ候丁近日
ノ中ニアリト存候先刻ヨリ行
動ヲルカ一般ノ気習ニ候ヘハ深ク御
注意ノ事肝要ト存候
佐藤吉氏ヨリ加藤氏ヨリ至誠舎ト

提携セヨト電通アリ迚ニ書見ヘ電信
七ヶ云々申迚ニ候如是事情御諒
相進候ハヽ目的貫徹ノ前兆ト奉存候
ヘ氏ハ効ノ所ハ悪敵窺フモノニ在之
候ヘハ一層御慎重被御横勵奉祈候
右得貴意候仮四月ヘ宜敷御上候
匆々頓首

一月廿三日

山添武治

山田島儀ノ部様侍史



彼手紙に南蛮しとあり、敵流が不利となりしの意
也、彼等は小田原の裏の邸を彼りなりしいかに
森い聴かせしも書中かの森と森勝
弥のうちに北人等と合と基奉りいとこ
とある出船の有力者なり、小田原い余とは宗の誼
丸なり、堂流の文武に属し始終敵の参謀役なり
まい四十年前に属し小田原が森小田原滅亡す此
文書を見て夢を思ふの感あり　九月十二日
○仲基西人の書いた怪談の内に支那人ひも書きを
うな怪談がある。それは数千年前死し此或る貴族
の墳墓があいかん、その棺柩を開き種々
の埴輪い、落る死し此人を護ると或いそれと

侍しまを弁ずる為めに心えとおるの底、その恒
輪が今い考古学的研究家に表はれて
南の貴がある様なるに、学者等のものが多く骨董
舗の手に帰し此為め、死人の護衛も安堵も其
他の用をなさずして、不便を感ずること甚しく
絶食数の試験を潜しやいとのことを、後又
又の此骨董屋を探ぐり、或る庵其の表
舗に入るべき其の死人が現れ、得とそこに出る
りかいつた自動車の運搬手又其の事情
を告げ、自分の近傍を抑留さ
れたるを、彼くの自分の代つて、彼方へ出張を
喝くてくれよ、たまいに貴者をなへと頼る

標原製

自分の養に戻つてくれと云ふ。其話の中に支那
の話があつた。運輪手が要請の如く、四千ド
ンと云ふを出して居舗内を物の破壊す
る者が少し（此のの、垣輪が逃げ出す驚きひあ
さとなかさん、其の死人、おるい時、礼さと
て戦布を入れた貨幣を渡された。運輪手
をうんを捜くて家に帰り、其の財布を渡さ
のちく（五き）、ほ方稲まる物を捨てると前庭
黄つた時めるる重かつたものが、なるる軽
く中を検すると、金紙で貨幣の形を割りとるものを
儀を金紙で貨幣の形を割りとるものを
用中、えんが代を湯ちてあたと云ふのが大概の

節とあるが、支那の怪談にあるそうな話に、
こんが仙人を吉めんとして
の生物を写実的に写すことの意義の頭を有する
ことで、鯉を写すことを没頭した画家がいろいろある四
條家などの鯉の名人と云われた人がある、香魚を写
すのに迎利の　かあり猿を写すに狙仙があり虎を
写すに岸駒などの狩谷掖斎の家に生入し
れたる虎のかゝ傳が魚の写生が巧みなことを、掖斎
は魚の名の鉄と異くて、魚河岸が実物を買
はせて写生したことを聞いたる現に北四
かの吉い比魚漁が盛行さるゝもあるが、の流さるゝもから博
物誌と画手とを魚の写生をしめた

標原製

ことがある。ある魚類は上陸の如く拡面を実物を
得て描くが、果して科学的の研究を加えて写生
と云い得るかどうか、庶民家の写生家が
猫を画くことがある。僧文から猫もくる。死人に猫化と云
はれることは例もある。素人眼からみて写実的と
思はれる科学の眼からみて写実的と
写実であるはいうまでもあらう。実は画家
の書くのは本性の資料まで書くのであるから微
細の家はまた著が及ばないのである。著が及ばないから
い大切な特徴を知識がうまくつかえを関知
することがあるのである。魚の形を大体描かない
ものが何科　に属するかは、学問的に種別と

ることゝ、同じ科に属する魚類でも、細の特徴で美お
がある。本州で産する魚の畫は、此點を特に鑑賞の
絵画と大いに趣を異にする。全体本州で資料とす
るのは、掛板に依るその實物を保存したものを標本と
するのに比べ、魚類は、花くと全く形態色彩を
変ずるから、創り養成することゝ、そこで写生の
画を要するわけ。それが[illegible]の[illegible]
魚類を種別まで[illegible]やうなまでの微細の特徴
のまで及ばねばならぬ。○生きた魚を取り来つても、
其体を写しても充分とゆくぬ、とゆふ深い魚く備つる特
のなどの如きは、水中で泳ぐことを、活動するこゝ、ひく奉も
其の活動から、絵つて魚類の伸びなきまで写も

るべ。其の際縮しに形を写すに死魚を写すとも
いんでも仕方がないとゆふ。尾と赤鰭りとある。殊て
水中活躍をあらはさんとに尾や鰭を振動の構を
凝すことを無理が生ずる。人間の戦慄でも
描くと面倒であるのは其の面部で目の位置が
しくゆつても面貌を表はす目が生ずると同じく、魚に花
も備つの表情でブチコハしること又入つても別庭画家の塗料
がある。例へば魚類の頭脳の氷頭と呼ぶ一部のも
きい透明の氷のようなものがあるが、こんなものを写生する
ことは容易でない。大体人間写生の場合は真を失は
ないとゆふ。写生とゆふ意味は光線の塩

絵に伸縮あるも往々其真を失することがある。田本谷
画に経験ある人の説なり。写生一般に敢て一のみず寧
ろ人間の立覚び書く方公研かれとまとめる。本草家
の通説の概して用能説が乏しい。実に微細の特
徴を文で書きあらはすことは頗る困難しいので、絵
を以て解説する代へんとするのもあるけれども、さて解
説する無しと程別まで判せしもの、容易
に得られない。本草に拙なる魚を画するのは画
するのが魚のハビットを充分心得てゐるからである
ぬから、其の固有の画帳に魚や香魚を
描くの数ひ多い。

○支人内り陸の地に中山陽の挿画を高く来

り金を送りて其厚意を謝せしむ、一見長絮と思ひ
なるも惜むべし断簡也。陸放翁の歌行五清を
断簡の唐紙模本に挿画せるもの、脱紙
多く二冊と最完璧のもの、仍て予をして
全清を知らしめ、一巻に装しと添くんと擬す、予
辭する能はず拙意を挿む、山陽先生の識
語に放翁の評語あり左に掲しおく、放翁の
詩は長歌り、山南行、滄海、龍眠書馬
蜀酒歌の五篇也、此の零墨或は人の房の手
なりとして書き無くなるものか晩年也、うき書
体にて歌の気歌あり、拙書を之れに添くること
特に慈つと云ふ

昭和八年九月廿日

[illegible]

○偶ゝ七月豊山の詩を淩ぐ　今心の什四五を得

寒枕巫雲夢未成、風林落葉、黄柳那其一都

[illegible]

雲霧沈垂暝四山暮、林葉落下而蒼蒼、昨日
春雨殺成十字大筍抽穎未見夫等句
江雲暗雪北成花、罷釣帰来逐乱鴉、黄竹
叢西沙鷗暗、醒風一夜認潮声
一茅舎毎家元年、醒風吹面白山雪、飢雨
死来無消息、雲鎖江山不示人　雨海嘉花
石間投杖憂然都、俯看松巖栖鳥驚、
雨驟風花絶鈴閉、我鑑高人逢四義　山陵四義
洗雨渓山翠黛重、如有古殺白雲快、
苦力巧投拂雲快、出古来才一箭　山
昨松高来東西、四処無人路迷、草満河
塘行石長、風吹白雨野狐鳴　行狐長中

徒院落寂寞何樹花寒窗夜雨淡細雨
無聲傳入室滿庭光緑芳草鶯啼二三聲
江心留桂浪澄澄月影漫漫水無邊
極東亭如無色銀輪一半未離岸
細雨花驚淡林含懶不啼寂寞亭臺夜
向有蕭疎影似君

○向崎の嶺と題し嘯月陸放翁の七古五詩を和
す宮ヤ小を見ふ所なる故書を愛すと巻末
左の演詩を所収す
山陽公錄放翁七古五詩 横校 書 筆 致田敏
偉哉晩年[illegible]

横原製

但此数枚数供谷詩時不見[illegible]
[illegible]
余錄全部 予不能辞 奴卒庶幾 無
遑 顧客 稿 也 時昭和八年九月下
浣

○産業組合中央会に於て発行の雪国
編輯長者金の寄稿を求む 予前年一回投
稿のまゝ、但の北海道金の会社が印刷を始
めまする毎年 也 辞する為の為 雪国の既往
特来」の二稿を寄せ、北海スキーの
スポーツ 雪国の行いんとする 雪国の運命漸

一萬七千三十二號　（第三種郵便物認可）

九月二十二日　東京朝日新聞

野口博士の傳を讀む

市島春城

私は野口英世博士の傳記を大小となく通讀してゐるが、今度奥村鶴吉君によつて著された傳を血脇校長より寄せられたので、取敢ず熱心に讀んで見たが、今度のは厖卷であることを感じた。その分量の大なる點において、その敍事の精緻なる點において、編次の井然たる點において、皆これまでの傳に立優つてゐるが、特に私を喜ばしたのは英世博士自身が自家の經歷を紙數してゐる點にあつた。それは博士が自家の經歷を傳として書いたのでなく、又自家の經歷を傳へる目的でなく、その折々の動靜を恩師に報ずる爲の書簡が、即ちこの傳の經となつてゐる。

博士は恩師に對してはいつもがい兒の如くどの書簡を見ても情味がみなぎり、一點げん氣が無い。何人でも偉くなつたり地位が高まつたりすると、不知不識の間にげん氣がひめくものであるのに、毫髪もそれが無いのは博士の人柄の然らしむる所で、私の敬服するのはもつともそこにある。氏は血脇氏を恩師と仰ぎ、村校の校長たりし小林榮夫婦を父上母上と呼び、眞母を城母と呼んでゐる。博士が舊恩を忘れない一端かこれで知れるのだ。博士は文學的才能にも惠まれて、意の到る處筆隨ひ、どの手簡を見てもお座なりの形式的のものは一通もない。どれもこれも情意を盡して宛から對座談話の概がある。正しく博士は書簡の達人である。

私の更に感ずるとはよくもあれ程の澤山の書簡を、恩師に又父母に寄せたものだと思ふ。あの研究に寸隙を惜む人に、恩師の誠意が無ければ續して出來ない業である。今度の傳の尨大を放つ所以は、主として博士自身の筆が經となつてゐる所にある。震災の時に血脇氏所藏の書簡は多く失せると聞くのに、それにも拘らず採錄された書簡は如何にも豐富なものである。この一冊の傳記は博士の自敍傳といふも決して不當でない。

凡傳記は己れ自身爲らざる告白を為する以上に可なるものはないが、この傳記も本人の自家告白が材料となつて、博士をもつともよく識る奥村君によつて編されてゐるから、如何にもかゆい所に手が届いてゐて、博士の自ら說き到らない所は著編者によつて補はれてゐる。編者のその人を得たも、この傳を光輝あらしめた一因であることはいふを待たぬ。

世にはみだりに立志傳と稱ふるものが往々あれども、概ね傳中の人に接する費辭であつて、事實立志傳と許さるゝものが古來どれだけあらうか。吾が英世博士はへき村の貧家に生れて、がい兒の折手に火傷して終生不具の身となつた不幸が寧ろ發憤の端をなし、きつ掘勤勉早く米國に到るの機會をつかみ、學園の無い自由國に專門の研さんを積み、幾ばくもなくその才能はせい輩を拔き、追々地歩を學界に占むると共に其志は益々高まり、當初は祖國に歸り醫業に從はんとしたが、それを爲すには俗界に處するの方便としてドイツに遊學して金ぱくをつけんとしたが、皆その非なるを悟つて歸國を斷念すると共に、こけを買ふためにドイツに遊ぶのろうなるを知り、研究のためには寧ろ研究機關の整備したデンマークに遊び、終に世界を舞台として人類の恩人たらんとする大志を發し、幾多世界の科學者が謎としたものを解し、果して世界人類の恩人たるの名譽を博するに至つた。これが福島縣の寒村に生れた不具の少年であることを思ふと、立志の如何に大切であるかは博士の傳が如實に敎へてゐる。

博士は幾多世界の驚異に值する大發明をなしても尙滿足せず、終に身をていしてばんえんしやう雨のアフリカに病毒と鬪つて天職の爲にたふれたが、斯る傳記こそ正眞正銘の立志傳といふとが出來るのである。博士のこの傳記は單に世界に誇るべき刀けい界の偉功を傳ふるものであるのみならず、成功者は乃ち倫理の實せん家であることを如實に敎示したものとして私はこの傳記の上版を喜び、江湖の爭うてこれを讀まんとをしようとするものである。（四六判六六二頁、一圓八十錢、神田一ツ橋通岩波書店）

東京朝日

唐し閑散の年とならん。但此年来の嗜好酒と絶交
する能はず、閑を消ん心算と之れを親しむの機会多
り因りて他事を保つの故なれども、話君の金を
隠蔵の発明を慫慂するに節酒を勧むる
の在れん、市史編纂を採とすると今夏数十の落
葉に没頭して漸やく稿を脱し、未だ題名を
得ず、漸やく表示して代弁編の名を撰ぶ、蓋し
[illegible]人会と[illegible]水を採る所以なり
[illegible]
云く暮年像片影、曰く鶏肋百夜、附録を以
て題名とす

昭和八年九月廿三日

○駿南社より発行の異国書出版の名著

とする所なり、然れども其の出版とする迄の僅かに千二
三冊を過ぎず、此の書中に入るべきを入れざるあり
少からず、また出版に際し譯本ある事亦書きたれ、また著と会して一部
纏つて異国書を新しいと思ふ、初めて其
の目録を作つたと思ひ、先づ此の書を今之日
命の実録の大要を述べれば、此の書を供したもの
るものが少からずあつて、これを或許[illegible]指摘する
ことが一の[illegible]国雑で[illegible]あつた、実いをこと此の目録
を作る必要があるのである、自分も[illegible]を
永い間気がつかなかつたとは[illegible]異国書
ものを作めて、せめて[illegible]位[illegible]と考へた

てを居申り、欧の西から傳出すこともいくらもあるこうつた。

何人と言ふ事は モンタヌースの日本紀行だの、姉崎博士の長崎叢書と称する者と龍の三著だの、濱田耕作君の支那古代文化の研究の、天正使節の回顧録だの、文化年間露国軍艦ディアナ号の来航だの、シーボールトの日本紀行だの、ポートロンの日本だの、ガロー、ハコンの日本の旅だの、ペリーの日本遠征記だの、ハリスの日本だの、ヒュースケンの日本だの、ロッシュの日本だの、ヒュースケンの日本だの、ロッシュの日本だの、ヒュースケンの日本だの、ロッシュ

ントの日本歴史に等及深いあるが不いはらるべきが、
之等の中北の蝦夷の中まで列すべきものであるべきか、
更に考へんに久米邦武の歴史四編、ラフ
カディオ、ハルンの武士道、日本を説く等著名の
内神田の本屋の、エドワードモールスの日本その日
くらべ、居住井の著しれる東洋の国、アメリ
カ彦の倭記やや、仮ち自分の時間を考へて記録
亜細書記の、自分の時間を考へて記録
うくのものがある、勢力山形幸四郎が研究
したるもの若干のものがある、実に北の島を
出ることも能はざりしやうなるが、ザット本邦の
ものと面白きを得ないと思ふと北海のあと

榛原製

後ることとなるの日無味をあつてある。
尚は前報に述べたりと二三補足すると、明治二十
四年刊行された渋井徳次郎編の聖フランシスコ、ザベリヨ書翰記が六巻三冊あり、
田中正印洋のシエタイシエンの切支丹大名
記がある、村田典嗣の支丹文学がある。
也内渋井洋の吉利支丹の書翰記の人名索引がある。
てある、曾つて八海表書、吉利支丹叢書
も、吉利支丹文庫の名を以つて或る切
支丹関係の出版が出版されたことがある
北内異四郎氏の編入(てる)帝のよがと
九えいとあるが、実物に就て調査を一致する

○西の丸庫所在の江戸紀行（藤原考）（表題ハ空白）
うて狩谷棭斎自分本也）○一巻頃者コロソイ
ブ殿ニ附し　複製本を高七年ノ記者ニ巻ニ
分ち首巻ハ仮名交ノ漢　記ハ二巻ハ書名ニ漢
文の解題を附ち、棭斎跋と棭斎の朱書あ
り　空腹の誤認を正すこの考し　空腹ハ書史
の笑柄なりとも　書の微説ハ如何
ようしこと此の考うて　空腹ハ正ず論
詩を活字版と出い、俞良甫の稽　柳文、河
作井所刊の醫学の大全　活版と思ひる数
向まうし、棭斎ハ河　其の誤りを正しあり、
棭斎の此の本を字ハ　寛政十一年十二月

複原製

廿日　二十業　高橋真末とあって吹行朱書ある
ひ　十二年正月　仮名とあり　即ち　この年廿四歳
ようと　仮名巻末ニ川瀬一馬の解説と　海西を
附し　ヶ
○文化年間ニ露西亜の艦長　北辰丸（道）の沿岸
測量中　蝦夷ニ　捕へられ　牧ヶ　捕へられ　ようこと
前年露人　フヨストフ　ヲ　北海屋　沿海
ニ寇し　村落を掠め　家屋を焼く等の暴ヲ
セしこと　英国の　英国の　英国の　英国の
しかるに　北の四人の　艦長ハ　ガロニン
と云ふ　文政四年　北の海　国中　日本
と共ニ　脱出の事　あり、　数日　波浪　も　未

八、北の四国人を招ひ出し、高田屋嘉兵衛を
を以て其結果は第二巻にあるゴロウニンの前に来る
ゴロウニン艦デアーナ号帰ッナジリ島に来航した
時、日本船を拿捕し、高田屋嘉兵
衛を捕らへ彼等を連れ去る。嘉
兵衛は露国の為めガロウニンの為め斡旋其の
完全を謀ること一件は後著述せる也。
書は[illegible]天保の末年蘭医杉田玄
白地歴学に従事蘭書に就て研究し遠近
日本紀行と題し、坊間往々写本流布した
るが、もと海内者に於て反覆せしめし也
其後明治廿七年訂正し大正十三年二月聚芳

○中央公論社版（[illegible]）の河合集の善悪論
を二十篇部の部分は達しめんと極力
空論につとめてあるが、其実係の一部にも出
此余の四篇は[illegible]の早稲田の学術を求め
て日清に渡る[illegible]八[illegible]人間[illegible]
の一稿を得求しも未だ[illegible]余を一年
失し共に七十を[illegible]四の論くものゝ元来
此が生前に[illegible]人のことを書くことはおかし
き気を[illegible]しかし其の人死して後書くの
は善悪の例ひ、[illegible]誰れもやり難くも
[illegible]の事[illegible]の生きてお

さうして、それに立面しと書くことは、俗の
ものいひとは、ちがつてゐるとおもふべきもの
である。兼ねるものの對の意味の意味の意味
いつても、若年の文人が青年時代やう書く
ことは教授の決して雅人する所ぢ無い。実は人
間としての意味を示すものの思想の表
がある。まいの文藝家としての意味と論
ずるのは、いくらもある人間としての意味
を論じ得ることの無いひとつの人事の無いひとつの人
それを著作に神的分生する、それが人びと
の出来るのは、著作があるから、引受けも安命
に試みることとする。わたくしは、分論社の名

原稿用紙

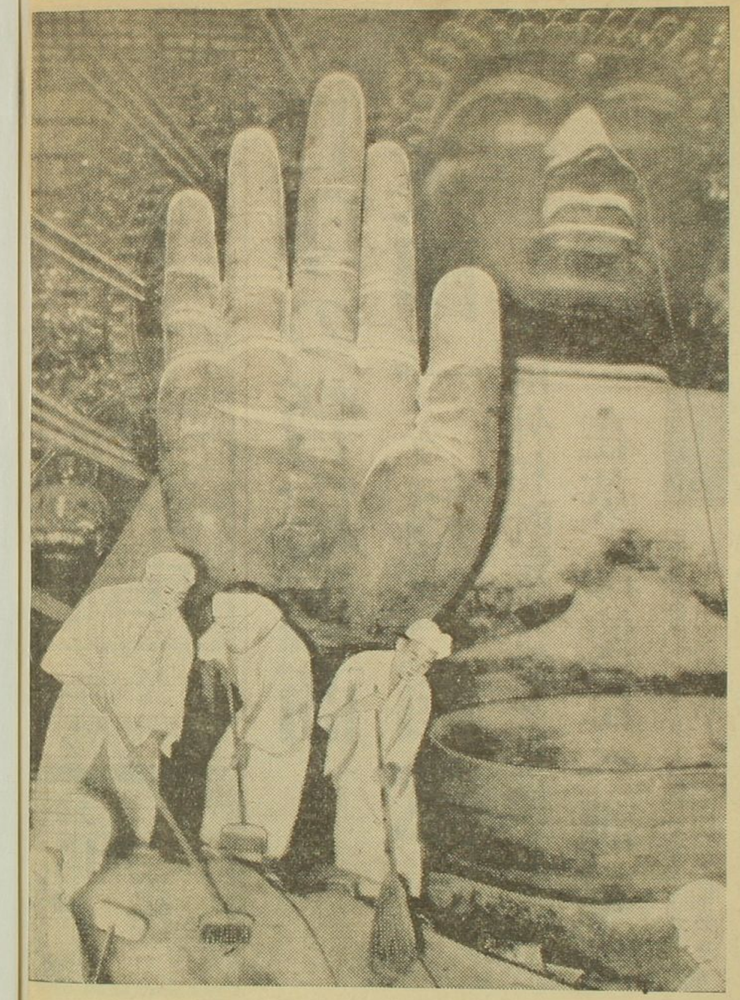
意味の表現を多くの人の親切をそんなに差支
えないとおもふ。

九月廿八日記

第一萬七千三十七號　（第三種郵便物認可）

奈良の大佛さんも美男に

けふ二十五年目のアカ落し



【奈良電話】二十五年目に一度やる奈良の大佛さんの大洗濯は彼岸明けの二十七日早朝から一山總出で大がかりに行はれた、まづ淨師雲井管長の擬遣の儀があつて大佛の魂をぬきこれで佛頭を足下に踏んまへる、もつ體なさを解消、次いで若僧六名が黙戒、もく浴、白衣に身を包んで背部の穴から暗黒の胎内を滑り土間から七丈一尺五寸の頭部に現れ、手はうき、唐布巾でら髪の美化作業に暮を切る

◇

續いて大佛殿天井裏から長さ二丈余の大はし子二個をするするとつるし、れん台に立つものと呼應して鼻、耳、脚の邊に拠かれるやうにして仕事を進めたがこの冒險味百パーセントの掃除は拝觀者をはら〳〵させる

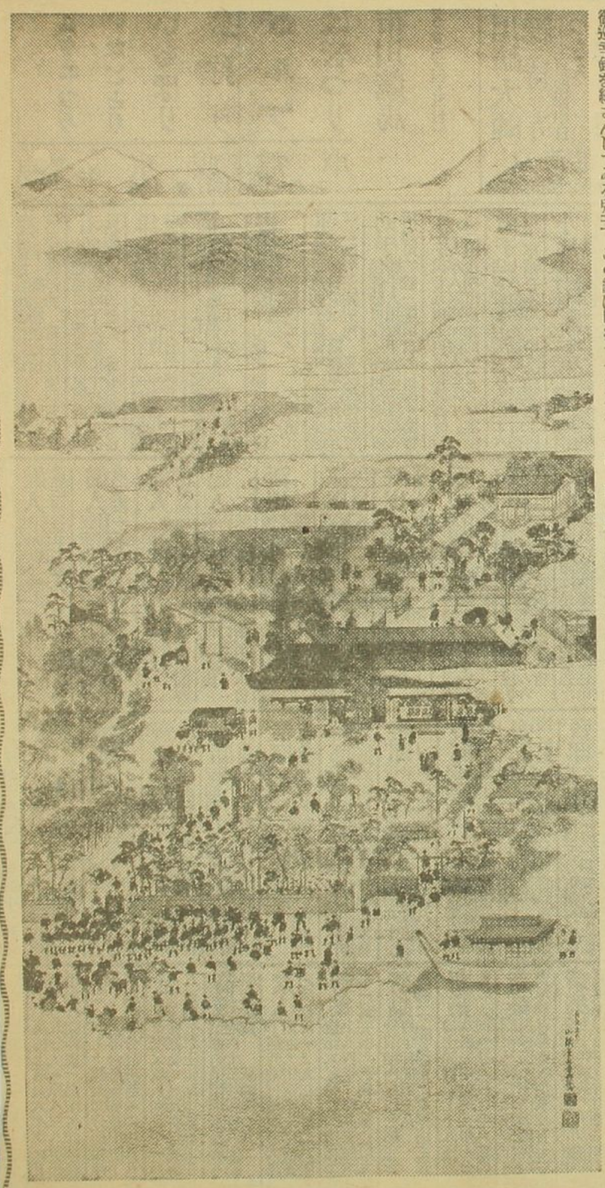
◇

鼻だけで丁度人全身の大きさ、四畳半もある左の掌、今更ながら本尊盧遮那佛の大いさに驚かされる、が少刻見事に寄動の地金色に改つた大佛を前に厳粛の儀が行はれ終了した【富眞は奈良大佛さんの大掃除＝大朝電送】

樣品

以下
9丁
白紙

京都日日新聞
昭和八年九月二十三日　（土曜日）



中野財團の依頼を受けて當時の御巡幸錄を編さんしてゐる京玉　この繪は明治十二年九月十九日　聖の際の御光景を彩色畫に　☆　た掛圖

郵便物認可

旅ハゼ釣
二圓二〇錢
羽田海岸
海の家秋季開場
ハゼ釣りに絶好
六郷川
其他沿線海岸一帶
京濱電鐵
品川六郷守間直通

集金
市内精進保證金無廿七歳上
商人出希望者後送れ採否通知す淺草茅町一の十五富士屋商店

集金
員一名募集
歩合給要信認金急求認外集金
淀橋區柏木四丁目九五五
野口

麻布一ノ橋電停前
イワマ美容院

賣邸
東横線文谷驛新築美邸八八
六四半三洋湯瓦水道殿完庭
廣都合依搖五〇驛前天池表具店

賣邸
高台庭廣地代九錢沿袋中野
國驛近急行中野沿袋北一〇美七一半山

賣邸
新築東中野驛十分新井驛五
分上公園半下八分三浴室瓦
水元中野江古田一の二一二七半山

帝大
農學部家庭教師譯讀園藝
農學部に適する仕學生紹介す
帝大農學部學友會共濟係

明大
學生に適する家庭教師譯讀園藝
なる學生紹介す　其他內外勤務傭員
卿田明大共濟部

上馬三の一〇〇一　世田谷區
渡邊方町洲

新築
四半下八三湯殿付門構父讓
可牛込新小川町一の五電牛美毛馬場

新築
門構二階建四室美圓中野驛
南七分横山市場昭和湯右富
圓寺一の四七五電中三六地主樋口

新貸
六下八四半二洋間四半湯殿
富中野驛南七分横山市場昭
和湯右富圓寺一の五五電中三六樋口

榛原製

東京朝日
昭和八年九月二十三日　（土曜日）　（第三種郵便物認可）

明治大帝
北陸御巡幸を偲ぶ
珍らしい掛圖發見
安倍新潟市會議長邸から

明治十一年明治天皇が北陸と東海道御巡幸の御模様を描寫した珍しいかけ掛が發見された、發見者は新潟縣の中野財團の依囑を受けて當時の御巡幸錄を編さんしてゐる兒玉四郎氏で資料收集の際新潟市會議長安倍邦太郎氏宅で見だしたものである

☆

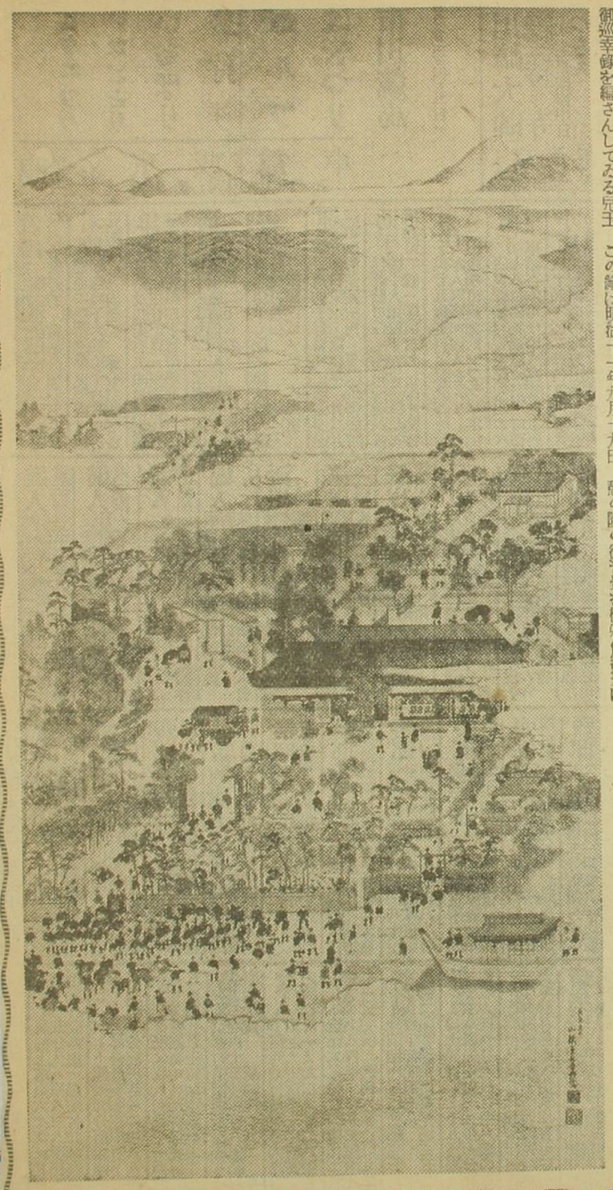
この繪は明治十一年九月十九日明治天皇が新潟縣中蒲原郡巻町大字流作場（現在は新潟市に編入されてゐる）の安倍九二道（邦太郎氏の先々代）氏宅に御少憩の際の御光景を極彩色繪畫に描いたもので畫家は長岡の金子山眠といふ人

感激にこの光榮を後代まで記念しようといふ九二道氏の依頼を受け二ヶ年の歳月と二人の弟子に手傳はせて出來たものであるが、何分にも畏れ多いと固く秘藏してゐた、文書記錄の他御巡幸當時の模様をしのぶ資料としてはこの圖は忠實な寫實風の筆で遺憾なく當時を表現してゐる點資料として貴重な價値を持つてゐる

☆

たとへばその當時の御乘物は御駕籠、板輿、馬車、御料馬に跨られてゐたがそれ等も一々詳細に描かれてその背をしのばせてゐる

去る七日新潟市において東久邇宮殿下の台覽に供し奉り當時大帝を御迎へ申し上げた安倍すへ子刀自（邦太郎氏母堂）には殿下より親しく御言葉をかけさせられ種々御質問遊ばされたといふ【發見された掛圖】



麗悳莊平尾賛平藏

内外泉貨展覽會目錄

麗悳莊平尾賛平藏内外泉貨展覽會目錄

大日本國錢

和同開珎　銀錢　十九種
和同開珎　銅錢　八種
萬年通寶　三種
神功開寶　三種
隆平永寶　三種
富壽神寶　三種
承和昌寶　三種
長年大寶　三種
饒益神寶　三種
貞觀永寶　三種
寛平大寶　三種
延喜通寶　三種
乾元大寶　三種
切錢類　十一種
鑑錢類　四十九種
梶木錢類　三十七種
太閤巾着錢　金鑄　七種
太閤巾着錢　銀鑄　三十種

天正通寶　銀鑄　三種
永樂通寶　銀鑄　七種
文祿通寶　七種
慶長通寶　四種
元和通寶　二種
元和通寶　銀鑄番錢　三種
永樂銀錢　德川期鎧濟初式用　十七種
寛永通寶　二水寛永類　十二種
寛永通寶　古寛永類　七種
寛永通寶　古寛永金銀錢類　八種
長崎貿易錢　十八種
寛永通寶　新寛永錢　二百四十種
寛永通寶　六種
寶永通寶　當四錢類　五十一種
仙臺通寶　十五種
天保座萬年錢　二種
天保座試鑄淳祐錢　二種
天保通寶　吹埒天保錢　五種
箱館通寶　十三種
加越能通用錢　十四種

萬延通寶　一種
文久貨泉　四種
秋田銅鑄錢　十種
秋田波山錢　五種
鐵山通寶　二種
細倉當百文　五種
文久永寶　一種　銀座鑄
試鑄文久永寶錢　一種　金座鑄
水戸錢類　七種
仿鑄虎錢及仿鑄大黑錢　八種
鉛切手錢　十種
慶應通寶　十種
旗富士將來錢　十種
大日本美寶錢　十種
赤銅五分錢　十種
明治通寶　十種
米澤鉛錢　五種
光緒請負錢　二種
酒保切手　一種　軍隊內酒保專用
試鑄寶　一種
貞享通寶　一種
元祿德寶　二種
元祿開珎　二種
元祿太珎　二種
銀代通寶　三種

企鑄銀錢　一種
澤瀉永樂錢　一種
四松錢　一種
無文錢　一種
天保形文久銘錢　五種
封印錢　三種　大小二樣
大世通寶　三種
世高通寶　一種
中山通寶　一種
臺灣通寶　六種　永曆通寶折二型
無文錢　一種
乾元重寶　一種　背東國鐵錢
乾元重寶　一種
開通重寶　一種
東國通寶　一種
東國重寶　一種
海東通寶　一種
海東重寶　一種
三韓通寶　一種
三韓重寶　一種
開通元寶　一種

銀鑄

朝鮮國錢

朝鮮通寶　三種
十錢通寶　五種
朝鮮通寶　八分書　四種
常平通寶　一字背　二種
常平通寶　折二　當百・當五
常平通寶　當百・當五
朝鮮及韓國歐式幣　七種
右ノ外日本繪錢　三種
朝鮮別錢　二種

日本古金銀類　七種
慶長より明治迄各國金銀類　八種

明治新貨幣
明治二年至四十五年　三百五十四種
大正年度　三種
大正元年至十五年　六十五種
昭和年度　十四種
昭和二年至八年　三十種

支那國錢之部

周代布幣
空首布類　十種
尖肩尖足布　三種
尖肩高股布　二種
方肩高股小布　七種
方肩低股布　五種
垂肩布　三種
垂布小布　五種
平板布類　一種
方肩布　八種
有耳布　四種
尖足布　九種
尖足大布　六種
圓足布　十二種
三竅布　九種
圓肩方足布　三種
方肩方足布　二種
柄孔布　八種
柄孔長布　一種

周代刀幣
尖首刀　四種
圓首刀　七種
方首刀　七種
五種

博山刀 一種
反首刀 七種
周代 十一種
壁幣類 壁幣 十種
古圜法類 古圜法 十六種
以上錢銘ヲ略ス
秦代 十四種
半兩 三種
英錢 十種
漢代 五種
八銖半兩 三種
五分錢 三種
四銖半兩 三種
三銖半兩 三種
有輪錢 五種
新代 十三種
大泉五十 十種
梁刀平五百千 四種
一刀平五十六種
布貨十品 十種
泉貨六布 十種
貨泉 十種
貨 十種
五銖 十種
中漢代 二種

五銖錢 五種
東晉代錢 十種
六朝代錢 十種
五銖錢 十種
南北朝時代錢 十種
泉貨 十種
南朝宋錢 十種
四銖錢 十種
當兩大錢 十種
孝建四銖錢 十種
永光二銖錢 十種
民鑄二銖錢 十種
末子錢 十種
南齊錢 十種
五銖錢 十種
陰文四朱方錢 十種
陰文四朱錢 十種
陰文三朱 十種
臨蓄四朱 十種
中陵四朱 十種
梁錢 十種
五吉五銖錢 十種
大吉五銖錢 十種
元帝五銖錢 十種
敬帝五銖錢 十種
稚錢五銖錢 十種

文帝六五陳金錢 十種
北貨錢 十種
太和五銖錢 十種
魏 十種
永安五銖錢 十種
安西五銖錢 十種
永安五銖錢 十種
東魏錢 十種
永平五銖錢 十種
常樂錢 十種
豐安錢 十種
北周錢 十種
布泉錢 十種
五行通錢 十種
北齊錢 十種
五銖錢 十種
隋萬國通寶 十種
大布泉錢 十種
置樣五銖錢 十種
小白錢 十種
開元通寶 十種
朝錢 十種
朝錢 十種
朝錢 十種

沈郎五朱 王敦 涼造新泉 五銖 豐 後涼錢 漢安平 漢大興 五百錢 五 晉 大泉二千 大泉當千 大泉五百 直及直錢 蜀 五銖錢 五銖錢 五銖錢 魏 三國時代錢 後漢代錢

九種
十七種
五種
五種
五種
魏錢 十種
三國錢 十種
蜀錢 十種
吳錢 十種
大泉當千錢 十種
大泉二千錢 十種
晉錢 十種
五銖錢 十種
直百錢 十種
直及錢 十種
五銖錢 十種
蜀錢 十種
漢錢 十種
安平大錢 十種
漢錢 十種
五銖錢 十種
五銖錢 十種
大泉五百 十種
大泉十 十種
新代錢 十種
有輪半兩錢 十種
三銖半兩 十種
四銖半兩 十種
五銖半兩 十種
八銖半兩 十種
半兩錢 十種
秦錢 十種
英錢 十種
半兩 十種
漢代錢 十種
五銖錢 十種
五銖錢 十種
五銖

乾元重寶　三種
乾元重寶　當十私鑄錢　三種
乾元重寶　當五十私鑄錢　三種
乾元重寶　小平錢　三種
大曆元寶　七種
建中通元寶　三種
開通元寶　四十八種
得壹元寶　六種
順天元寶　九種
鶴　五字回錢　一種
開通元寶　一種
後唐　一種
後梁　一種
代
開通元寶　一種
天成元寶　一種
後晉　二種
天福元寶　二種
後漢　二種
周通元寶　二種
後周　二種
十國錢

永平元寶　三種
正天元寶　三種
通天元寶　三種
漢元元寶　三種
光天元寶　三種
乾德元寶　三種
咸康元寶　三種
楚　開通元寶　鉛錢　二種
乾元重寶　銅錢　二種
乾元重寶　當百錢　二種
乾元封泉寶　二種
天策府寶　鑄錢　一種
閩　開通元寶　鉛錢　一種
開通元寶　鉛錢　一種
永隆元寶　一種
南漢　一種
乾亨重寶　一種
乾亨通寶　二種
大有元寶　當百錢　一種
廣政通寶　二種
後蜀　錢　二種
南唐　錢　三種
永平元寶　錢子・當二・大錢手　三種
開通元寶　三種
崇寧通寶　三種
崇寧通元寶　三種
崇寧通寶　三種
崇寧通元寶　三種
崇寧重通寶　三種
聖宋元符通寶　三種
元祐通寶　三種
元豐通寶　三種
熙寧通寶　三種
熙寧重元寶　三種
熙寧重寶　三種
治平元通寶　三種
治平通寶　三種
嘉祐元寶　三種
嘉祐通寶　三種
至和元寶　三種
至和重寶　三種
至和通元寶　三種
慶曆重寶　三種
康定元寶　三種
皇宋通寶　三種
景祐元寶　三種
明道元寶　三種
天聖元寶　三種
天禧通寶　三種
祥符通寶　三種
祥符元寶　三種
景德元寶　三種
景德元寶　大錢　三種
咸平元寶　三種
至道元寶　三種
淳化元寶　三種
太平通寶　三種
宋通元寶　三種
宋　錢
千秋萬歲　七種
天慶元寶　二種
乾統元寶　二種
昌壽元寶　二種
大安通寶　二種
大康通寶　二種
大康元寶　二種
咸雍通寶　二種
清寧通寶　二種
重熙通寶　四種
統和元寶　五種
應曆通寶　一種
遼　開通元寶　一種
代
大唐通寶　七種
唐國通寶　三種
大錢　當十私鑄錢
當錢子・當二・篆書　三種
大錢　當五十私鑄錢
大錢　三種

大觀通寶 七種
政和通寶 八種
重和通寶 三種
宣和通寶 三種
靖康通寶 七種
靖康元寶 三種

春錢
銅・鉄

建炎通寶 一種
紹興通寶 三種
紹興元寶 三種
隆興通寶 三種
乾道元寶 三種
淳熙元寶 九種
紹熙通寶 二種
慶元通寶 三種
嘉泰通寶 三種
開禧通寶 三種
嘉定通寶 二種
嘉定元寶 一種
聖宋元寶 一種
聖宋重寶 一種
大宋元寶 三種

南宋代

小平・折二
小平・折二
小平・折二・當三
折二・錢小平
折二・小平
小平・折二
小平・折二・當三
小平・折二・當三
小平・折二・當三・當五・當十
小平・折二
小平・折二・錢當三
小平・折二
嘉定元年四川鑄
小平・折二

大定通寶 十四種
承安寶貨 一種
泰和通寶 五種
貞祐通寶 二種
齊 錢
皇昌元寶 二種
皇昌通寶 三種
皇昌重寶 二種

大朝通寶 一種
元 錢
朝

至元通寶 一種
至元大通 一種
至大通寶 三種
至大元寶 三種
大德通寶 一種
元貞通寶 一種
至元通寶 五種
至元元寶 一種
至元通寶 一種
至元統寶 一種
至元順寶 一種
天曆元寶 一種
泰定通寶 一種
至治元年 一種
供養錢
至治元寶 一種
至治通寶 一種
延祐元寶 一種
延祐通寶 一種
大元通寶 一種
大元元寶 一種
至大通寶 三種
至大元寶 三種
至元通寶 一種
至元元寶 一種
至正通寶 二種
至正元寶 四種

至元寶 一種
至元通寶 一種
紹定元寶 一種
紹定通寶 一種
寶慶元寶 一種
寶慶通寶 一種
寶慶元寶 一種
寶慶通寶 一種
寶慶寺寶 一種
寶慶寺寶 一種
寶慶寺

萬曆通寶　二種
泰昌通寶　二種
天啓通寶　六種
崇禎通寶　二種
弘光通寶　九種
隆武通寶　五種
永曆通寶　二十種
興朝通寶　三種
西順通寶　六種
大順通寶　十種
聰王之錢　三種
天命王錢　三十一種
永昌通寶　十四種
清順治通寶　十三種
康熙通寶　十六種
順治通寶　九種
雍正通寶　三種
乾隆通寶　三種
嘉慶通寶　十二種
道光通寶　九種
咸豐通寶　十三種
咸豐重寶　十七種
祺祥通元寶　五種

礦銀
小平・當十一錢・一兩
小平・折二・經五
小平・折二
小平・折二・五厘・一分
朝錢
小平・當十
滿字大錢

祺祥重寶　二種
同治重寶　二種
同治通寶　三種
光緒通寶　一種
光緒重寶　三種
宣統通寶　三種
利用通寶　三種
昭武通寶　三種
洪化通寶　六種
裕民通寶　三種
太平天國通寶　一種
開元通寶　三種
天聖通寶　一種
太平天國　三種
太平天國　一種
天國　七種
平靖通寶　二種
普庫車王錢
新疆錢
討伐軍錢
背天國寶
背聖寶
小平・二厘・一分
小平・一分
小平・一分・壹錢

中華民國錢

民國通寶　三種
福建通寶　三種
右ノ外不知鑄地年月品
壓勝品
撒帳品
生肖品
洗兒品
吉語品
鎮庫品
打馬格品
馬子品
無慮四百點

上代金銀
支那清代歐式幣　四百七十二種
同中華民國代歐式幣　三百九十五種
支那錢范類　二十種
支那幣壓印

安南錢之部

太平興寶　六種
天福鎮寶　七種
天南寶　越黎朝
天明道元寶　二種
天感元通寶　一種
紹豐泰通寶　一種
開建中通寶　一種
大治元通寶　三種
大定通寶　三種
大慶通寶　十七種
紹治元通寶　十二種
陳德公寶　六種
元新通寶　一種
應感通寶　一種
康和寶　一種
順天大寶　二種
紹平元通寶　三種
大越丁朝
大越陳朝
大越李朝
大越黎朝

大和通寶　一種
延寧通寶　一種
天興通寶　一種
光順通寶　一種
洪德通寶　一種
景統通寶　一種
端慶通寶　一種
洪順通寶　一種
光紹通寶　一種
元和通寶　一種
嘉泰通寶　一種
永壽通寶　一種
永盛通寶　一種
保泰通寶　一種
景興通寶　一種
景興重寶　一種
景興正寶　一種
景興大寶　一種
景興至寶　一種
景興巨寶　一種
景興泉寶　一種
景興永寶　一種
景興順寶　一種
紹統通寶　一種
乾隆通寶　一種
太平通寶　一種
背安南大字小字　一種

明德通寶　二種
大正通寶　二種
廣和通寶　二種
光寶通寶　一種

越　英氏

明德通寶　二種
泰德通寶　二種
光中通寶　一種
光大通寶　一種
景盛通寶　二種
景成通寶　一種
寶興通寶　一種

越南　後大南阮朝

嘉隆通寶　二種
嘉隆銀錠　六種
明命通寶　一種
紹治通寶　五種
嗣德通寶　四種
嗣德銀錢　十九種
同慶通寶　九種
成泰通寶　二種
啓定通寶　三種

佛蘭西政府錢　交趾支那・印度支那

大法安南　二種

西山　阮氏

六百分之一通寶　四十種

外ニ安南手類錢

以上ノ外ニ古錢ニ關スル書畫・木彫・器具等數十點

古代希臘、羅馬幣　四十種

歐米各國貨幣

歐洲及兩米幣　二百五十種

以上

昭和八年九月二十一日より二十七日迄於東京高島屋樓上展觀　附鉛槧代謄寫

追加

香雪書屋二峯君舊藏

空首布　百點

○英人チャンバレンは日本の研究家として世に
人の知るが、北住異国業者と記して或る考察をしたる時
北人を思ひ出したかとて北人と記して僅や消息を知ること
こともあるべし、折柄東京と共に書まつれ、業者の
書目の最初に北人と共に書かれたる小伝を
得たりとんとあり、北人がまだ幼少なること、うつかデ
ヲ、ハルンが意義初北人と称つて其の世話をうけたこと
北人の主要の著述の内ある所以をいつた。北人の
著述の内ある金がの低とんとする異国業者の
かりふべきこがあるかれ思ふ。

王堂チヤンバレン先生

佐佐木信綱

明治時代に特にわが日本學を研究した外人が三人あるが、いづれも英國人であることは、一奇と云はねばならない。それはサトウ氏と、アストン氏と、バシル・ホール・チヤンバレン先生とであつた。自分はチヤンバレン先生には親しく提撕を忝うし、先生の教示によつて、和歌の歴史的研究に志すに至つたというてもよい。その恩惠は永く忘れ難いところであつて、古くは「帝國文學」の一文によつて、ゼネヴ湖畔に去らるる先生を惜しみ、近くは「華甲記念文集」に掲げた文詞にも先生を偲んだことであつたが、此處にまた先生の面影を傳へるのは、先生に對する自分の尊敬の心が、幾度繰返してもつきないものがあるからである。ことに去々月、自分は手紙と華甲記念文集と象牙細工の置物とをお贈りしたに對して、直ちに返書をおくられて、一入感深いものがあるので、かつて自分が親しく承つた先生の履歴をかいた一文と、筧五百里氏の文章とによつて、この一小篇をつづることとする。

先生の直話によると、先生はわが日本の嘉永三年（一八五〇）十月十八日、嚴君が赴任されてゐたポーツマス軍港で出生された。故に本年は八十四歳に當られるのである。父君は海軍中將であつたが、先生の二十九歳の時、世を去られた。母君は賢母であつて、先生を懷妊された時、自らギリシヤ語とラテン語を學習され、所謂胎教に努められ、先生出生後は

乳母に佛人を傭うて、先生を早くから外國語に親しまさせられた。然し不幸にも先生の七歳の時、この聰明な母君は世を早くせられて、先生の教育に十分つくされることを得なかつた。

先生の名のバシル・ホールは外祖父のそれによるものであつて、外祖父はキヤプテン・バシル・ホールとよばれてゐた船長であつた。この外祖父の事に就いて、先生と東洋とを結ぶ緣の綱が淺くないことを語る逸話があるので、餘談ながら記しておく。

奈翁戰役後千八百十六年に、英國の船がはる〳〵東洋を訪うて、支那にいつた歸途、琉球沿岸の海底測量を試みた。しかして歸歐の途に、セントヘレナ島に流謫の奈翁を訪ひ、面會することが出來た。この時奈翁は、キヤプテン・バシル・ホールに向つて、「今度の航海で變つた處に行つたか」と尋ねた。キヤプテンは、「琉球と云ふ小さい島に行つた」と答へた。すると奈翁は、卒爾として、「その島人が用ゐる武器は何か」と問うた。「極めて平和な島で、別に特別の武器はなかつたやうである」と云つた所、奈翁は聲高に、「どんな小さい國でも、世界の中に、爭鬪せず、武器を持たぬ國があるものか」と言つて笑つたといふ。

この外祖父の名のバシルは王の意で、ホールは家をさす所から、先生は王堂と譯して號とされ、藏書印にも、「英　王堂藏書」と刻されて押されてゐる。

先生の兄弟は二人あつて、一人はヘンリー・チヤンバレンと云ふ海軍將校であつたが、後、海軍思想の普及に盡力し、今一人のホウストン・チヤンバレンは、歴史哲學者として聞え、歴史哲學その他の著書が多く、その夫人はかの樂聖ワグネルの女である。

格を雄辯に物語るものであつて、學者として奥床しい極みである。かうして前後四十年に及ぶ日本生活の研究を終へられ

以上が先生の家族であるが、七歳慈母に別れて以後、八歳から十六歳までは佛蘭西のヴェルサイユで、祖母の手に養はれ、其の地の學校に通學し、各國語を學び、長ずるに及んで文學の研究に志したが、父君の希望によつて、十八歳の時英國の銀行に勤務した。しかるに過度の勞務の爲め健康を害し、今尙惱まるゝ眼病及び神經痛をなやまるゝに至つた。その病の爲め、醫師の勸めに從つて、東洋への遠洋航海に出づることとなつた。卽ち茶を運送の爲め東洋に向ふ帆船に乘客となつた二十四歳の青年紳士は、六十九日を費して喜望峰を迂廻し、オーストラリヤに着き、更に三十八日にして憧れの東洋の上海を見た。こゝより當時は外輪船であつた米船に投じて長崎に來り、初めて日本の地に第一歩を印した。次いで横濱に上陸したのは、明治六年（一八七三）五月二十九日のことであつた。維新後僅に六年の當時の日本が、この若き遊子の目にどんな風にうつつたことか。

かくて東京に來りて、芝の青龍寺に住し、濱松藩士荒木氏に和歌物語の講義をきき、先生の日本文學研究の序幕は開かれた。然しこの未知の異國人にとつて、その學習は容易の事でなかつた。ことに初めから文學書を學びたいとの希望で、初めて接した古今集の、「待つ人も來ぬものゆゑに鶯のなきつる枝を折りてけるかな」のつるの意義が理解し難くて困難されたといふ。後鈴木庸正氏に從つて、萬葉集枕草紙等より謠曲狂言などを涉獵し、自ら和歌を詠じ、橘守部の後なる東世子刀自に作歌を學び、或は守部の遺著を借覽し、益々その研究を深められた。かくの如き努力の結果として、かの名著である萬葉古今謠曲等を譯された日本上代の詩歌（明治十三年、一八八〇）英譯古事記（明治十五年、一八八二）其の他の著作が成つたのである。中でも、最も優れたものは英譯古事記であつて、アストンの日本書紀、サトウの祝詞の飜譯と並び稱せられるものであつて、日本上代の文化を外國に紹介した最初の權威となつた。上に述べたごとく、近く先生から贈

られた手紙によると、此の書は近頃再版されて、一部を宮內省圖書寮に献納されたことが知られる。

これより先、明治七年七月海軍兵學寮に教鞭をとられ、十三年病氣の爲辭任歸國されたが、やがて兩度來朝され、翌十四年四月兵學寮に教授となられたが、翌年六月辭任され、十六年十二月勳五等に敍せられた。十九年、時の文相の森有禮氏は、倫敦に於いて知已であつたので、先生を文部省に聘した。この時先生は、日本國語辭典の編纂を志されたが、果さないで終つた。併し明治二十年四月文部省の命によつて、「日本小文典」を編み、文部省より刊行された。

先生が文部省に入つた十九年の四月、外山正一博士の推薦により、當時の東京大學文科大學の教師となり、博言學及び日本語學を教授された。この先生の指導のもとに、上田萬年博士芳賀矢一博士等が出られた。在任中、大學の命を受け、北は北海道より南は琉球まで行き巡つて國語の性質を明らめんことに勤められ、アイヌ語琉球語等に就いての研究を公にされた。明治二十三年三月、病の爲歸歐、健康保全を計られた。その際大學より、「歐洲に於ける極東殊に日本語學の現況及び將來」についての調査を委託されたが、同年九月病の爲解傭を願ひ出で、大學を去られた。明治二十四年、その功に報いる爲、東京帝國大學名譽教師の稱號を贈られた。其の後も屢來朝されたが、四十三年六月の訪問には、九州まで遊ばれ、最後の研究旅行をなされた。その十一月初め、自分は箱根宮の下に先生に招かれた。しかして近く瑞西に移り住むべき豫定なることを語られ、かつ藏書について相談をうけた。多年蒐集された和漢の珍籍を讀み見る人の少ない歐洲に持ち行くは學者の德義でないとて、そを散逸せしめず活用すべき學者の手に讓りたき希望をもらされ、一切の事を自分に委託された。それで上田博士に計り、王堂文庫の藏書一萬一千卷は、博士の書庫に收められゝ事となつた。これは先生の人格を雄辯に物語るものであつて、學者として奧床しい極みである。かうして前後四十年に及ぶ日本生活の研究を終へられ

以上が先生の家族であるが、七歳慈母に別れて以後、八歳から十六歳までは佛蘭西のヴェルサイユで、祖母の手に養はれたのであるが、翌四十四年三月勳三等に陞敍され、瑞寶章を賜はり、同月思ひ出多き日本を永久に去り、瑞西ゼネヴ湖畔に餘生を送つてをられる。然しこの日本生活の終結は、直ちに先生の日本人の愛や日本及び日本文學に關する研究の終結を意味するのではない。日本俗語文典、日本事情、文學のしるべ、及びメーソン氏と合著の日本案内記等は、皆先生の永久に變ることない日本への愛の結晶でなければならない。現に近着の書狀にも、日本事情の佛譯を完成刊行されたと書いてある。

先生が常にいはれた言に、「學者――殊に他國にある學者は絶えず旅行と讀書とを爲さなかつたならば、ともすると『いはゆる井の中の蛙』となる譏を免かれないであらう」と。この言葉の通り四十年間の日本滯在中各地を旅行し、東西南北殆ど訪れざる所なく、唯秋田及び日向の一部分のみ足跡を印されなかつたと云ふ。千島及び琉球に至る廣汎な採訪旅行の收獲が、どんなに先生の研究を廣くし深くしたか説明する必要はない。中にも北海道には幾度も渡航せられ、アイヌ語の研究に努力されたのであるが、當時未開の邊地に骨められた苦しみは非常なものであつた。アイヌ語研究の大家バチェラー博士から直接耳にした話に、博士夫妻が北海道に渡つて、アイヌ人の家屋に同居し研究を續けてをられた時、先生が遙々渡道來訪されたが、小屋の中にアイヌの一族、博士夫妻が同居してゐるので、先生の寢られる餘地もなく、寢臺の代りに箱をすゑ、其の上に藁などをつみ重ねて假寢の夢を結ばれたこともあつたといふ。また歐洲に歸られたのも、一面は見聞を廣め、世界の大勢におくれない爲めであつて、先生の學問への熱心によることであつた。殊に明治二十五年（一八九二）の歸歐の際には、マニラの寺院に數十日滯在して、古く日本に渡來した伴天連の遺書につき調査されたこともあつた。

旅行と共に絶えず讀書を試み、その研究を深められた。しかして先生の著書を重んぜられたことは、驚くべきほどで、自身かつて、「予が生涯の最も尊き事業、予の全體は予の著書に盡く。予は予の著書にベストを盡くしたのである」と云はれたのにも、先生の覺悟が窺はれる。この言葉の通り、出版後も引きつゞき訂正し、版を重ねる毎に增訂改版され、非常な努力を拂はれた。かの「日本上代の詩歌」のごときは、初期の著作ゆゑ、誤謬があるとて久しく版を絶してをられたが、明治四十三年十一月「日本の詩歌」と改題し、俳句の一章を加へて、面目を改め刊行された。日本事情の六版、日本案内記の九版――何れもたゞに版數を重ねるのではなく、改版されたものであつて、先生の熱心を證して餘りある。

この樣な苦心の積り重なつた多くの著書は、學界に影響すること少くなく、就中英譯古事記の序論には、古代日本の宗教思想について記すこと多く、幾多興味ある問題を提示してゐる。これは飜譯されて、明治二十一年に「日本上代史評論」となり、當時の國文學界に衝動を與へ、ひいては新國學復興の氣運を促がすことの一原因ともなつた。また日本小文典は、遂に或る學者をして「日本人日本文法を講ずべし」と奮起せしめ、文法研究を刺戟したことは云ふ迄もない。この文典は英文典の組織にならつたもので、必しも日本文典として成功したものではなかつたけれども、その間接の功績は大なりと云ふべく、また外人に日本語を教ふるには便宜であつたことも忘れ難い。

この如き輝ける貢献が、あのいたましい病氣と戰はれつゝ、なされたのである。先生は、「予が生涯は病に戰つた生涯である」と語られた通りに、青年の頃害した健康は遂に恢復することなかつたのである。獨佛伊西露日韓ヘブライギリシヤラテン等十餘國語に熟せられ、殊に日本語は、古典的修養により、最も典雅に美くしく、日常の談話の中にも、「予の一生は根こじされた木のやうに」とか、「けぢめが定かでなくては」など古語、雅語を交へ用ゐられた。しかして我が國の古典

以上が先生の家族であるが、七歳慈母に別れて以後、八歳から十六歳までは佛蘭西のヴェルサイユで、祖母の手に養はれたので、交友は多くなかつたけれども、義俠に富んでゐたことは、かつて朝鮮亡命の士である金玉均に就いて配慮されたことや、先生の日本事情に感じて日本に來つた未知の青年ラフガデオ・ハアン氏を好遇したことなどは、先生の性格を示してゐる。

また先生の著書の日本を世界に紹介するに功あつたことは、メーソン氏と共著の日本案内記は最もよく行はれ、數版を重ねてゐる。本書に箱根の地を激賞され、山水の美は勿論、箱根の溪谷より來る山の氣と相模の沖より來る海の氣とが打交はる健康地と紹介された爲、外人にして日本を訪へば、箱根に赴かぬものはない。また日光の廣く知れ渡つたのも本書の功であつて、人工の美と自然の美の合作になる日光の美は、かくして、世界的になることを得たのである。また今一つ附け加へなければならないのは、「日本事情」とハアン氏の來朝である。「日本事情」によつて日本を知つたハアン氏は、單身來日して、横濱に上陸するや直に先生の許にカバンをおろした。日本流にいへば草鞋をぬいだのであつた。しかして先生の好意により、先生が懇意であつた外山正一博士の仲介によつて出雲松江の中學に赴任することになり、遂に、小泉八雲氏とならるるに至つたのである。しかしてこの前後ハアン氏と先生との間には交通繁く、それらの書簡が集められて、一冊の書をなしてゐると云ふ。

外人であつて、先生ほど日本語及び日本文學に通じ、よく日本を世界に紹介したものは他に求めることは出來ないであらう。

先生の住居は、始め赤坂であつたが、後は横濱の四番館ホテルに移り住まれ、健康の爲めに春一月と夏から秋への三月を箱根の富士屋ホテルに過された。同ホテルの主人山口仙之助氏は、先生の著書によつて箱根が外人に知られたことを德として、先生の言葉のまに〳〵ホテルの構内に地を供して先生の使用に委ねた。先生はここに書庫を立て、王堂文庫と號され、藏書和書一萬一千卷、その他夥しき洋書の數々を收められた。ここに藏書の中に埋もれて、搖り椅子によつて、目をつぶつたまゝ、若い佛人や日本人の助手に音讀せしめ、靜かに聽きつゝ毎日數時間を研究にいそしまれたのである。

この書齋の窓より眺めやる溪谷には、早川の流岩にせかれて白く散り、打向ふ明星が岳には芳萱絲深くして、中腹の岩かげのさ百合の花も手にとるやうに眺められた。そこにして先生の物語をきいた自分の思ひ出は、とはに消ゆることはないであらう。先生も亦、今、モン・ブランの頂の雪遠く見はるかさるゝゼネヴ湖畔にあつても、山靈を慕うて四度登られた富士の高根を見さくる箱根の地に通はないことがあらうか。

先生は視力が非常に衰へ、殊に三年前手術をうけて、其の以後すぐれないと悲しんでをられる。わが日本國の爲めに、日本學の爲めに、功蹟おほき老學者の晩年の、やすらかであらむことを、お祈りしてをることである。

私は今迄日本の社會史に就いての一般觀念と、其の國民の性格を形作り鍛錬した諸々の力の性質に就いての一般觀念を傳へようと努めたのである、此の企圖は未だ甚だ不充分であるのは言を俟たない、此の問題に就いて滿足すべき著述の出來るのはまだ遠い將來の事である。併し日本はその宗教と社會進化の研究を通じてのみ理解され得るといふ事は、既に充分に示されて居ると私は信ずる。日本は、確實な能率を以て西洋の應用科學を利用し、絶大なる努力を以て數百年間の仕事を僅々三十年間に成就して、西洋文明のあらゆる外形を維持しては居るが、併し社會學的には、古昔のヨオロッパに於ける基督の出現に先き立つ數百年以前の狀態に相當する狀態に留まつて居る、東洋の一社會の奮くべき光景を吾々に見せて居る。（小泉八雲著・神國日本・定價一、八〇）

源内の肖像について

岡田唯吉

源内の肖像畫は小生の知て居るものだけでも數種あります、所で寡聞であり日つ畫に對する知識を持て居ない小生は其畫者及原據の如何を知ることが出來ない爲適當なる批判を下し得ないことを甚だ遺憾と致します、然しながら將來に於ける研究上の參考に資する爲小生が其畫像に對する感想の一端を順次披瀝して最後に小倉右一郎氏の彫塑像につき紹介致しまして斯道にたづさはつて居られる方々の教を請ひたいと存じます。

一、戯作者考　補遺　平賀鳩溪像　乙巳仲秋默老漁隱因故老之說摸寫

長顱で總髮に束ね顏面は長圓で顎長く頰がすいて顴骨隆起して居り前額眉間狹く眼光烱々頗る覇氣に富み一見神經質らしく見える紫羽織に黑衣縞袴を着け煙管を右手で支へて口に啣へやうとして居る所を畫てある

戯作者考補遺と云ふ書は弘化二年（二五〇五年、仁孝天皇家慶　松平頼胤）乙

戯作者小傳にあさからずして此二部書に默老の既知して居る所を增補し猶又作者の肖像を加へて著したものであります。

默老は安永元年（二四三二年後櫻町天皇家治）生高松藩執政に擧げられて藩庫を充實させた功勞者で傍ら文學の道に優れ特に馬琴と親交深く馬琴の里見八犬傳九輯新輯編金瓶梅五編に對し默老が批評をして居る位であります兼て詩歌畫を能くし常に和漢稗史小說を見ることが好きであつた。

源内肖像は默老七十四歳の時即ち源内歿後六十六年を過ぎたの畫でありまして本書の凡例に次ぎの記があります。

平賀鳩溪は最高名の人たりと雖も其歿年久しき故に其面目を知るに由なけれども古老の鳩溪の知己の人あつて其形をかにかくと語るにつきて想像で余が圖する所なり。

畫いた年代の明である源内肖像畫としては最も源内時代に近いもので又原據も先づ確實と見てよからうと思はれます

二、近世奇才平賀源内實記　平賀源内像　醉翁寫

稍長顱で總髮に束ね顏面は稍圓い方で頰も圓く肥て居り前の神經質らしく見えるに比して溫厚らしく見える黑三ツ紋(梅鉢カ)羽織を着し拱手して綏つくりとかまへて居る。

本書は明治十六年十一月東京朝陽館刊行で東京府平民神田五軒町田島象二著である。

該著は天明八年皐月櫟齋老人著平賀實記が源內の一世の事績を傷けやうとしてゐる點を條擧しつゝ其寃を雪ぐ爲に作られたもので右實記の謬を削り實を添へたものであります此源內肖像畫の落欵には醉翁寫とある此醉翁は著者の田島氏で何を原據として寫したかゞ分らないことを遺憾とします。

三、少年文學 第二十八編 平賀源內

稍長顱總髮に束ね顏面稍圓く頰も圓く肥り額廣く耳大きく圓滿に福々しい相貌である茶五ツ紋(梅鉢)着物に袴を着し黑五ツ紋(梅鉢)黑羽織を着し堂々たる風彩であります此畫は彩色畫で用紙の周圍が所々虫蝕されて居る所をも寫し刷られて居る。

顏面や羽織等が第二の畫と幾分似て居る所は其原據が相似て居るかも知れぬが畫其物は全く別物であります。

本書は明治二十七年六月東京博文館發行水谷不倒著で普通の源內傳でありますが其肖像畫の出所は明でありませんけれども從來に於て私が見て來た源內肖像中最も穩かで淺たりとして立派なる風彩の人と見えます。

四、偉人皮叢 第六卷 平賀源內

面相は第一の默老畫の像に酷似して居り服裝は第三像のを參照したらしく見える。

本書は明治二十九年八月東京裳華房發行源內像は小川一眞寫眞彫刻銅版印刷(縮寫)である。

此畫は高松家中藏源內像に原き洋畫家中丸精十郎が二十歲餘の頃畫いた油繪を縮寫したものだと聞て居ます、多分第一の默老畫を原據として油繪に直したものでありませう。

所で本書は第三と同じく水谷不倒の著で第三の少年文學發行の時より二年後の出版で前と全く異る源內像を挿入

したことは如何なる動機によるか之は著者水谷氏に尋ねなければならぬものと思はれるが或は本書出版の頃に此中丸氏の洋畫油繪が出て珍らしい所から前の源內傳に採用した畫像と異つたものを特に採用したのではあるまいかと察せられます。

五、奇人風來山人

一見して晩年の相らしく見える體軀肥滿し圓顏(稍長い)で前額の上部稍剝げ總髮の先きをきり茶筅髮とし顎髭(髭は顎全體に生え兩耳の下まで續て居る)を長く延ばし紋附羽織を着し左手に如意を持ち右肱を卓にもたせて居る所醫者らしく見える點がある此の像は他の源內像に比すると亦一特色のある畫であります。

本書は明治卅六年七月東京求光閣書店發行松蔭子述獲麟野史著作である源內は一身百技を兼ぬる偉人で宛も百足虫の脊に千手觀音を騎して千手百足一時に運動する如き奇人だから源內傳を聽くものは一人の傳で十百人の傳を聽く感がして其裨益は中々多大であるに係らず俗流社會にはまだあまり聽かされて居ないのを遺憾とし之を痛快なる講說として滿天下の人士に普く知らせたいと思つて發刊したものであります。

六、昭和三年十月 第九回帝展出品小倉右一郎氏作彫塑平賀源內

帝展審査員本縣大川郡石田村出身彫刻家小倉右一郎氏が鄉土の偉人中同郡出身先輩たる平賀源內(大川郡志度町)久米榮左衞門(大川郡相生村)の二人に日柳燕石(仲多度郡榎井村)を加へて讃岐三先賢の像として出品し多くの觀覽者に見させたものであります。

これは小倉氏がわざ〳〵鄉地に歸縣され木村默老著戲作者考補遺中の默老畫である源內像を參考調査し又一面源內の人物容顏等に關するあらゆる史料をも種々研究した上で同氏が丹精をこらして此源內像を造り上げたものであります。

源內顯彰會に於て源內銅像を建てたのは此小倉氏の製作にかゝるものでありまして先づ之ならば源內像の眞に近いものとして信用し得るものでありませう。

源内が備後鞆の溝川氏に製陶を勸めたることゝ源内生祠

岡田唯吉

廣島縣鞆町國幣小社沼名前（ヌナクマ）神社宮司金原利道氏は去る昭和四年十月稿「鞆に於ける平賀源内の生祠に就て」を備後史談第五卷第十一號（同年十一月號）に發表せられ後昭和七年八月備後史談第八卷第八號誌上に「平賀源内の生祠發見さる」の題で右金原宮司は生祠の研究にあつい加藤玄智博士と共に調査の結果平賀源内の生祠と認められたるものを史蹟名勝地に指定を受け保存を講じやうとする爲めに町當局を經て主務省へ申請書を提出することゝなつたと掲げられて居た其顚末の大様を記せば概ね次の如くであります。

鞆江の浦町の裏山醫王寺表參道の左麓に多量の土を採つた跡がある其斷崖の下三尺圍り程の樹木に二坪位の石境を設け大きな割石を二つ積て其上に小さい祠を祀り其左に丸い石を三つ積み重ねた石塔がありて之を三寶荒神と稱へて居る尙其左に一本の石標が建てられ正面に「南無妙法蓮華經平賀源内神儀」と刻し右側に「寶曆十四年甲申三月七日」左側に「慶應四戊辰七月廿八日溝川榮助同茂助同利三郎立之」と刻してある之を一般に平賀源内の墓であると傳へて居るそれは從來に於て源内の獄死說と脫獄後諸國流浪の後天命を以て終はられたと云ふ兩說があつた爲或は鞆が先生終焉の地ではあるまいかと考へられたからでありませう然し此墓と云ふものを建てた溝川家の言傳へによると源内の生祠であると云ふことが判つたのであります左に溝川家に傳へられて居る口牌を述べませう。

溝川氏の先代は漁業をして居た平賀源内先生は度々鞆へ來られた。然して多く船中に寢泊りして居られた。其時も七日ばかり船に居られた溝川氏の先代が平賀先生に雇はれたのが即ち此時で滯在中四方山の話から漁業を廢め粘土を以て生活とよといふて現今生祠のある地の土質が陶器に適

して居るから之を以て製陶をせよと云はれ源内燒を傳へたものと見えます然るに當時溝川氏に陶窯を造るほどの資本が無かつたので遂に製陶には手をつけず其土を壁土として賣出し明治になつてからも鞆町の壁土は殆んど之から掘出して賣り同家は多額の資産をつくつたものであります而して陶器を始めるに當て平賀先生は三寶荒神を祀れと敎へられた即ち地神荒神平賀源内神として祭れと云はれたと云ふことである、土の神竈の神平賀先生を神として祭つたもので溝川氏も固より陶窯を始める積りで居たので先生の指圖のまゝに祀つたのがこの濫觴である。

按するに平賀先生が溝川氏の先代に陶器のことを傳へられたのが寶曆十四年三月で源内神儀として三寶荒神を祭つたのも此時でありませうさうすると三重の石塔即ち平賀先生の生祠は寶曆のもので爾來報恩の祀典を續けて慶應四年に至り其事績の湮滅を慮つて別に一基の石標を建てたものと思はれる又溝川家は法華宗であるから自然御題目を刻したものでありませう。云々

これによると源内の鞆に滯在中溝川氏に製陶のことを傳へたのが寶曆十四年三月であらうといひ又鞆は源内鄕國讃岐に近いから度々鞆へ來たであらうと察して居るやうであるが其實源内は寶曆二年鄕國を出てからは長崎に遊んで大阪京都靜岡等を經て江戸に出て後此を根據として活動したのでありますからさう度々鞆に遊んだ云々は疑問である……源内が二回長崎に遊んだことがある往復の途か或は源内が寶曆二年長崎初遊後大阪に至り中島屋喜四郎に砂糖を傳授した時甘蔗栽培地は備後がよいと云つて中島屋と源内は同導して備後に入り實地踏査をしたと云ふことが鳩溪實記に載せられて居るからそれが事實あつたとすれば其時かも知れない。

而して一面源内の動靜を考へて見まするに源内は寶曆十三年夏物類品騰を出版し其名聲天下に轟き同十一月には平線儀を製したりして源内一代中最も得意の時代であり

まして翌十四年二月には火浣布をつくり同八月（六月二日明和と改元）には火浣布隔火包紙を創製、十月には「五百介圖考」成り翌明和二年八月には火浣布略說刻成ると云ふ狀態で中々繁忙の境遇であつたから所謂寶暦十四年三月の頃源内が鞆津に出て行く餘裕もなく序もなかつたらうと思はれるので私は此年月日を寧ろ源内生祠創立の日と見てよからうかと察せられますが尙ほ研究を要するものと思ひます。

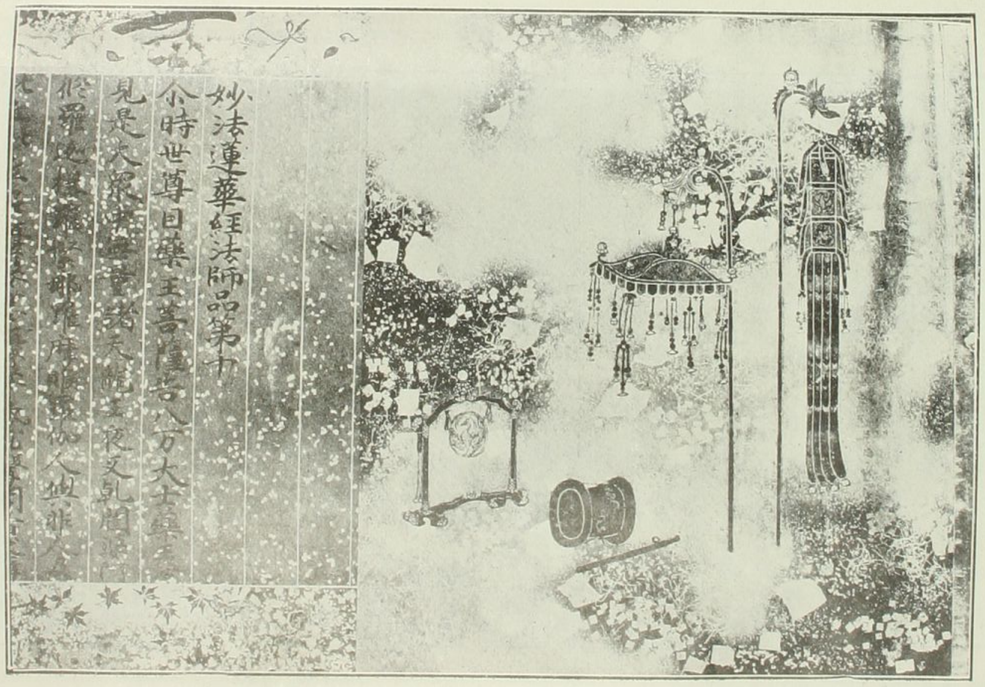
若し鞆地方に源内關係の史料が存し當時源内が鞆に來て陶器製造のことを溝川氏に授けたことは確實であると云ふことになれば源内傳に一新史實を發見することゝなると存じまして目下同地に照會中であります。

尙溝川家に傳へられて居る口牌に源内先生が何時何處で死ぬかも知れぬ誰が墓石を建てゝくれるか分らぬ仍てこの三つの丸石を立てゝ「地神、荒神、平賀源内神」と唱へて三個の丸石を祀つて、しるこ辭のやうに云ふて居た云々とある

これは源内が生きて居る中から自分の墓を造つて置くと云ふ意識に該當する所がある而してこの傳說から三個の丸石は地神荒神平賀源内神との三者を象徵して居るのであるから其三個中の一ケは確に源内を神として象徵して居ると同時に生前より立てた墓石の意味をも含んで居ると見られる加藤博士の所謂生祠と云ふ意義の二つ（他から建てられるものと自分自身で建てるものと）ながらを有して居る即ち源内自身にも自己の神意識があり溝川氏も亦此大恩人の神惠に感激して居たのだから三ケの丸石の一は自造と他造とを一緒にした樣な生祠と見られる感があると同時に源内生前の墓石とも考へられる性質のものである。

右生祠所在の畑は元溝川家持であつたものが今は柄郵便局長酒井氏の有になつて居るので一時生祠は少し下の溝川氏宅裏に移されて居たのを斯ういう由緒から金原氏より局長の快諾を得て昭和三年元位置に復して祭を絶えさせぬことにして居るさうであります。

嚴島經　（大日本書道史參照）



嚴島經願文

（大日本書道史參照）

弟子清盛敬白夫以擲槃威芳自浣多陀利華之霧演污水禦逆歸薩婆若海之波和光同塵不其然乎伏惟安藝國伊都伎嶋大明神者載宮殿而種存恒典一臣權孤州之叢蘇四面臨巨海之渺瀰謂其靈勝則如雲遊蓬萊之在乳海之外謂其棲構則猶金殿玉樓之作梵闕之間凡厥靈驗威神言語道斷者也於是弟子奉自幼專致欽仰利生揚名人保家門之福像夢感無誤平給子弟之榮華今生之願望已滿未世之妙果豈期相信之密社是觀世音菩薩之化現也又往年之比有一沙門相語者曰願者發心之者所請將社必有發得自開斯言偏以信受歸依平意趣在于並復事障經論之說百非書見之文乘悉上語既似勇虛妄猶倩思諸法之空不空在一心之信者欲效漢主之信日輪也河上之浪恩佑水雪屋之恐父蟲也草中之石暗飲羽何況百數千如說而為經謂之妙法二十八品頌而為人謂之觀音從不無通現而者神謂之密社不遠雖無利益惟同者從不退金輪之手者提心之花變若欲上品蓮臺之如者提道建陶淵數心之一數莫成經始而今雖者在家之中之有宋道之在朝者而營者謂佛菩之業集海內藝者生徒樂之望者是篤行之所致也應之今然欲光以弥彼經報審欲發淨心奉書四妙法蓮華經一部廿八品無量義觀普賢菩薩經各一卷法華經若一卷便奉開下金銅萬人合可安置之作寶殿矣弟子并家妻三品成衛府平及他子息女合家僕都盧世人各各一卷所令書寫者盡其色花敬蓮現之文出自善容之合力玉軸綠綺之妙成自一族之同情盡右廟堂功德者得利益也二年之天暮秋之候自朝年奉賀蕭敬讃華偈始自明年仰微妙誦以春年事不于夫復疑移倫彼奧如之言稱奉彼於證酬之示條與功德奉貢宮社鎮護國家之威奉殺百王成就衆生之願弥過三五代感龍宮之淺鏡設不宿易雖心特重九卿之詔孤遇又恭稱廣宮相傳唯願遂得元亨之道心必隆順次之往生進愛无始之泥垢雖似實之滿度空退觀一心之本源猶虛日之照霜霽然則百年之所于今見是至極中自證西方雖下品不煩猶用法性示教蓮華之教諸中道示脫光利物代寫佛素樣之卿能三生長相引導浮影今日之願百趣如斯乃至福業所華四苑不限彼日

長承二年九月　日　平清盛